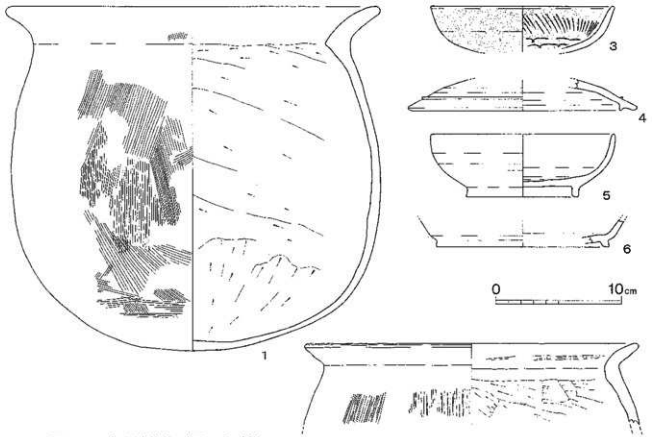


B55図　SE01出土遺物実測図1（S=⅓）

5はほぼ完形品、6は小破片である。5の高台は直線的に立ち上がり、体部は丸みを帯びて湾曲し、まっすぐに伸びた口縁部に至る。6は小さく外に踏ん張った高台で、屈折して体部へと立ち上がる。B68-5・6は砥石で、5は流紋岩製、6は不明である。欠損して共に破片状態となっており、6は1・2層出土の破片同士で接合している。5・6共に現状で全面を利用し、5は荒研ぎ・中研ぎ・仕上げ研ぎがみられるが、6は荒研ぎ・仕上げ研ぎとして使用されている。

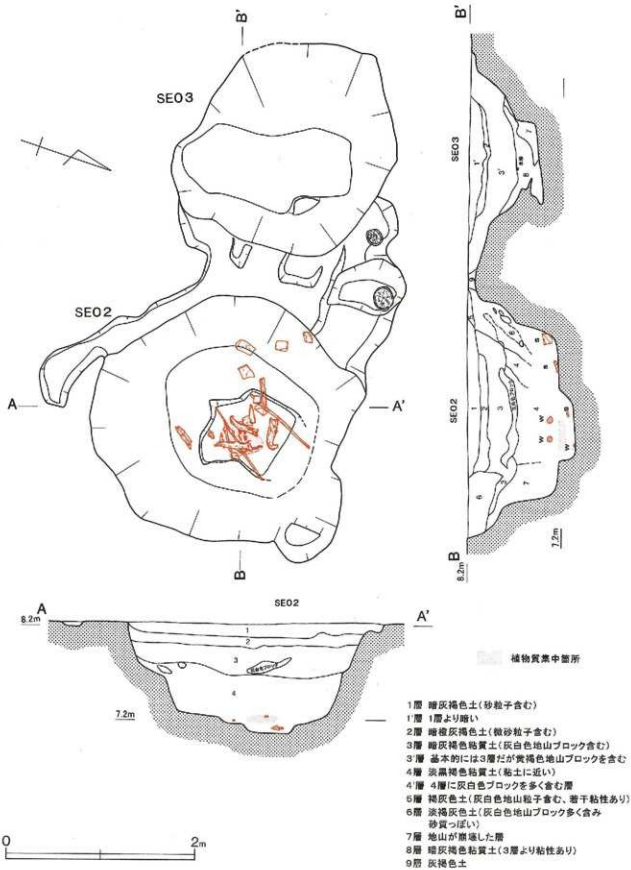
水溜部から土器は出土しておらず、井戸として使用されていた時期は不明ではあるが、上半部に土器が集中して置かれていた時期としては、前記した出土遺物などより、8～9世紀と考えられる。

SE02（B56・B57・B68図）

H-37・38Gr内、標高8.2mで検出した。平面は不正円形を呈し、径2.6m、深さ1.2mを測り、断面は漏斗状を呈する。素掘の井戸であると考えられ、最下部は水溜部状を呈している。

底面から10数cm大の礫3点と長さ85～90cm、径2～3cmの木棒が2本出土した。その上の水溜部上位からは厚さ5～7cmの革のような植物質の密集箇所を検出した。浄水のための施設であろうか。また水溜部から上の4層下位からも自然木及び礫が出土した。

B-B'土層断面図より観察すると東西両側に縦に延びるラインがあるが、これより内側が井戸内、東側の7層は途中崩壊したものと考えられ、7層下位も途中崩壊して4層が入り込んだものと考えられる。西側も6層下位は崩壊して4層が入り込んだものと考えられる。6層は大きく掘り方を掘った後に埋め込まれた層で、内部の井戸内は再度掘削して設けたものと考えられる。途中検出される灰白色ブロッ



B56図 SE02・03実測図 (S=1/40)

B57図　SE02出土遺物実測図（S=⅓）

クは井戸を廃棄した際に人工的に埋められたものである。

出土遺物は、弥生土器・古式土師器・土師器（胎土の緻密な朱塗りを施したものあり）・須恵器・陶器・瓦質土器の破片1袋分及び石製品である。上層から下層まで同じ様な遺物が出土しており、弥生土器・古式土師器・須恵器・石鍬（B68-7）・石鎌の未成品（B68-8）などは混入品と考えられる。縦層である6層からは古式土師器・土師器・前記した石鍬が出土している。

B57-1～7はそのうち実測可能なものである。1～3は土師器で、1は高台付き坏、2・3は小皿である。1は底部糸切りののち高台貼り付け後、回転ナデを行っており、内面にはススが付着する。2・3は底部回転糸切りで、2は直立ぎみに、3は開きぎみに立ち上がる。4は緑釉陶器の高台付き皿である。高台は削り出しで、全面施釉されている。5～7は瓦質土器である。5・6は小片ではあるが鍋と考えられるもので、5は口縁端部が平坦面をもち受け口状を呈し、外面にススが付着する。6は口縁部が「く」の字状に屈曲して外反するもの。7は擂鉢の片口部である。B68-7・8は流紋岩製の7は石鍬、8は石鎌の未成品である。7は縁辺加工がぐるりと施され、表裏面は研磨したような痕跡が観察される。刃部が幅広なのは、欠損後の2次使用ではないかと考えられる。8は若干湾曲した柱状の石材で、下部は欠損している。四辺のでっぱりを縁辺加工で潰し、断面を楕円形に成形しようとしており、フラットな面には研磨を施し平らにしようとしている。

時期決定を成し得ると考えられる瓦質土器のうちB57-5は下層から出土しており、これをもって当遺構は14～15世紀に当てたい。

SE03（B56図）

G・H-37Gr内、標高8.2mで検出した。SE02の50cm西に位置するため、ひとつの大きなプランとして検出した。SE02・03間の深さ10数cmの落ち込みは崩れと考えられるが、木杭が2本検出され、どちらかの遺構に伴うものと考えられる。

平面は不正円形を呈し、径2～2.2m、深さ75cmを測り、断面は漏斗状を呈する。素掘の井戸であると考えられ、最下部は水溜部状を呈している。廃棄後の人工的に埋め戻した様子は観られない。

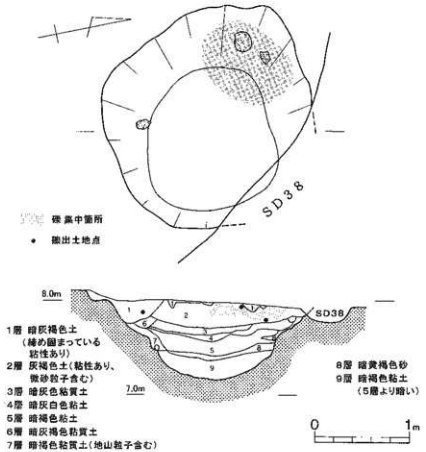
出土遺物は、弥生土器・古式土師器・土師器（胎土が緻密で朱塗りを施したものあり）・須恵器の破片半袋分である。上層から下層まで同じ様な遺物が出土しており、弥生土器・古式土師器などは混入品と考えられる。実測に耐えうる資料は皆無である。

以上出土遺物などより、当遺構は8～9世紀と考えられる。

SE04（B58・B68図）

F-37・38Gr内、標高8.1mで検出した。南側ではSD43を切り、北側ではSD38に切られている。平面は不正円形を呈し、径2.4m、深さ90cmを測り、断面は「U」字状を呈する。素堀の井戸であると考えられる。1・2層中に10～20cm大の礫の集中している箇所があり、そのひとつに砥石（B68-10）がある。

出土遺物は、古式土師器・土師器（胎土が緻密で朱塗りを施したものあり）・須恵器の小破片が小袋半分程、砥石が2点である。上中層から前2者、下層から須恵器の大甕の破片1点が出土しており B68-9は底面付近からの出土である。土器は実測に耐えうるものがなかった。



B58図　SE04実測図（S=⅙）

B68-9・10は砥石である。9はシルト岩製で、角柱状を呈し、基部が欠損している。中研ぎ、仕上げ研ぎとして利用され、刃跡が結構観察される。10は細粒花崗岩製で、3計測値がほぼ等しく円状で重量が1930ｇもある重いものである。両端部は敲打されたような面をもつが荒研ぎを行い、他の面は荒研ぎ、仕上げ研ぎとして利用している。

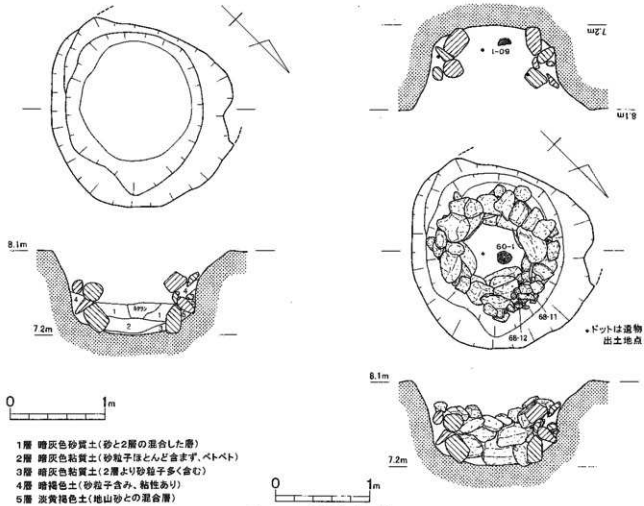
以上の出土遺物などより、当遺構は8～9世紀と考えられる。

SE05（B59・B60・B68図）

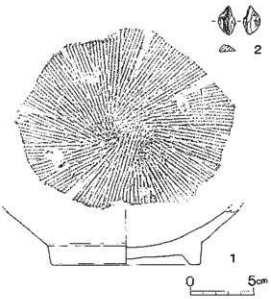
G-37・38Gr内、標高8.1mで検出した。周辺調査を開始した時から開口しており、現代まで使用されていた井戸であると当初は考えていた。SK36・42、SD44を切り、掘り方の平面はほぼ円形を呈し、径2.1m、深さ90cmを測り、断面は寸詰まりの「U」字状を呈する。

井戸側は、片手では大きく重く両手でないと持ち上がらないような礫で構成された石組みである。外径1.2m、内径65cmを測り、3段しか残存せず、上部は廃棄時以降に抜き取られたものであろう。そのため石組み上部の掘り方は広がっている。元来の掘り方は径1.4mと井戸側とあまり差がない。井戸内には擂鉢（B60-1）以下より石組みに食い込ませてあったと考えられる小礫が落ち込んでいた。

北東側の石組み外縁に検出した小礫の中には砥石（B68-11・12）を含んでいる。また、石組みの中には五輪塔の再利用と考えられるような礫を1点調査時点で確認しているが、調査後の整理段階で不明となってしまった。

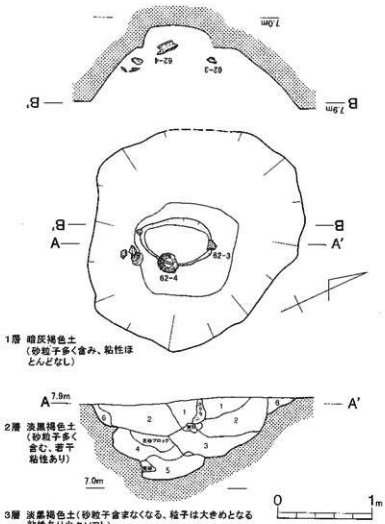


B59図 SE05実測図 (S=1/40)



B60図 SE05出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物は、上部から土師器小片、1層から近世の擂鉢（B60-1）・古式土師器小片、石組み間の上部から土師器、裏込めとなる4層から弥生土器・青磁小片が数点である。出土状況からは4層出土の青磁小片を伴う時期に井戸が構築され、近世擂鉢（B60-1）が伴う時期に廃棄されたと考えられる。B60-1は近世の擂鉢である。直立ぎみのしっかりした高台が付くもので、素焼きに鉄色の釉が施してある。B60-2はチャート製の楔形石器である。頂部縁辺に細かい敲打状の剥離調整を行っている。B68-11・12は砥石で、11は流紋岩製で、基部は欠損しているが幅広の角柱状を呈し、表手前面のみ荒研ぎで、他の4面は仕上げ研ぎに利用している。12は安山岩製の破片で、上部縁辺面のみ中研ぎで、他の2面は仕上げ研ぎに利用している。



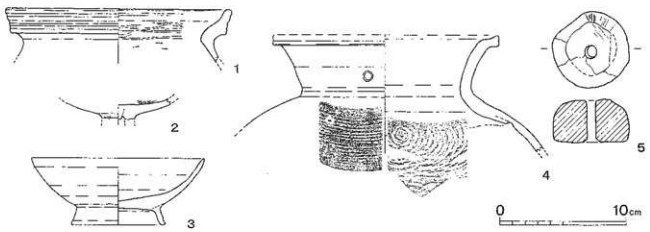
B61図　SE06実測図 (S=1/40)

以上の出土遺物などより、当遺構はおおざっぱに中世～近世としておく。

SE06 (B61・B62図)

C-17・18Gr内、標高8m弱で検出した。SI03・C17Gr-P2を切って、平面は歪な円形を呈し、径2.2～2.4m、深さ90cmを測り、断面は漏斗状を呈する。素堀りの井戸であると考えられ、最下部は水溜部状を呈している。廃棄後に4・5層を埋め、その上に荒砂ブロックを載せて踏み固めたのか、4層が締め固まっている。その後、3層下底を底面として機能した可能性が考えられる堆積状況を呈する。

出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・石製紡錘車である。半分が弥生土器であるが、これは周辺に存在した弥生遺構からの混入品と考えられる。B62-1・2は弥生土器である。1は短めの厚みのある複合口縁を有する甕で、口縁端部は丸くおさめ、口縁面には3条の凹線文を施す。2は高坏の坏部で、丸みを帯びて立ち上がるようである。接合部は、軸状の芯を充填し、坏部・脚柱部を組み合わせ粘土で貼り付けているのが観察される。3・4は須恵器の高台付坏と甕の口縁部である。3はやや足の長い高台が外寄りに安定感あるように付く。裾端部は外向し、坏部は深い立ち上がりで、口縁部は直立ぎみに内傾して立ち上がる。4は外反



B62図　SE06出土遺物実測図 (S=1/3)

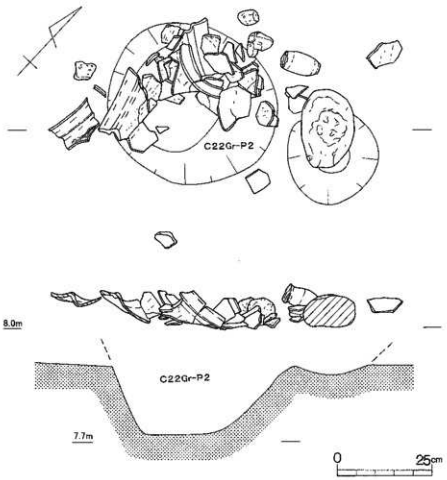
した頸部から口縁部に至り、口縁は水平に外開きとなり凹みぎみの面をもち、端部はつまみ上げる。肩部はやや膨らんだように張る。頸部と胴部の接合痕が内面に明瞭に観察される。B62-5は凝灰岩製の紡錘車である。上部径3.8cm、下部径5.7cmを測る大きいもので、中央に径0.7cmの穿孔がある。正台形を描くというより多角形を作り出し、外形は丸みを帯びシャープさを欠いている。剥落が激しく、明瞭な研磨痕、文様などは観察されない。

以上の出土遺物などより、当遺構は7～8世紀に該当しよう。

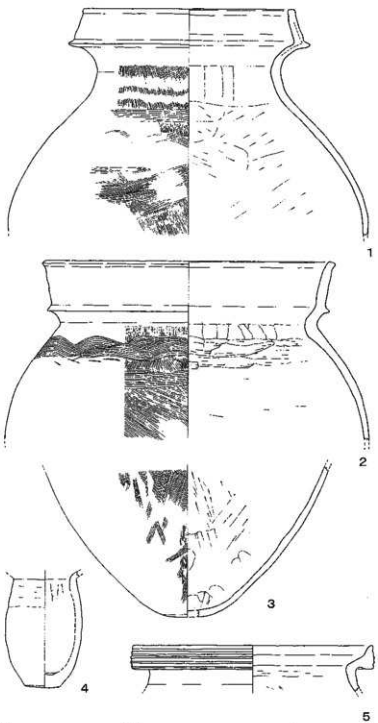
土器群1（B63・B64図）

C-21・22Gr内、標高8.1m強で検出した。直径50cm内に集中し、1m内に収まっている。土器底面標高は8～8.05mのほぼ同一である。土器群1の下の遺構を確認したところ、直下にC22Gr-P2を検出した。黄褐色地山まで下げないと包含層と覆土の区別をすることは不可能であり、C22Gr-P2の検出標高は7.9mである。土器の詳細は後述するが、土器群1から出土した土器とC22Gr-P2から出土した土器とは時期的に開きがあり、土器群1とC22Gr-P2とは無関係のようでもあるが、詳細は不明である。

出土遺物は、古式土師器である。B64-1は複合口縁を有する壺で、口縁部は内傾して立ち上がり、端部は幅広の平坦面をもち、突出部は上からのナデにより横に出っ張る。頸部からナデ肩の肩部へと移行し、胴部は膨らみをもつようである。肩部には小口による平行沈線文・波状文を施す。B64-2は複合口縁を有する甕で、端部は外に曲げしっかりした平坦面をもち、突出部は上下からのナデによりしっかり横に出る。内面頸部は指頭により伸ばし、ナデ肩の肩部から口径に比して張りのない胴部へと移行する。肩部には貝殻腹縁状の原体による波状文及びハケ目原体による刺突文を施す。B64-3は甕の底部である。わずかに稜線を観察することができる。内面に指頭圧痕を観察することができるが、外面はそれほど膨らみをみせない。



B63図　土器群1遺物出土状況図（S=1/10）



B64図　土器群1(1～4)及びC22Gr-P2(5)出土遺物実測図 (S=⅓)

B64-4は片手で握るのにちょうど良いコップ状の手捏土器である。口縁部は欠損しているが、外反して伸びるようである。底部は平底で底部周りと肩部を若干くびれさせているため、胴部が膨らんだようになる。いわゆる蛸壺と形状が似ているが、1個体のみの出土であり、蛸壺とは判断できない。B64-5は土器群1直下検出のC22Gr-P2から出土した甕の口縁部である。口縁部は上に肥厚して面をもち、断面は三角形を呈する。口縁面には4条の凹線文を施し、頸部は長めに緩やかに胴部へと移行する。

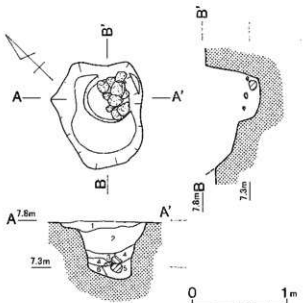
以上の出土遺物などより、C22Gr-P2は弥生後期初頭、土器群1は古墳初頭（草田6～7期）に該当しよう。

B16Gr-P6 (B65・B66図)

B16Gr内、標高8mで検出した。B区調査区内の北西隅に位置し、SD59他の溝状遺構などがやや複雑な重複関係を示しているが、当遺構が切って存在する。

柱穴跡と考えられ、抜き取り跡の掘り方平面は楕円形で、長軸1.1m、短軸80～90cm、深さ60cm強を測り、E-40°-Nに位置する。これは抜き取り方向と考えられる。東寄りの直径50cmを測る正円形の落ち込みが柱穴の存在した跡で、破壊されていない東側に礫が積み重なって検出されたが、柱を支えるための裏込めの残骸と考えられる。

出土遺物は、上層から古式土師器・土師器・須恵器の小片が数点、下層から近世陶器が1点（B66-1）である。B66-1は口縁部が玉縁状の鉢で、内外面は鉄釉が施されている。



B65図 B16Gr-P6実測図 (S=1/40)

B66図 B16Gr-P6出土遺物実測図 (S=1/3)

SK16・SK27・SK39・SD29・柱穴・遺構外出土遺物 (B67・B69～B71図)

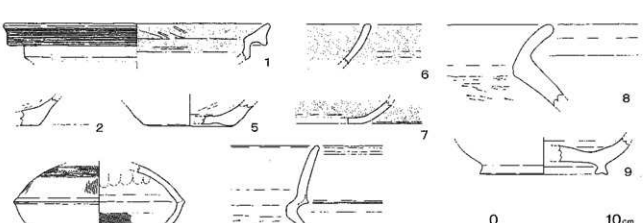
B区内より検出された遺構で、特記するには及ばないが、時期決定及び今後の検討において必要と考えられる遺物を掲載した。詳細は観察表に委ねる。

遺構外出土遺物も詳細は観察表に委ねる。

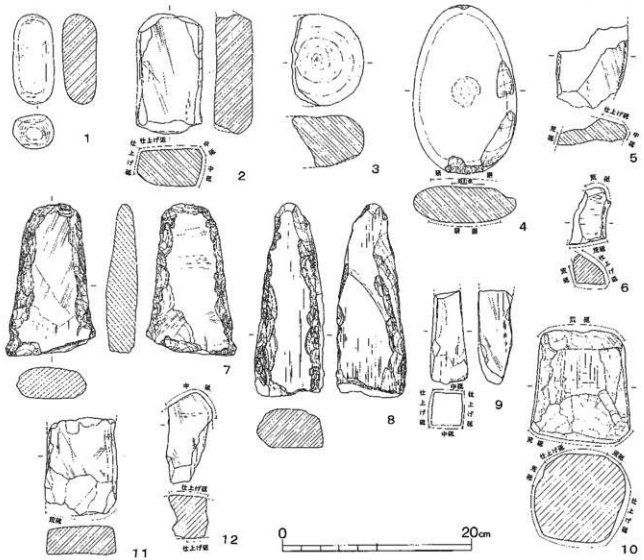
その他にも弥生時代～古墳時代初頭、奈良・平安時代～中世の柱穴が多数検出されたが、思うように組み立てることができなかった。B72図に委ねたい。

注1 実際は貝殻復縁による平行沈線文をほどこした8cm角の胴部破片が1点 (B06図-①) 出土している。

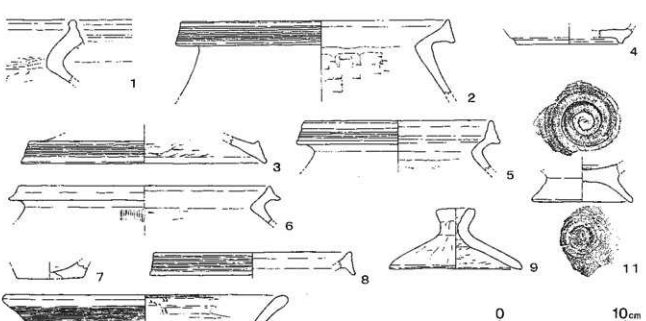
注2 B09-1～4、B10-3・5～11は、松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から」『島根考古学会誌 第17集』2000において、使用された資料である。今回の報告においてB09-1～4、B10-6・10は図面を一部加筆し、B10-9は再実測した。



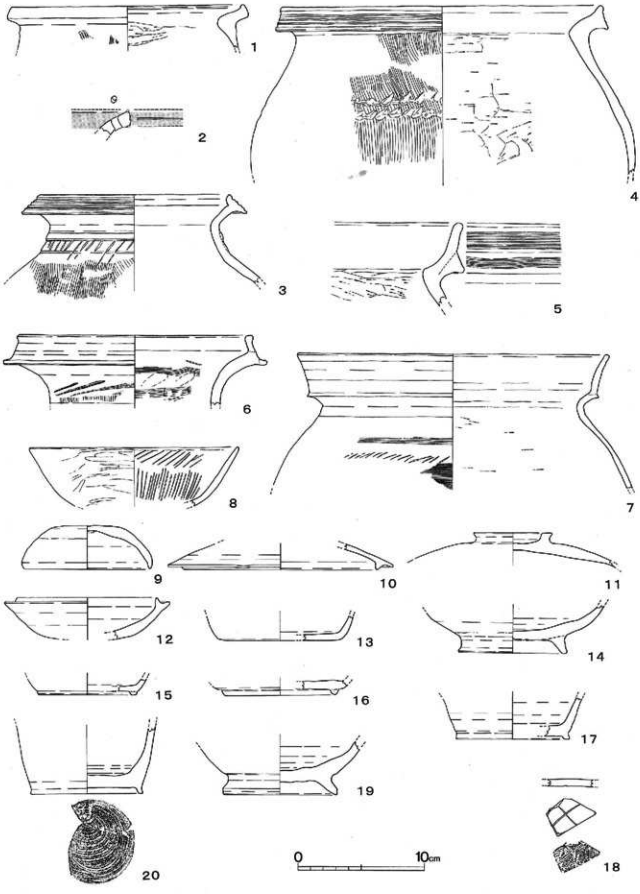
B67図 SK16(1・2)・SK27(3・4)・SK39(5)・SD29(6～9)出土遺物実測図 (S=1/3)



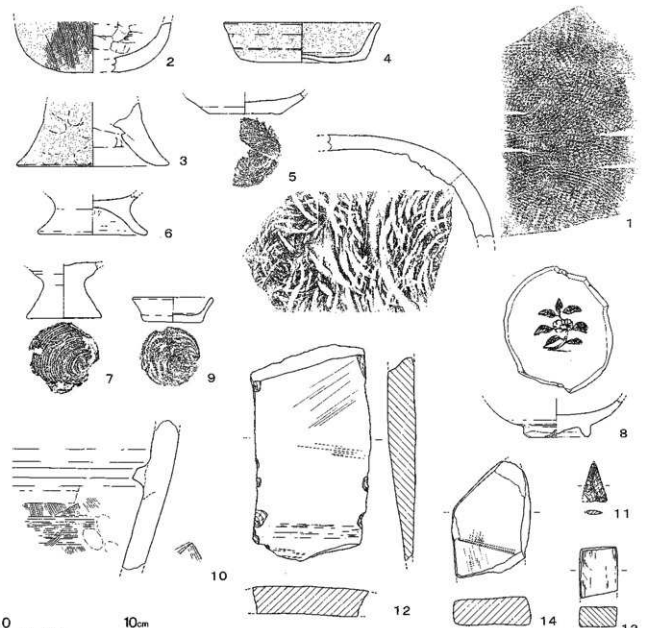
B68図　S103(1)・S104(2・3)・SK10(4)・SE01(5・6)・SE02(7・8)・SE04(9・10)・SE05(11・12)
出土石器実測図 (S=¼)



B69図　柱穴出土遺物実測図 (S=⅓)



B70図　遺構外出土遺物実測図1 (S=⅓)



B71図　遺構外出土遺物実測図2（S=⅓）

注3　搬入品と考えられる甕の胴部外面調整には在来系土器には観察されない同様な粗い調整痕が観察され、これは当遺跡における在来系土器と搬入土器とのひとつのメルクマールになるものと思われる。

注4　これまで小型・大型と特記してきた以外で単に甕とのみ記述してきたものをさす。当遺構で「普通」を使うのは他の甕が単なるサイズによる違いというよりも使用方法の違いに重点を置くからである。

B72図　B区柱穴時期別平面図

C区の調査結果

1. C区の概要

C区は、幅6mの道と用水路を挟んでB区の南東に位置し、東へ延長距離90m、幅10mの区間である。C区からはC～D区へ連続する道路予定地中央ラインを利用して5mピッチの杭を打ち、西から東へ44～62、南から北へA～Cとグリッドを設定し、A・B区とは変換した。C44杭の北東区画をC44Grと称する。

調査区内2ヶ所に南北方向の用排水路が設置され、調査区を分断している。最西区では、道路のRに位置し、三角形の調査区となった。

最西区は、現地表面から30～80cmの厚さで現耕作土・旧耕作土があり、その下層から遺物包含層、さらにその下層から層位を別にはできなかったが、平安時代～中世、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を中心に生活面を検出した。特にこの三角形地帯ではB区南側地区とともに中世の井戸が集中して検出された。

以東の調査区内は、現地表面から10～20cmの厚さで現耕作土があり、その下には重機による撹乱の爪痕が所々遺構を破壊しながら残っている。現耕作土の下には近世の水田耕作跡、及び遺物包含層があり、その下より層位を別にはできなかったが、平安時代～中世、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を中心に生活面を検出した。遺構検出には時期差があるにも関わらず、面的に粗密があり、密集している地区では遺構の性格を掴みきれないものが多々あった。

2. 遺構と遺物

C区からは上記したように、中世から弥生時代の遺構が重複している。以下、各遺構の詳細と出土遺物について述べる。

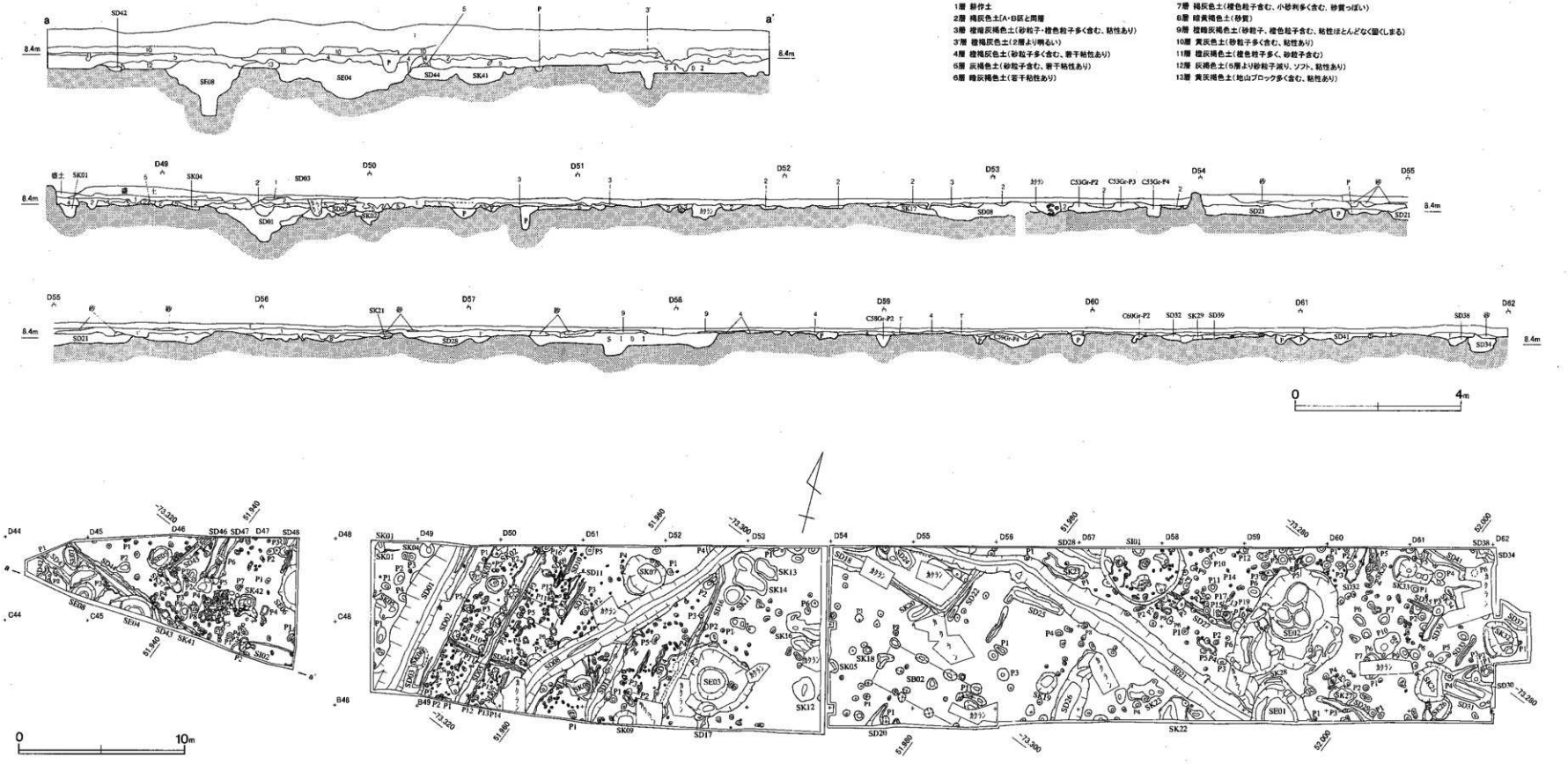
S101 (C02～C04図)

C-57・58Gr内、標高8.7m弱で検出した。検出当初は、南側の遺構と共に大きな落ち込み状を呈しており、徐々に下げると各遺構へとプランが分かれていった。北側は調査区外へと延びるため、全容を知りうることはできないが、角に丸みをもつため、隅丸方形のプランを呈すると考えられる。P5の南延長した角を頂点とすると一辺は約3.5m、深さ15～40cmを測り、N-16°-Eに位置する。

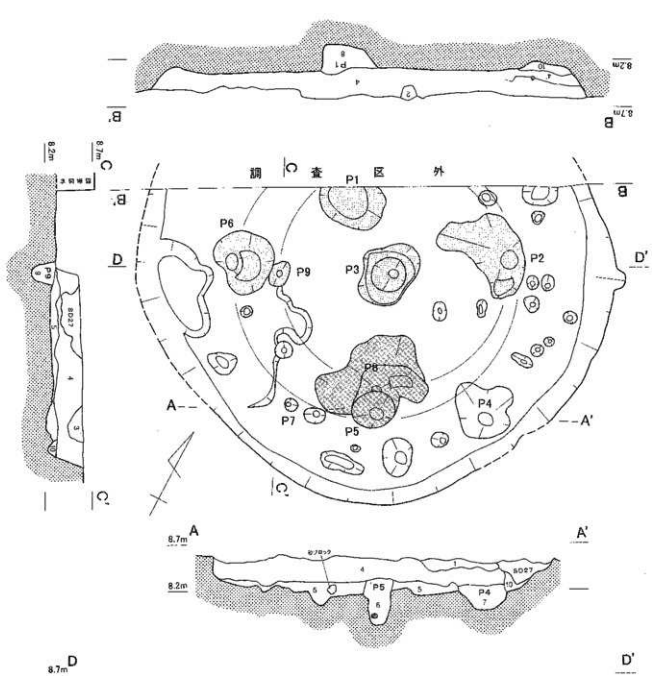
C-C'土層断面より観察されるが、南側半分には北側より一段下がって人工的に埋めた5層が堆積する。おそらく張り床であろう。また壁際に位置する浅い柱穴状のものは周溝を形成したものかもしれない。

中央ピットP3の底面を中心にP1・P2・P8・P9を主柱穴とする時期、P3内で中心を若干南西に移動して拡張しP2・P5・P6を主柱穴とする時期がある。柱穴の検出時にはP8はP5に切られ、P9はP6に切られた状況であった。またP1からC04-2、P3からC04-11、P8からC04-3・7が出土している。他の掲載しなかった小片遺物も含めて以上を検討すると、先記した径の小さな方が古く、後記した径の大きい方が新しいと考えられる。

出土遺物の詳細は後述するが、当遺構から出土する遺物は、大きく2時期に分かれる。弥生時代中期後葉と終末期（草出5期）である。後期と考えられる遺物は皆無である。この2時期をそれぞれ2時期に分類した主柱穴時期に対応するが、2時期には結溝時間差があり問題が残るようである。しかし、



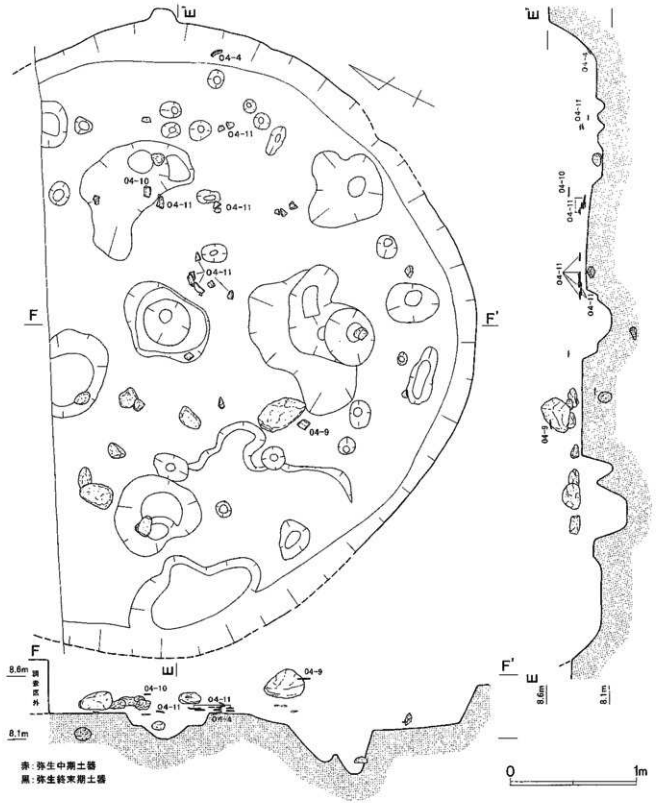
C01図　C区遺構配置図 (S=1/200) 及び土層断面図 (S=1/60)



1層 複暗褐色土(複褐色粒子多く含む、若干粘性あり)
2層 炭黒褐色土(砂粒子含む、粘性ほとんどなし)
3層 黄褐灰褐色土(砂粒子含む、4層に比べて粗っぽく砂質)
4層 暗灰褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性あるが砂質っぽい)
4'層 4層より暗い、自然に4層と同化する
5層 暗黄褐色マーブル土
6層 炭黒褐色土(砂粒子少し含む、粘性あり)
7層 暗黄褐色砂質土
8層 暗灰褐色土(砂粒子をほとんど含まず、緻密な層、ほとんど粘性なし)
9層 灰褐色土(地山ブロック多く含む、粘性ないが粒子細かくしっとりしている)
10層 暗黄褐色砂質土(地山との混合層)

0 2m

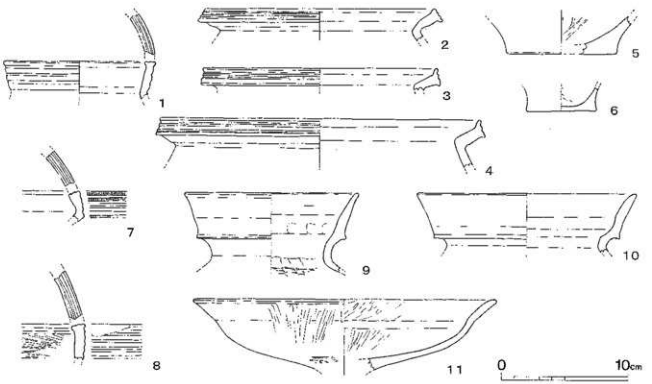
C02図 S101実測図 (S=1/40)



C03図　SI01遺物出土状況図（S=1/20）

終末期の遺物は4層中からの出土であるが、中期の遺物は4層以下からも出土しており、当遺構が時間差をおいて利用されたことは確かである。

出土遺物は、前記したように弥生土器が大袋2袋分、他に土師器・須恵器の小破片が小袋1袋分出土しているが、これは上面に存在するSD27の遺物及び混入品と考えられる。掲載したものは弥生土器の



C04図　S101出土遺物実測図（S=⅓）

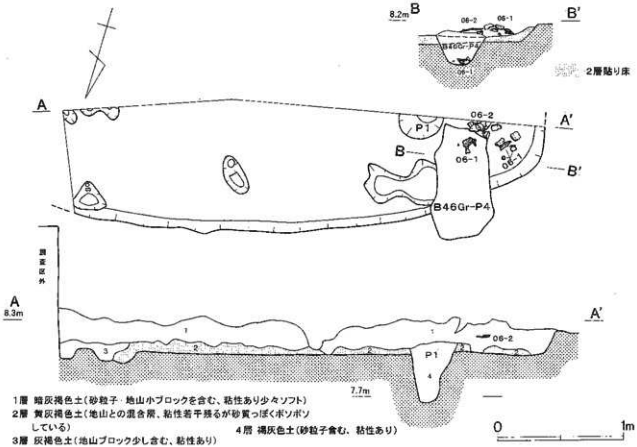
みである。

C04-1は直口壺の口縁部と考えられ、下端が外反する。口縁端部は肥厚して面をもち、浅い2条の凹線文を、頸部には浅い4条の凹線文を施す。C04-2～4は甕の口縁部で、口縁部が拡張して面をもち口縁面にはそれぞれ3条の凹線文（ただし、3は3条のうち1条は沈線である）を施す。頸部の残存する2・4は共に「く」の字状に屈曲する。C04-5・6は平底の底部である。5は厚みがあるが、6は薄手のもので、体部は共に広がった立ち上がりをみせる。C04-7・8は高坏の口縁部破片である。8は下端が内傾する。口縁端部は7は肥厚して、8は内外に拡張して、それぞれ面をもち浅い2条の凹線文を施す。また口縁部に、7は4条の凹線文と隔段の3段に刻目を施し、8は5条の凹線文を施す。C04-9・10は複合口縁を有する壺と甕である。口縁端部を引き伸ばしておさめ、突出部は9は下からの、10は上下からのナデにより小さく出る。C04-11は高坏で浅い洗面器状の立ち上がりをみせ、口縁部は段をもって外湾する。

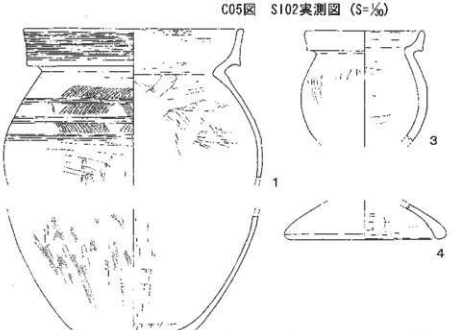
S102（C05・C06図）

B-46・47Gr内、標高8.3m強で検出した。大部分が調査区外へと延びており、平面プランも正確とは云えないかもしれないが、西側に角を検出しているので、それを中心に両辺の様相をみると、膨らみを呈しているので、隅丸方形のプランが考えられる。現状で一辺3.7m以上、深さ15cmを測り、E-25°-Nに位置する。

主柱穴としてP1が考えられる。2層は人工的に埋めた厚さ10cm以内の張り床で、P1は張り床を敷き詰めた後に掘り込んでいる。また南東隅にわずかに検出したピット状の落ち込みも2層を切り込んでいることと位置的に、主柱穴の可能性がある。



C05図 S102実測図 (S=1/30)



C06図 S102出土遺物実測図 (S=1/3)

遺物が西側角の2層上面で集中して出土した。一部は当遺構より新しいB46Gr-P4に壊されて、B46Gr-P4にそのまま落ち込んだ状況を呈している。ほぼ一個体の甕 (C06-1・2) である。

出土遺物は、前記した弥生土器の他に中袋1袋分の弥生土器である。C06-1・2は同一個体の複合口縁を有する甕である。口縁部は引き伸ばし、端部は若干肥厚させて丸くおさめ、突出部は下からの強いナデにより真下に出る。口縁面には貝殻腹縁による9条の擬凹線文を施したのち丁寧にナデている。肩部には丁寧なナデを行ったのちに、2条の凹線文3段で区画し、その間に深くしっかりとクシ歯状工具による刺突文を施す。底部の残存はわずかであるが、薄手の平底のようである。C06-3は

複合口縁を有する甕を模倣した手捏土器である。体部はやや長めだが丸みを帯び、肩部には不規則なヘラによる刺突文が施される。外面にススが付着しているので、実用的な使用をされたと考えられる。C06-4は内面にヘラミガキを行っているので脚部とした。裾部は膨らませて丸くおさめ、低い立ち上がりをみせる。外面及び内面の一部に朱塗りが施されている。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期後半に該当しよう。

SK07（C07・C08図）

C51Gr内、標高8.5m弱で検出した。東側をわずかにSD08により切られているが、不整円形を呈するようである。直径2.3m、深さ80cmを測る。規模から井戸の可能性を考慮して掘り下げたが、底面標高7.7mでは湧水せず、正確不明の単独の土坑である。1層と2層の間には、地山砂を含んだブロックがサンドイッチされている。

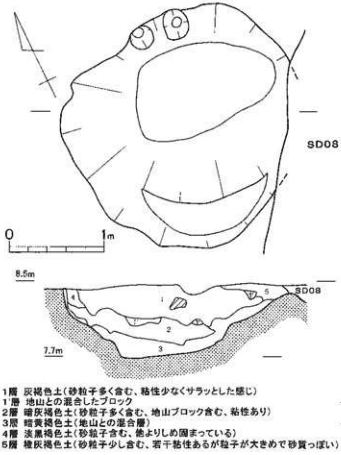
出土遺物は、弥生土器・古式土師器・須恵器・土師器などの小片1袋分である。弥生土器・古式土師器は全体から出土しているが、須恵器とそれ以降の土師器は上層でのみ出土し、それ以前の土師器は中層から下層にかけて出土している。

実測に耐えうるもの3点を掲載した。C08-1は弥生土器の甕である。口縁部が上下に拡張して面をもち、内傾する口縁面には浅い沈線が2条施される。頸部は「く」の字状に屈曲する。C08-2は須恵器の壺である。頸部が「く」の字状で、口縁端部が丸くおさまる。C08-3は土師器の坏である。底部から丸みをもって器壁へと立ち上がる。底部は糸切りである。

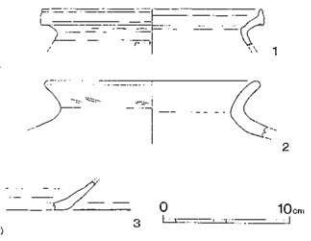
以上、当遺構の時期を決定するには資料不足であるが、16～17世紀と考えられるSD08に切られているので、それ以前の中世期であろう。

SK09（C09・C10図）

A51Gr内、標高8.5m強で検出した。南側は調査区外へ延び、東側は攪乱によって切られているが、底面が立ち上がっていく様子が観



C07図　SK07実測図（S=1/40）



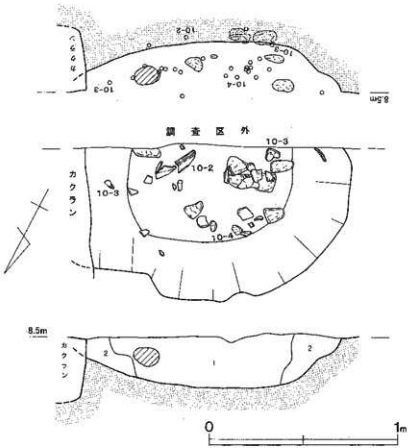
C08図　SK07出土遺物実測図（S=1/3）

察されるので、不整円形を呈すると考えられる。直径約1.5m、深さ38cmを測る。

15cm大の軽石と共に、破砕されたような土器破片が全体から出土した。C10-3のような接合関係を示すので、遺物はほぼ同時期に投入されたと考えられる。性格は土拡墓とも捉えられるが、不明である。

出土遺物は、弥生土器が1袋分である。実測可能なもの4点を掲載した。C10-1・2は甕で、1は若干小型のものである。共に口縁部が上下に拡張して面をもち、内傾する面には3条の凹線文を施す。C10-3・4は薄手だがしっかりした平底の底部である。体部への立ち上がりは、底部付近は直立ぎみに、体部へ移行すると広がりをみせる。3の底部中央には径1cmの穿孔がされている。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。



1層 黒褐色土(粒子細かく粘性あり、砂粒子及び地山ブロック少し含む)
2層 黄褐褐色土(砂粒子含む、地山の崩れた部分との混合層)

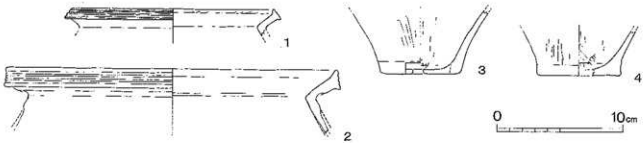
C09図 SK09実測図 (S=1/20)

SK18 (C11・C12図)

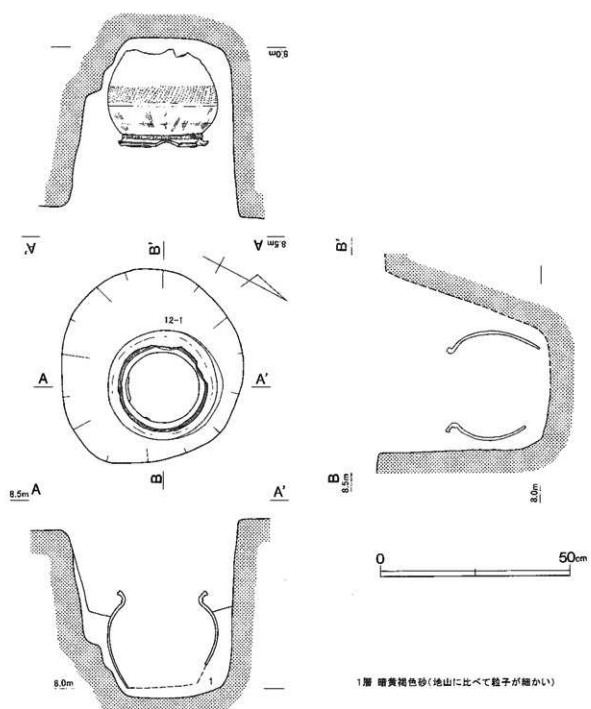
B54Gr内、標高8.45mで検出した。上面には後世の浅いシミ状の暗灰褐色土が落ち込んでおり、それを掘り下げるとSK18のプランが確認できたため、周囲の遺構より若干低い標高で検出された。

51×48cmのほぼ円形のプランを呈していたので、柱穴の可能性をもって全掘を開始すると、約20cm掘り下げたところで弥生甕に当たった。

調査は西側を断ち割って行うこととした。甕は口縁部を平行にしてほぼ垂直に立てられていた。底部は故意に打ち欠いたもので掘り方底面まで到達しており、甕の下半部から湧水を確認



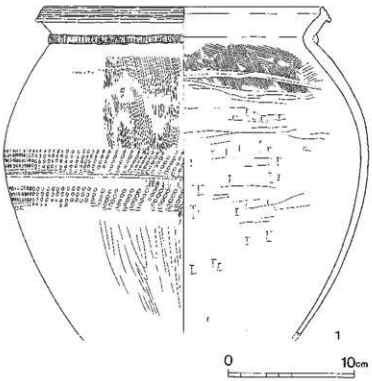
C10図 SK09出土遺物実測図 (S=1/3)



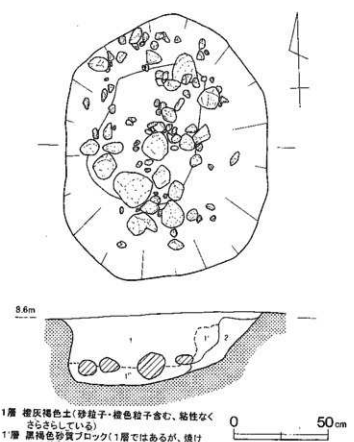
C11図　SK18実測図 (S=1/10)

した。掘り方の深さは47cmを測る。甕内の堆積土をフルイにかけ、混入物を確認したが、特記すべき事はなかった。

SK18の性格づけだが、柱穴説・トイレ説・井戸説などが候補に挙がっている。しかし、柱穴説としては、周囲に関連するような柱穴が存在しない。トイレ説としては、甕内の堆積土はわりときれいな砂質土であることと、土質分析は行っていないが、排泄物をそのままにしておくには小さいと思われる。最後に井戸説であるが、確かに現在湧水点に達しており水が10数cmは溜まる。しかし、井戸とし



C12図　SK18出土遺物実測図（S=⅓）



C13図　SK19実測図（S=1/20）

てまでの水を常に満々と溜めておくような機能は備わってはいない。湧水点に達し水が10数cmは溜まることを考慮すると、藤田三郎氏曰くの集水施設[3]であろうと考えた方がよいと思われる。

出土遺物は、上記した弥生土器の甕の他は、小片2点と上層出土の混入した土師器の小片1点のみである。

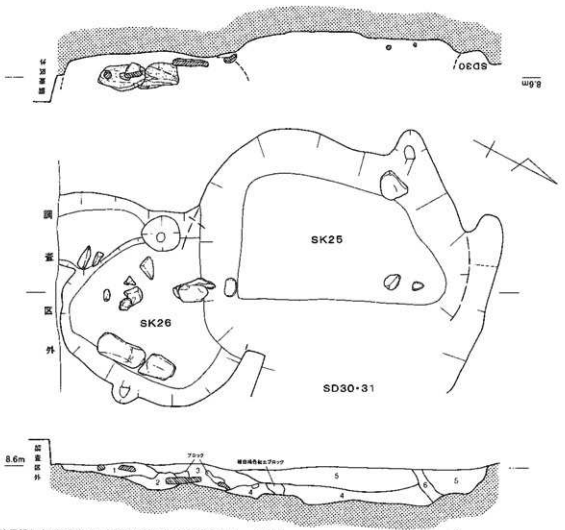
C12-1は上記した甕である。口縁部は上下に拡張して面をもち、内傾する面には3条の凹線文を施す。「く」の字状に屈曲する頸部には、指頭圧痕文帯がめぐり、胴部中央付近に最大径位のくるプロポーションを呈する。胴部最大径位には2段の列点文を施す。外面胴部最大径位以下にはススが付着しており、甕として利用されたのち、転用されたものと考えられる。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉のものである。

SK19（C13図）

B56Gr内、標高8.6m強で検出した。長径1.4m、短径1.05m、深さ35cmを測り、N-5°-Eのほぼ南北に位置する。軽石を中心とした礫が全体に散かれており、覆土は縁周を中心に火を受けたような状況であった。

出土遺物は、弥生土器の小片5点のみである。6m北に位置するSI01の古い段階の遺物とほぼ同時期の弥生中期後葉である。



1層 炭黒褐色土(微砂粒子及び炭化物を含む、若干粘性あり)－SK26
2層 暗黄灰褐色土(砂質っぽいが若干粘性あり)－SK26
3層 暗灰褐色土(砂粒子含む、若干粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい)－SK25
4層 灰褐色土(若干粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい)－SK25
5層 灰褐色土(4層より褐色が罰く明るい、若干粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい)－SD30・31
6層 暗黄褐色砂質土(層が崩れたところ)

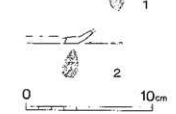
C14図　SK25・26実測図 (S=1/30)

SK25・26 (C14・C15図)

A・B-61Gr内、標高8.6m強で検出した。C区最東南に位置し、元来4×4mのひとつの落ち込みとして認識していた。掘り始めるとそれぞれの遺構に分かれていき、最終的にSK25・26、SD30・31となった。SK26はSK25に切られ、SK25はSD30・31に切られている。またSK26の南側は調査区外へと若干延びている。

SK25は楕円形、SK26は不整円形を呈する。SK25は2.1m以上×1.7m以上、深さ25cmを測り、SK26は1.6m以上×1.4m以上、深さ20cmを測る。SK25の長軸はN-25°-Wに位置する。

SK26内には、複数の礫が底面より若干浮いた位置から出土した。

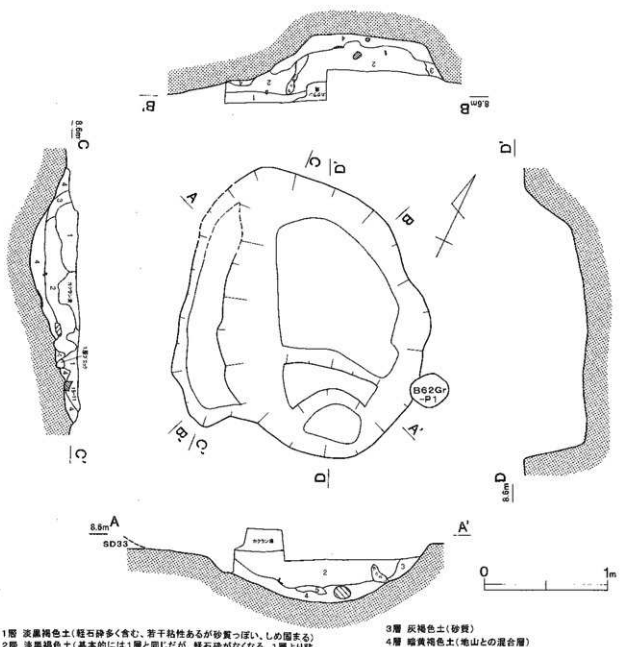


C15図　SK25(1)・SK26(2)
出土遺物実測図(S=1/3)

ドーナッツ状を呈するようであるが、SK25などに壊されて、現況は維持されていない。1層に炭化物を含んでいることより、石囲い炉のような性格を有していたと考えられる。SK25は性格不明である。

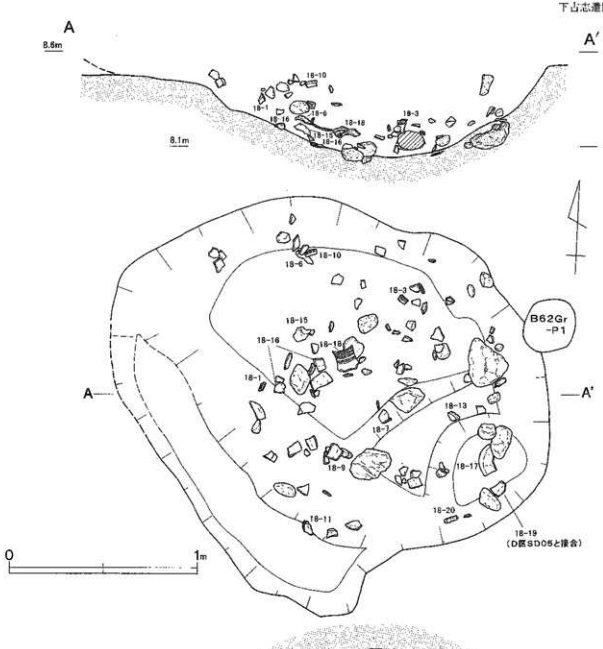
出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器などの小片がそれぞれ中袋に1袋分である。出土量の多い土師器が純粋な出土遺物と考えられる。またSK26からは、俗に中世須恵器と呼ばれる内外面にタタキ痕を残さない調整を行った小破片が1点出土している。実測に可能な2点のみ掲載した。C15-1・2は土師器の坏と小皿で、共に底部回転糸切りである。1は、底部から体部へと立ち上がる部分を指ナデにより窪ませる。2は、底部から体部へナデにより変化をつけて外開きに立ち上がる。

以上の出土遺物などより、当遺構は12～13世紀に該当しよう。



1層 淡黒褐色土(粒石径多く含む、若干粘性あるが砂質っぽい、しめ固まる)
2層 淡黒褐色土(基本的には1層と同じだが、粒石径がなくなる、1層より粘性強くなり、しまりなくソフト)
3層 灰褐色土(砂質)
4層 暗黄褐色土(地山との混合層)
5層 黒褐色土(粘性ないがサラッとしているきれいな層)

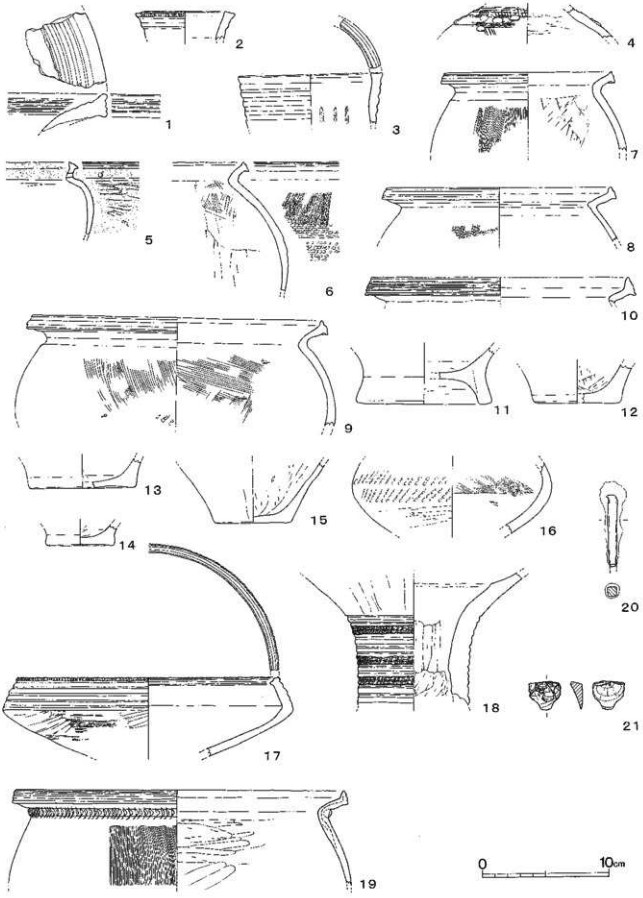
C16図 SK32実測図 (S=1/20)



C17図　SK32遺物出土状況図（S=1/20）

SK32（C16～C18図）

B・C-61・62Gr内、標高8.7m弱で検出した。調査予定は62杭ラインまでであったが、弥生土器が多く出土するため、延長して完掘させた。南西に浅いステップ状を呈するが、ステップ状からの落ち込む肩が本来のSK32とするならば、平面形は楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸1.7m（全体では2m）、深さ60cmを測り、W-40°-Nに位置する。底面は北から南へ緩やかな傾斜を描き、南寄り中途で若干上がってまた下がる。



C18図　SK32出土遺物実測図（S=⅓）

遺物は、弥生土器が遺構内全体に破砕さればらまかれたような状況で出土した。破片は2～3cm大と6～7cm大のものにおおよそ分かれ（最大値15cmものが2点）、コンテナ半箱分である。ほとんど接合せず、同一個体と思われるものも接点のないものがほとんどである。残存状態が良くあまり摩滅していない。他に鉄製品1点、黒曜石製の調整剥片が1点出土している。10～20cm大の礫はほとんどが軽石である。

以上の状況より、当遺構は土壙墓と想定したい。D区で後述するが、C区最東端に位置する当該SK32から連続してD区西端には同様な規模・時期の土壙墓と考えられる遺構が集中している。また、C18-19が約50m東に位置するD区SD05出土の土器と接合した。これら土壙墓群を区画しているSD06よりさらに東側であり、これは破砕行為を土壙墓群外の別の場所で行い、SK32へ持ち運んでばらまいたと理解できよう。

C18-1～4は壺である。1は広口壺の口縁端部で、口唇部は上下に拡張して面をもち3条の凹線文を、内面には5条の凹線文を施す。2・3は直口壺の口縁部で、2はミニチュアサイズである。共に口唇部が2は外に、3は内外に肥厚して面をもち、3は浅い凹線文を2は角に刻目を施す。口縁部には共に凹線文を現状で2は2条、3は5条施している。4は無頸壺の肩部で、外面には現状で、3条の凹線文、3条の凹線文と刻目の組み合わせ3段を施し、円形浮文を4ヶ貼付けている（1ヶは剥落）。

C18-5～10・19は甕である。口縁部が上下に拡張して面をもち、内傾する口縁面には5～7・9は2条の凹線文を、8は2条の凹線状の凹みを、10は5条の凹線文を施す。8～10は頸部が「く」の字状に屈曲する。6・7・9の胴部最大径位には列点文が施されており、6のように1条の凹線文を挟み2段で引きずったように施すものもある。7の内面には頸部までケズリ調整が行われている。5のみがミニチュアサイズで、外面及び内面口縁部に朱塗りが施され、頸部には現状で1穴の穿孔がされている。肩の張るプロポーションを呈し、外面横位のヘラミガキが行われる。19は口縁部が上に拡張して面をもち、内傾する口縁面には3条の凹線文を施す。頸部は「く」の字状に屈曲し、貼付け突帯文を巡らす。突帯文はヘラ状工具により押さえられ、いわゆる指頭圧痕文帯としている。上下の刺突状のものは工具痕である。

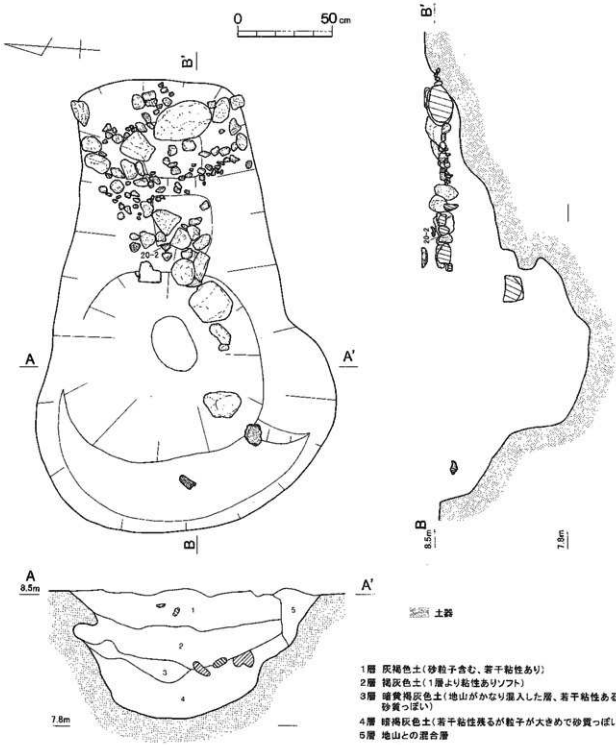
C18-11～15は底部である。11のみ幅広の踏ん張りのある台付きで、他は平底である。11以外は底径10cm未満のやや小さいもので、15は特に薄作りである。

C18-16は胴部がかなり張るプロポーションを呈するので、脚付きなどの鉢と考えたい。胴部最大径位に現状で2段の列点文を施す。C18-17・18は高坏である。17は坏部で、体部中央で「く」の字状に屈曲し、上半部は5条の凹線文を施し、口唇部は内外に肥厚して面をもち2条の凹線文、角には刻目を施す。18は大型品の脚柱部から坏下半部にかけてのもので、分厚い作りがなされている。脚柱部には12条の明瞭な凹線文を施したのち丁寧にナデて凸部を平坦にして、2段の凸部に刻目を連続して施す。これを現状で3段施している。内面には粗い絞り痕とケズリが観察される。

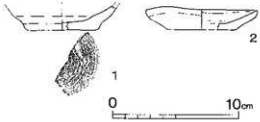
C18-20は鉄製品である。断面四角形の角柱状のもので、頭部は錆が厚いが、X線写真より観察すると打ち潰されていた。釘状のものであろうか。

C18-21は黒曜石製の調整剥片で上部にステップをもつ。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に破砕行為を行い、土壙墓内にばらまいたのであろう。



C19図　SK33実測図 (S=1/20)



C20図　SK33出土遺物実測図 (S=1/3)

SK33 (C19・C20図)

C-60・61Gr内、標高8.55mで検出した。平面形はしゃもじ状の楕円形を呈する。西側の平面が膨らみをもつ部分は深く掘り込まれ、東側は大小の礫がほぼ同レベルで敷かれている。全長2.4m、東側の幅85～105cm、深さ20

～35cm、西側の円形落ち込み径1.55m、深さ85cmを測り、E-10°-Nのほぼ東西方向に位置する。

西側の円形落ち込みは規模から井戸の可能性を考慮して掘り下げたが、底面標高7.7mでは湧水しなかった。2層と4層の間には、地山がかなり混入したブロック状の3層と礫がサンドイッチされている。以上、SK07と似た状況を呈するが、当遺構には東側に付属的な礫敷きが伴っている。大型の柱穴とすると付近に関係するような柱穴跡は検出しておらず、集水施設のようなものを検討したい。

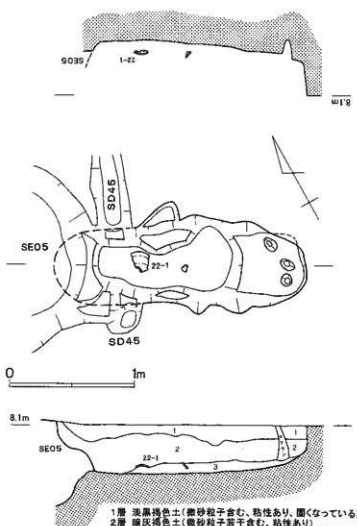
出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器が中袋1袋分である。土師器以外は混入品であるが、かなり弥生土器が混入している。C20-1・2は土師器の坏と小皿である。1は底部から体部へと立ち上がる部分を回転ナデにより変化をつけ、外広がりに立ち上がる。2は口縁部が波打ついびつな作りで、立ち上がりは外開きであるが、口縁部は内湾して直立ぎみにおえる。

以上の出土遺物などより、当遺構は13～14世紀に該当するのではないかと考えられる。

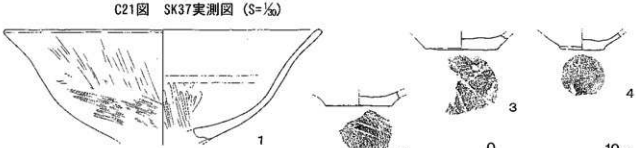
SK37（C21・22図）

C-45・46Gr内、標高8.1mで検出した。SD45・SE05と重複しているが、当遺構が最も新しいもので、他の2基を切っている。検出時は判別ができずSE05と共に柄鏡状のプランを呈していたが、土層確認によりSK37の方が新しいと一応判別した。しかし同時に共存した可能性も捨てきれない。

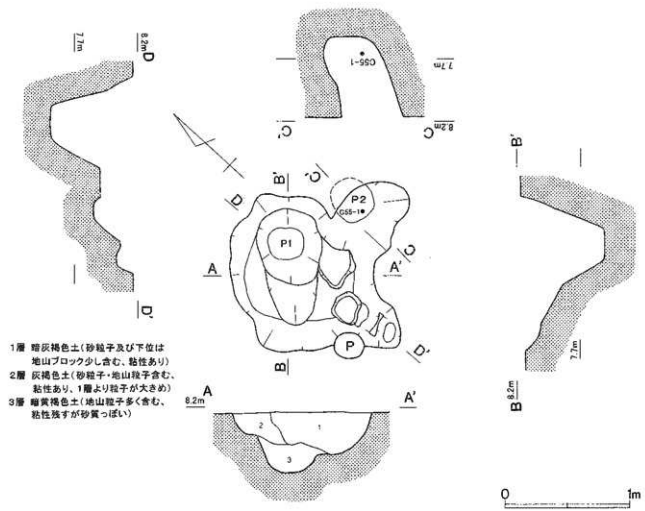
平面は長楕円形のカプセル状を呈すると予想され、立ち上がりは急である。長軸1.7m以上、短軸70cm、深



C21図　SK37実測図（S=1/20）



C22図　SK37(1・2)・SK42(3・4)出土遺物実測図（S=1/3）



C23図　SK42実測図 (S=1/30)

さ35～45cmを測り、W-30°-Nに位置する。底面がSE05溝の西へ傾斜し、東側には径10cm、深さ15cmの小ピットが3基穿たれている。性格は不明である。

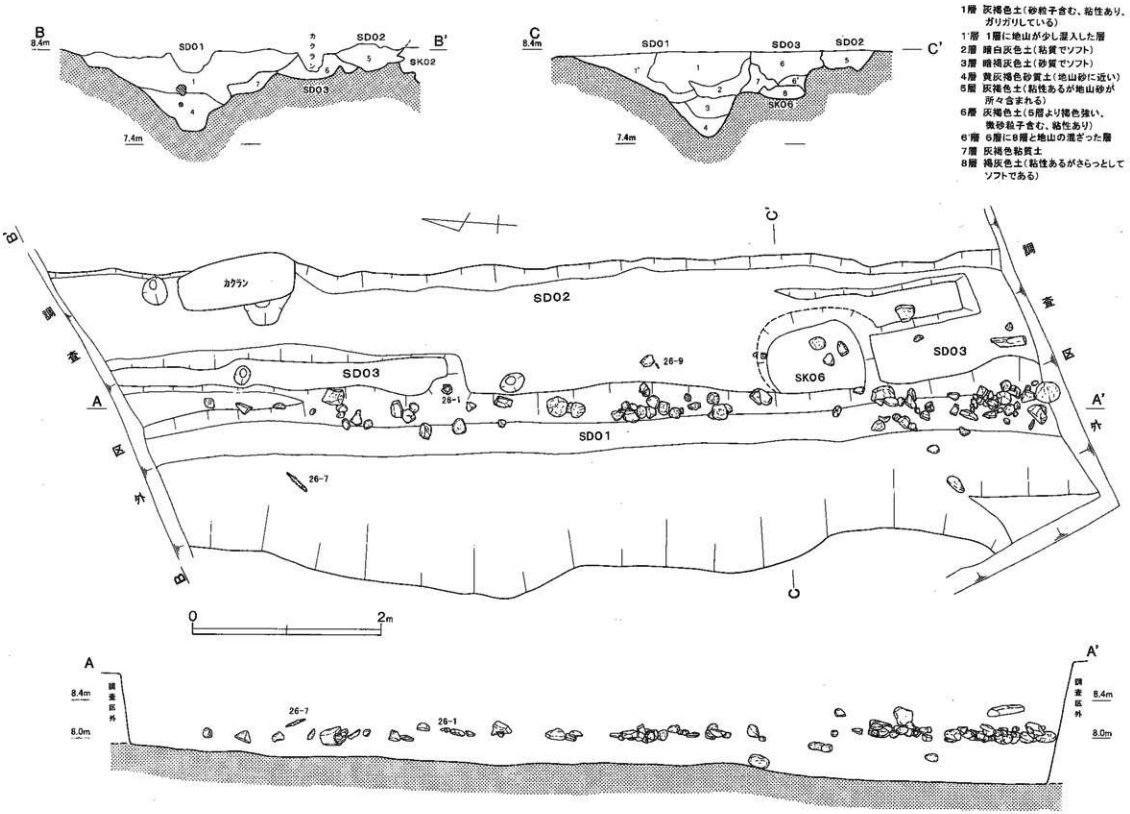
出土遺物は、弥生土器・古式土師器・土師器が中袋1袋分である。前2者はSD45を破壊した時の混入品と考えられ、C22-1のように大きな破片も混入している。C22-1は古式土師器の高坏の坏部である。深い立ち上がりで、体部から口縁部は屈曲し外反して立ち上がる。口縁端部は短型で、外面には細かいミガキを施す。C22-2は土師器の坏である。底部は風化しているが、ヘラ切りの痕跡がうかがえる。

以上の出土遺物などより、当遺構は14～15世紀に該当すると考えられる。

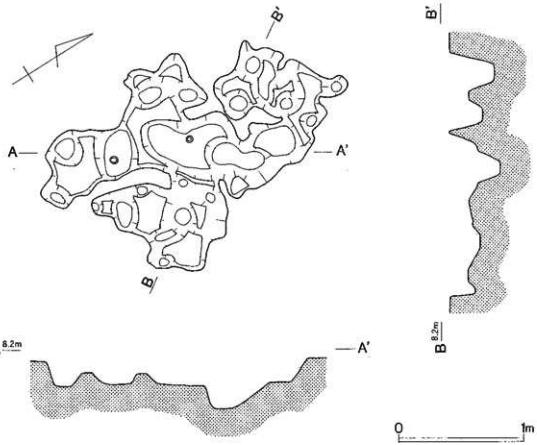
SK42 (C22・C23・C55図)

C-46・47Gr内、標高8.1m強で検出した。2本足の付いた不整円形を呈し、直径60cm、最深度65cmを測る。柱穴の集中した遺構である。3層はP1下位の覆土で、P2がこれを切った状況を呈していた。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小片が小袋1袋分、P2から古銭「永楽通宝」1点である。弥生土器・須恵器は混入品である。C22-3・4は土師器の坏と小皿で、3の底部は回転糸切りで、胎土は少々粉っぽい。4はボタン状に突出した底部で、粉っぽい胎土をもち器壁が薄い。C55-1は古銭であ



C24図 SD01～03実測図 (S=1/40)



C25図　SK43実測図（S=1/30）

る。銅製で、復元外径2.55cm、厚さ1mmで、「永楽通寶」と鋳だしてある。

以上の出土遺物などより、当遺構は15～16世紀に該当すると考えられる。

SK43（C25図）

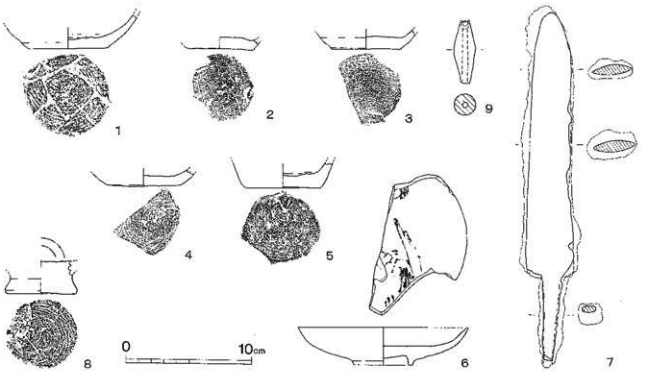
B・C-46Gr内、標高8.1m強で検出した。アメーバ状の歪な平面形であるが、南北長2.6m、東西長1.6m、最深度40cmを測り、柱穴の集中した遺構である。切り合い関係は不明である。

出土遺物は、弥生土器か古式土師器なのか土師器なのか不明瞭な小破片が10数点のみで、時期を決定するには資料不足で、不明である。

SD01～03（C24・C26図）

B・C-48・49Gr内、標高8.4mで検出した。調査区外から調査区外へと延び、検出長11m、幅約3mを測り、南北に位置する。掘り方断面は、西側は急傾斜で30～40cm幅の底面に到達し、東側へはいくつものステップをもって立ち上がる。B-B'及びC-C'土層断面より、東側のステップ状はSD01～03、SK06の切り合いで、各々をプラン検出時には確認できず、平面形を明確にすることはできなかった。SD01は幅約2m、深さ90cmを測り、断面形は「V」字状を呈し、SD02は幅60cm、深さ30cmを測り、断面形は逆台形を呈する。SD03は幅70cm、深さ35cmを測り、断面形は逆台形を呈し、覆土である6層はSD01・02に切られている。またSD03下には8層覆土のSK06が存在する。

10～20cm大の礫が同レベルで溝中央に並列する。これは当遺構唯一の粘質土である7層中から検出



C26図　SD01(1～7)・SD03(8・9)出土遺物実測図 (S=½)

された石列で、性格は不明である。礫の上っ面はSD01の1・2層にかかっている。これは当溝状遺構中最も古い遺構と考えられ、SD01とは分離したい。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器がコンテナ半箱分、及び土錘・鉄剣が各1点である。弥生土器と須恵器は混入品である。

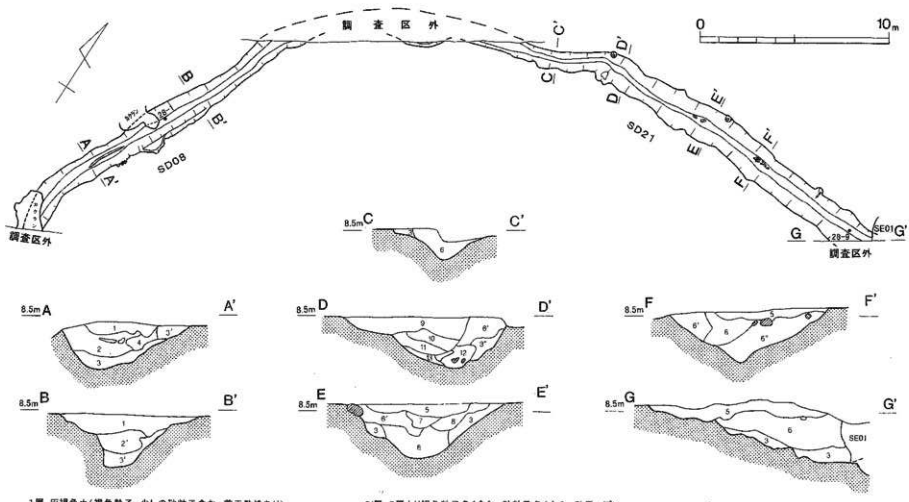
C26-1～5は土師器坏である。1・2は7層出土、3・4は出土層位不明、5は1層出土で、底部は回転糸切り、1は底部からスムーズに体部へ若干内湾して立ち上がる。5は厚手の底部で体部が直立ぎみに立ち上がるため坏であるのか不明である。C26-6は4層から出土した伊万里焼の皿で、小さな高台を削り出し、口縁端部は引き伸ばす。高台畳付け以外乳白色の釉薬が施され、見込み部分に絵が描かれている。C26-7は1層から出土した鉄剣である。錆が厚く付着し、右側縁が一部欠損しているが、刃部長20.5cm、幅3～3.5cmの小振りのものである。

C26-8・9はSD03出土の土師器柱状高台と土錘である。8は底部回転糸切りのどっしりした短めのもので、器部は故意に打ち欠いたかのようにきれいに欠損している。9は胴部の張った管状の紡錘形を呈するものである。

以上の出土遺物などより、SD03は13～14世紀頃に、SD01は17世紀頃のものであると考えられる。

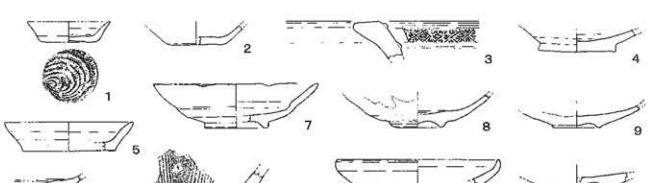
SD08・21 (C27・C28図)

SD08はA・B-50、B・C-51、C-52・53Gr内、標高8.4mで、SD21はC-54～57、B-57・58、A-58・59Gr内、標高8.5～8.6mで検出した。SD08は南側調査区外から南北方向に延び出し、約2m付近から方向を東へ25度曲げ、北側の調査区外へと延びていく。SD21は北側調査区外からE-20°-N方位に延び出し、約10m付近



1層 灰褐色土(褐色粒子・少しの砂粒子含む、若干粘性あり)
2層 暗褐灰色土(砂粒子少し含む、粘性ありソフト)
2'層 2層より砂粒子が減り、しまった感じ
3層 緋黄褐色土(地山との混合層)
3'層 地山少なく若干粘性あり
3"層 地山少なく砂質
4層 褐灰色土(砂粒子含む、若干粘性あるが砂質っぽい)
5層 橙灰褐色土(橙褐色粒子・砂粒子含む、粘性なく脆くしまっている)
6層 灰褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性あるが砂質っぽい)
6'層 6層より褐色粒子多く含む、砂粒子多く含み、砂質っぽい
6"層 6層より若干粘性ありソフト
7層 褐灰色土(砂粒子含む、粘性ありベトッとした感じ)
8層 褐灰色土(砂粒子多く含む、若干粘性あるが砂質っぽい)
9層 灰褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性ありソフト)
10層 灰褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり、しまりなくソフト)
11層 灰褐色土(砂粒子含む、若干粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい)
12層 黄灰褐色土(小石・砂粒子含む、若干粘性あり、しまりなくソフト)
13層 橙褐灰色土(粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい)

C27図 SD08・21実測図(平面図S=1/100・土層断面図S=1/40)



C28図　SD08(1～4)・SD21(5～12)出土遺物実測図 (S=⅓)

からは東へ曲げほぼ東西方向に南側調査区外へと延びていく。両溝状遺構とも他の遺構を切って延び、唯一SD21が南側調査区外へと延びる直前にSE01上の掘り方に切られている。

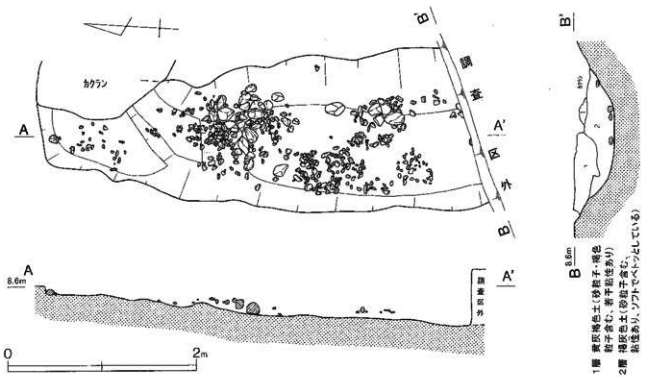
総延長はSD08が17m、SD21が28m、幅1～2m、深さ35～60cmを測り、断面が幅広の「U」字状を呈し、北側調査区外で合流すると考えられ、平面形は「L」字状を呈する。土層断面D-D'、E-E'、F-F'には掘り直した様子が観察される。またF-F'付近には10～20cm大の礫が6層上面レベルに並列する。SD01-7層検出の石列と検出状況が似ている。

SD08-1層と前記したSD01-1層は同じような覆土であることと後記する出土遺物からもほぼ同時期の16～17世紀と考えられ、SD01とSD08・21は併存しており、共に館を取り囲む堀と考えられる。SD01が外堀、SD08・21が内堀をなす。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器・陶磁器などコンテナ1箱分で、前2者は混入品である。C28-1～4はSD08出土、C28-5～12はSD21出土土器である。

1・2は土師器底部回転糸切りの小皿で、1は1層出土のほぼ完形品、底径のある底部からスムーズに体部へと移行し、外反して先細りの口縁部へと立ち上がる。内面及び外面上半にススがしっかり付着しており、灯明皿と考えられる。2も底部からスムーズに体部へと移行する。3・4は瓦質土器の浅鉢と皿である。3は内側に水平な平坦面をもつ口縁部で、外面に2条の貼付突帯を巡らし、間帯に格子花文のスタンプを押捺する。4は円盤状の底部がしっかり付いている。

5・6は土師器の小皿と坏である。5は底径のあるヘラ切りの底部から角をもって体部へと移行し、外反して立ち上がる。6は底部回転糸切りで外広がりに体部が立ち上がる。7～10は唐津焼の皿で、内面及び外面上半に釉が施され、削り出し高台をもつ。9は中し訳程度の小さな高台で、6層出土である。7・8は胎土が褐灰色で、釉薬は透明感のある緑色を基調としたもの、9・10は胎土が橙褐色で、釉薬は透明感のない白灰色のものである。7は内面に段をもって立ち上がり、口縁部は先細りとなり、ゆったりとした波をうつ。11は備前焼の擂鉢である。底部付近の破片で、内面にしっかりした擂り目が施されている。12は系譜は不明だが近世陶器の口縁部が内湾した皿で、橙褐色を呈する胎土は堅緻で、黄鉄色の釉薬が施されている。



C29図　SD26実測図（S=1/40）

SD26（C29・C54図）

A・B-56・57Gr内、標高8.6mで検出した。調査区外から南北に延び出す溝状遺構で、南側調査区外から北側へ緩やかな勾配で上り、4.8mで立ち上がる。幅1.1～1.7m、深さ10～40cmを測り、断面形は平たい逆台形を呈する。

上層からは焼け土及び炭化物が検出され、床面には5～15cm大の大小礫が敷き詰められている。大きいものはほとんど軽石である。遺構の性格は不明である。

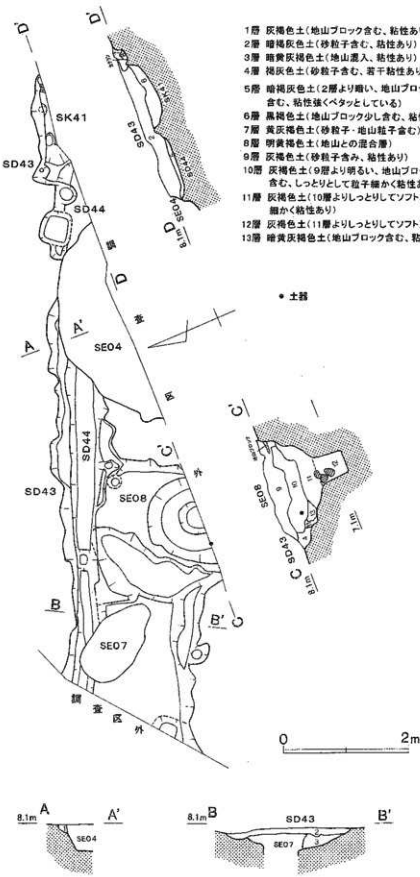
出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器（青磁・唐津焼など）が1袋分、鉄釘が1本である。前2者は混入品である。土器は小片のため実測可能なものはなかった。C54-1は鉄釘である。現存長3.3cm、幅4mmを測り、断面四角形の小さなもので、頭は打ち潰されている。

以上の出土遺物などより、当遺構は16～17世紀に該当すると考えられる。

SD43・44（C30・C31図）

C-44～46・B46Gr内、標高8.1m強で検出した。C区内で最も西に位置する遺構である。プラン検出時には、西側調査区外からW-10°-Nの方向へ延び、途中SE04に切られるが南側調査区外へと続く、現存長約10m、最大幅2.4m、深さ10～20cmを測るSD43として検出した。一段掘り下げるとSD44とSE07を検出した。幅40cm、深さ10～15cmを測るSD44は、SD43の北側縁に沿って延びており、SD43の二段堀部分の可能性もある。SD44とSE07の新旧関係は判別できなかった。SE01・SE07間のSE08を含んだ落ち込みは、SD44が切っている。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小片が1袋分とSD43から玉縁状の口縁部をもつ白磁碗の小片1点である。前2者は混入品である。C31-1は土師器の坏である。厚手の底部は回転糸切りで、器



C30図 SD43・SD44・SE08実測図 (S=1/60)

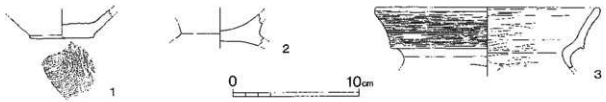
壁へは若干くびれさせて外開きに立ち上がる。

C31-2はSE08出土のものと同一個体と考えられる土器である。色調・焼成などから土師器の小型品のようではあるが、胎土に1mm大の砂粒子を多く含み、あまり緻密ではないところ、弥生土器のようでもあり、種別は不明としておく。器種は、くびれをもっているので、弥生土器なら上げ底の底部、土師器なら高台付きの坏であろうか。後記するが、SE08からは1点のみ土師器らしい小破片が出土しているが、あとは弥生土器である。

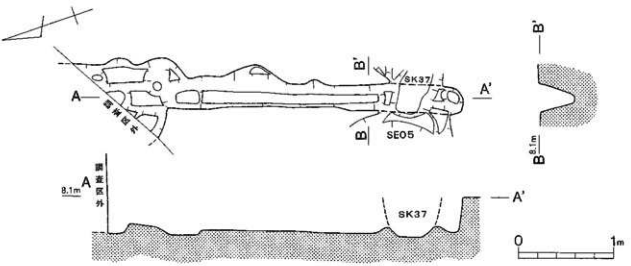
以上、当遺構の時期決定には資料不足のため不明である。

SD45 (C32図)

C-45・46Gr内、標高8.1mで検出した。南はSK37・SE05に切られ、北は調査区外へと延びる。検出長4.2m、幅は30cmが基本であるが、北側でピット状を呈して膨らみ、最大幅80cm、深さ40cmを測り、N-20°-E方向にまっすぐに延びる。断面は底面幅を10cm程度もつ「U」字状を呈し、まるで構塀を



C31図　SD43(1・2)・SE08(2・3)出土遺物実測図 (S=⅓)



C32図　SD45実測図 (S=1/40)

打ち込んであったもののようである。

出土遺物は、古式土師器の小片が小袋1袋分で、上層から1点土師器の小片が出土したがこれは混入であろう。実測可能なものはなかった。SK37から出土したC22-1は、当SD45内に埋没していたものが、SK37に破壊された時に混入した可能性あり。

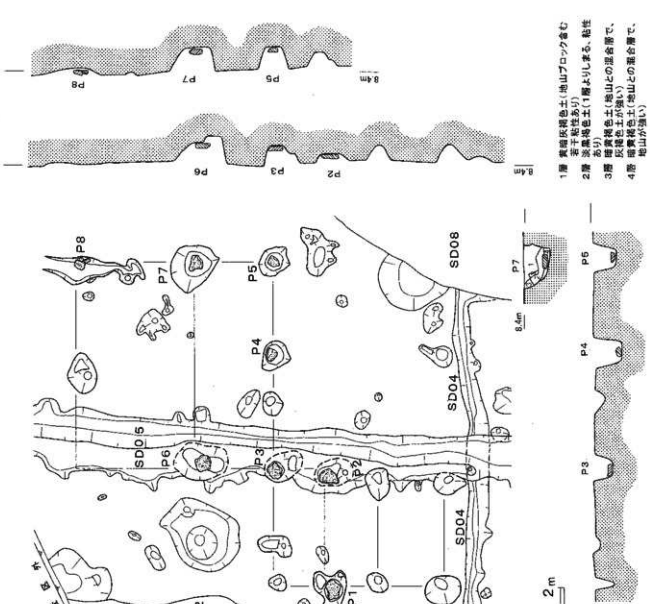
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生終末～古墳初頭に該当しよう。

SB01 (C33図)

B・C-49・50Gr内、標高8.4mで検出した。P1～P8は柱穴内に厚さ8～10cmの平べったい礫を埋置したものである。この礎板の埋置された柱穴のみでは、建物を建てることのできる配置ではなく、礎板の埋置されない柱穴との組み合わせにより、P3を中心に南西側が1間×3間の桁行2.7m、梁間1.9m、北東側が2間×2間の桁行3.3m、梁間3mを測り、N-4°-Wのほぼ東西南北に位置する連結した掘立柱建物跡である。礎板は、芯となる柱穴内に埋置されていたものか、または廃棄時に抜き取られて存在しないのかが考えられる。浅い溝状遺構であるSD05内に位置する柱穴は、SD05を掘り下げると検出できた。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小片が中袋1袋分で、前2者は混入品である。実測可能なものは皆無である。

以上、当遺構の時期決定には資料不足ではあるが、SD01・08の間にSD01と方位を同じくして位置しており、SD01・08と同時期になる可能性が考えられる。

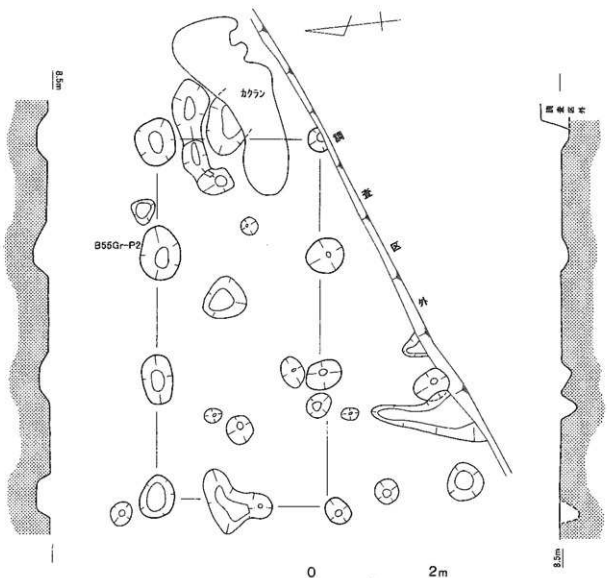


C33図 SB01実測図 (S=1/60)

SB02 (C34図)

B54、A・B-55Gr内、標高8.5m強で検出した。南側に調査区外が迫っており、一応1間×3間の桁行6m、梁間2.6mを測り、W-1°-Nのほぼ東西に位置する掘立柱建物跡とした。両梁間間に位置するピット状の落ち込みは、図下はしたが伴うものか判断はできなかった。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小片が小袋1袋分のみで、前2者は混入品である。実測可能なものは皆無である。



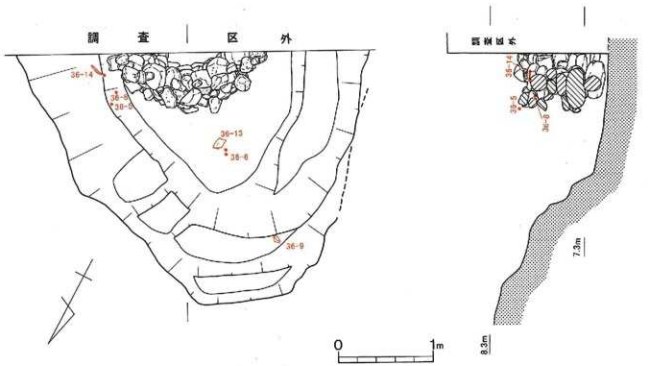
C34図　SB02実測図（S=1/60）

以上、当遺構の時期決定には資料不足ではあるが、SB01と方位を同じくし、SD08・21に囲まれておりこれらと同時期になる可能性が考えられる。

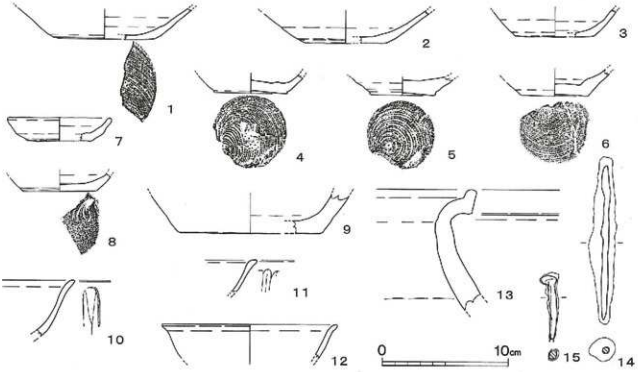
SE01（C35～C37図）

A・B-59Gr内、標高8.6mで検出した。プランは、SE02と共に黄色みを帯び粒子が粗くてジャリジャリした灰褐色土を覆土とした大きな落ち込み状を呈していたが、10数cm下げるとそれぞれの遺構に分かれた。また土層断面より、ジャリジャリ層は分層でき、1層はSE01及びSE01・SE02間に堆積し、18～20層は1層を切ってSE02に堆積している。

SE01は石組みの井戸である。ほぼ半分が調査区外へ延びている。掘り方平面は楕円形を呈し、検出長径2.8m、短径3.7m、深さ60cm（井戸側上面まで）を測る。井戸側平面は円形を呈し、径1.2m、深さ90cmを測る。



C35図　SE01石組み及び遺物出土状況図（S=1/40）



C36図　SE01出土遺物実測図（S=1/3）

SE01は楕円形の穴を掘り、その内部に石を組み上げて井戸側とし、井戸外に9～13層を裏込めして作り上げた井戸である。井戸使用時に6～8層が堆積し、廃棄する際は、5層から上を破壊して石を抜き取ったものと考えられ、1～5層はその窪みに堆積したものである。

出土遺物は、須恵器・土師器・陶磁器・鉄製品・古銭などがコンテナ半箱分である。古銭は調査区外壁面にサブトレンチを入れている時3～5層中にて鉄製品（C36-15）と共に出土した。1文字は若干残っているが風化が激しくぼろぼろで文字の解読は不可能であった。

井戸を構築・使用・廃棄後ともほぼ同じ様な遺物が出土した。井戸内からの遺物は土師器の小片が約20点と少なく、かえって裏込め土中からの方が小片ではあるが多めに出土した。

C36-1～6は土師器の坏である。底部は1のみ静止糸切り、他は回転糸切りである。1～3は器壁が薄く胎土が粉っぽいもので、底部から体部へは変化なくスムーズに移行し、1・2はかなり外開きとなるプロポーションを呈する。4～6は底部がやや厚手で、底部から体部へは若干のくびれをもって立ち上がる。C36-7・8は土師器の小皿である。底部は回転糸切りで、底部から体部へくびれをもって立ち上がる。8の胎土は粉っぽい。C36-9は土師器のこね鉢で、硬質に焼いてある。

C36-10～12は青磁碗の小片で、10は緑色系の、11は青緑色系の、12は緑灰色系の釉が施されている。10・11は龍泉窯系で、外面に鏑蓮弁が施こされている。C36-13は常滑焼大甕の口縁部である。小さくて丸い玉縁口縁を有し、頸部は内傾する。

C36-14・15は鉄製の断面四角形を呈する釘である。14は長めだが頭を欠損しているのか細いまま終わっている。15は短めで先端は欠損しているが、丸い頭が付いている。

以上の出土遺物などより、井戸を構築し、使用し、廃棄したのは14～15世紀と考えられる。

SE02（C37～C41・C54図）

B・C-59・60Gr内、標高8.6mで検出した。SE01との関係はSE01の記述の中で述べてある。SE02の掘り方の平面は一部延びた楕円形を呈しているが、D-D'ラインから南東、南西に位置する凹凸した部分は、土層断面D-D'より観察すると41・42・49層が切り込んでいる。よってSE02本来の平面は、A-A'ライン上のE-E'ラインから北へ40cmの位置を中心に半径2.4mで描いた円形である。深さ1.6mを測る。

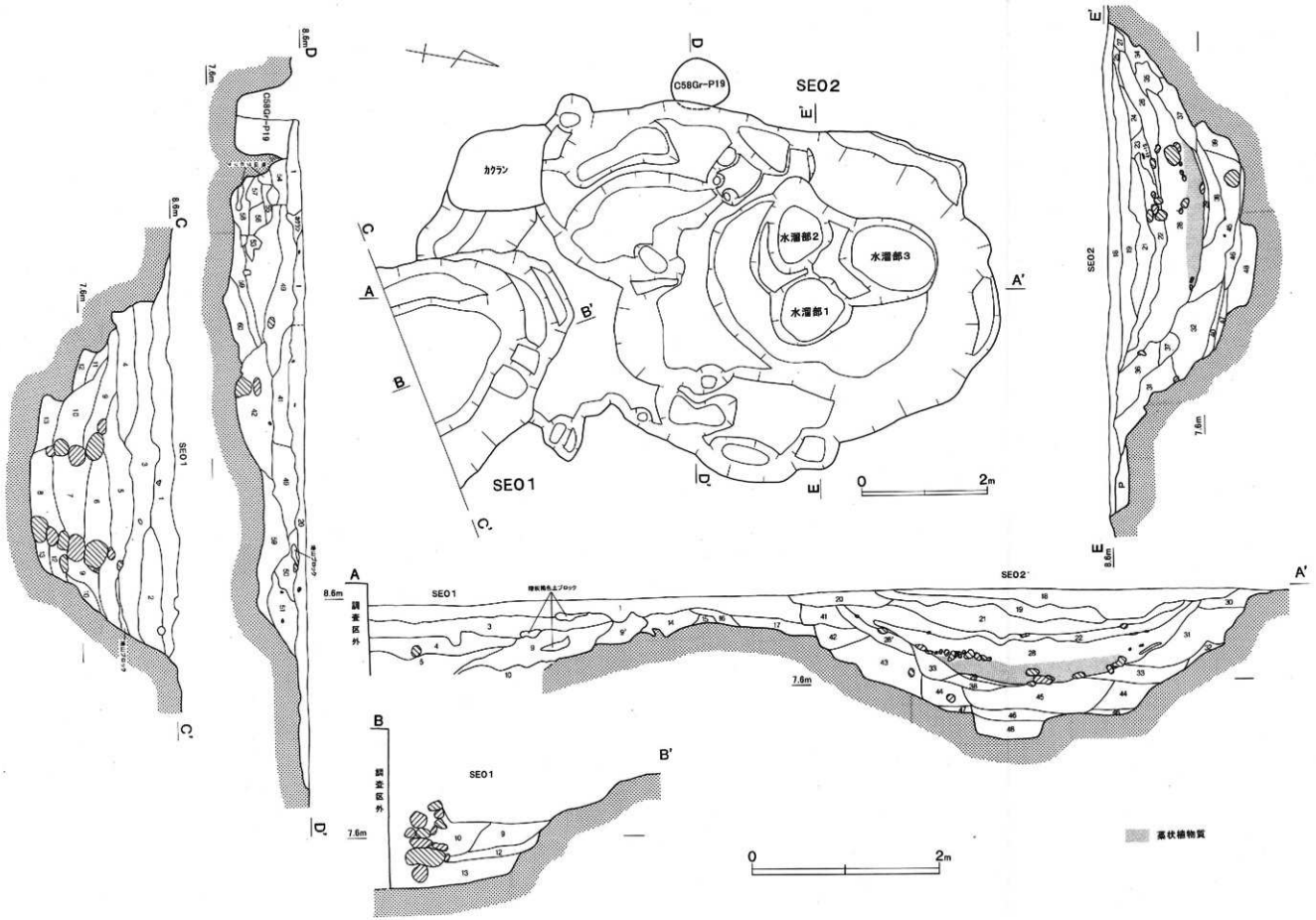
底面に径約1.2mの水溜部1～3が築かれ、水溜部上のステップには20cm大の礫が数個出土しており、本来は井戸であったと考えられる。当時の井戸型を想定するすべは残存しない。

最初の井戸廃棄後には水溜部の上のステップに薄い砂質土46・47層を載せている。その後砂質土を含み全体的にソフトでしまりのない30～37・40～44層でいったん埋まり、再掘削して45層を水溜部として使ったのか、構築した45層の井戸の裏込めとして30～37・40～44層が外周に堆積しているのか、という状況を呈している。45層を水溜部とした井戸を廃棄した後には灰白色砂38層を載せ、以後は50cm厚さの粘質土28層が堆積し、同層中の下位には礫が投棄されており、重複するがその上に20cm厚さで薄状の植物質が人工的に敷き詰められたように堆積し、その植物質上には再び礫の集中投棄がみられる。ゴミ捨て場として再利用された感じである。28層の上にも砂質土を埋め固めて、最終的に放棄したようで、あとは自然堆積している。

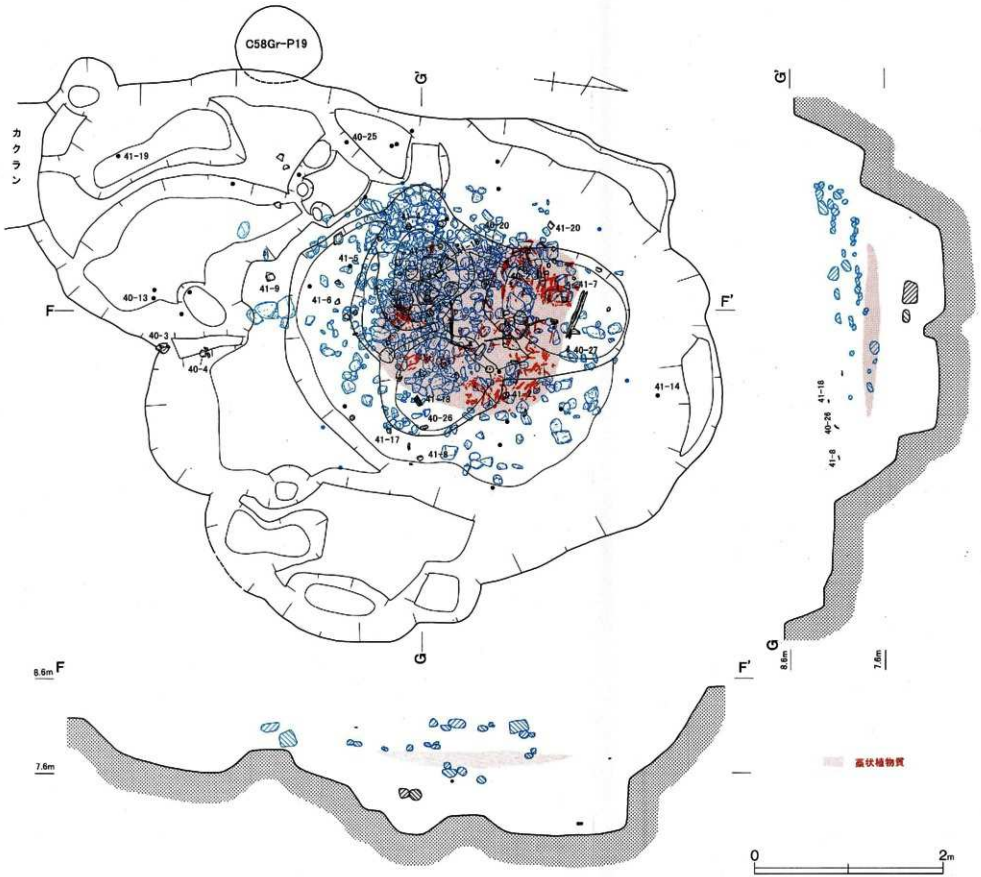
出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器（緑釉陶器・白磁・青磁・備前焼・常滑焼・美濃焼・唐津焼）・瓦質土器がコンテナ2箱分、砥石、鉄製品、木製紡錘車である。土器はほとんどが破片で、完形品は皆無である。弥生土器・須恵器は混入品である。

C39図は出土土器の層位毎の出土状況である。層位は先の記述に合わせ大きく10にグルーピングしている。堆積順序を前記したが、出土土器からは、時期差を読みとることができない。またグループ

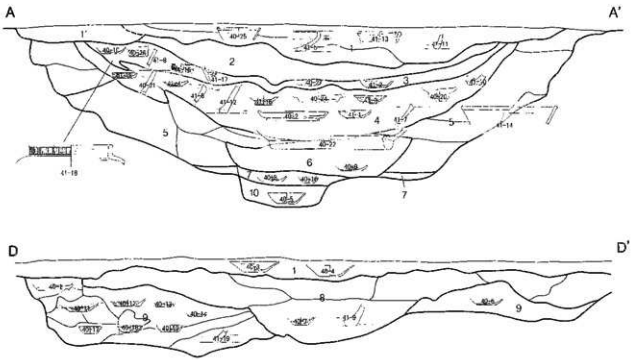
1層　黄灰褐色土（砂粒子多く含む．若干粘性あるが砂質っぽい）
2層　灰褐色土（砂粒子含む．若干粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい）
3層　灰褐色土（2層より暗くしっとりしてくる．地山小ブロック若干含む）
4層　灰褐色土（3層より暗くしっとりした感じ．地山小ブロック・炭化物粒子多く含む．若干粘性あるが粒子大きめ）
5層　灰褐色砂質土（地山小ブロック含む．しまりなくソフト）
6層　暗灰褐色土（砂粒子含む．粘性あり．5層よりしまりなくソフト）
7層　暗灰褐色土（6層より暗く、しまりなくソフト．砂粒子含む．粘性あり）
8層　淡黒褐色粘質土（しまりなくソフト）
9層　白黄灰褐色土（地山粒子・ブロック多量に含む．砂粒子含み砂質）
9'層　9層より暗く、地山粒子・ブロックが少ない
10層　明灰褐色土（9層より褐色が強くなり、地山ブロック多く含む）
11層　褐灰色土（やや粘性あり）
12層　暗褐色粘質土（11層より粘性強い）
13層　灰褐色砂質土
14層　暗灰褐色土（地山ブロック少し含む．粘性あるがサラッとしている）
15層　暗褐色土（下位はベトッとしている）
16層　暗黄褐色土（地山がマーブル状に入ってる）
17層　暗灰褐色土（地山小ブロック・黒色・褐色粒子含む．若干粘性あり）
18層　橙灰褐色土（砂粒子・褐色粒子多く含む．若干粘性あり）
19層　褐灰色土（砂粒子多く、褐色粒子含む．若干粘性あるがサラッとしている）
20層　暗黄灰褐色土（しまって固い．若干粘性あるが砂質っぽい）
21層　暗灰褐色土（砂粒子含む．粘質っぽくソフトでしまりなし）
22層　白黄灰色土（砂粒子少し含む．砂質）
23層　灰褐色土（わりと粘性ありソフト）
24層　褐灰色土（若干粘性あるが砂質っぽくソフト）
25層　明褐灰色土（若干粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい）
26層　明褐灰色土（25層より灰色強くしっとりしている．砂粒子少し含む．若干粘性ありソフト）
27層　灰褐色土（若干粘性ありソフト）
28層　暗褐灰色粘質土（砂粒子含む．しまりなくソフト）一下位に植物質を含む
28'層　28層より若干明るい
29層　暗灰色土（粘性あり）
30層　褐灰色土（粘性あり）
31層　黄褐灰色土（砂粒子含む．粘性あり．ソフトでしまりなし）
32層　暗灰褐色土（粘子細かいが粘性少なくサラッとしている．しまりなくソフト）
33層　暗褐色土（砂粒子含む．32層より粘性強い）
34層　暗灰褐色土（地山粒子含む．粘性ありソフト）
35層　褐灰色土（橙褐色粒子含む．粘性あり．しまりなくソフト）
36層　黄白褐色砂質土（砂粒子含む・しまりなくソフト）
37層　明褐灰色砂質土（しまりなくふかふかしている）
38層　灰白色砂
39層　淡灰褐色砂質土（粘性なし．ソフト）
40層　暗灰色土（砂粒子含む．若干粘性あり）
41層　明褐灰色土（砂粒子含む．若干粘性あるが粒子が大きめで砂質っぽい．ソフトでしまりなし）
42層　明褐灰色土（41層より暗い．砂粒子含む．粘性強くなりソフト）
43層　褐灰色砂質土
44層　暗灰色土（砂粒子含む．粘性あり）
45層　褐色粘質土（砂粒子含まない）
46層　灰色砂質土（砂粒子多くザラザラしている）
47層　黄褐色砂質土（粒子が細い）
48層　暗褐灰色土（シルト質．下位は粘性あり）
49層　灰褐色土（砂粒子・褐色粒子含む．若干粘性あり．しまりなくソフト）
50層　灰褐色土（49層より暗い．若干粘性残すが砂質っぽくソフト）
51層　暗灰褐色土（粘性あり）
52層　暗灰褐色土（砂粒子多く、褐色粒子含む．若干粘性あるが粒子大きめで砂質っぽい）
53層　暗灰褐色土（52層より暗い．若干粘性あるが砂質っぽい．しっとりしてソフト）
54層　暗灰褐色土（砂粒子含む．若干粘性残るが砂質っぽい）
55層　暗褐灰色土
56層　黄灰褐色土（若干粘性あるが粒子大きめで砂質っぽい）
57層　淡黒褐色土（粘性ありソフト）
58層　暗灰褐色土（砂粒子少し含む．粘性ありベトッとしている）
59層　暗黄灰褐色マーブル土（砂質）
60層　暗橙褐灰色土（地山ブロック・橙色粒子含む．粘性ありソフト．粒子が大きめでバリッとした感じ）



C37図　SE01・02実測図（平面図S=1/60・土層断面図S=1/60）



C38図　SE02遺物出土状況図（S=1/40）



C39図　SE02出土土器層位別模式図

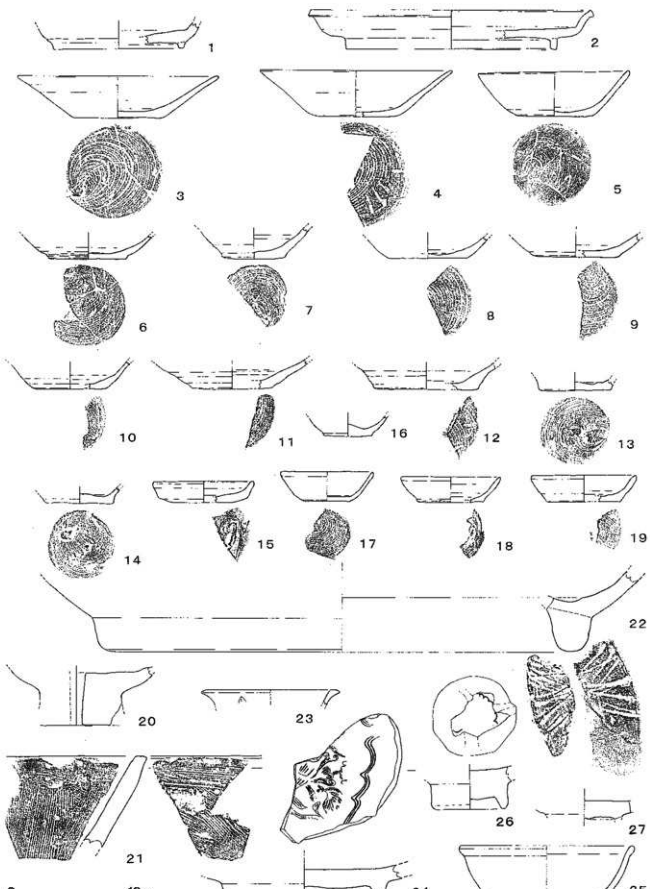
4の中には伝世品と見られるような土器が集中している。

C40-1・2は須恵器である。1は小さな高台が縁寄りに付く碗で、若干内湾して立ち上がる。2は高台の付く盤である。体部は外反し立ち上がり、口縁部は屈曲し若干肥厚して面をもつ。

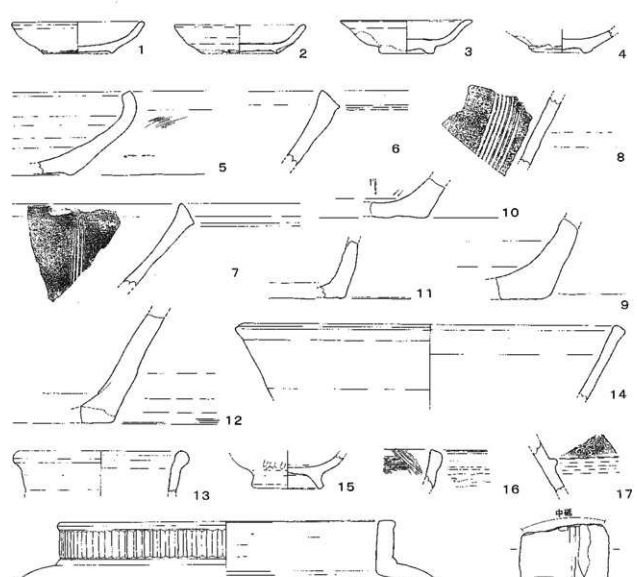
C40-3～22は土師器である。3～14は胎土が粉っぽく堅緻な坏で、器壁が薄く底部回転糸切りを行うものである。底部から体部へスムーズに移行し外開きに立ち上がる3・4・8、碗状に立ち上がる5。底部からナデによりくびれをもって体部へ移行し外開きに立ち上がる6・9・11・12、碗状に立ち上がる7・10に分類できる。15～19は小皿で、底部は19のみ静止糸切りで、あとは回転糸切りである。16・17は器壁が薄く、立ち上がりが長く碗状を呈し、15は器壁が厚手で立ち上がりはかなり短いもの、18・19は底部から体部へ角張って移行し、直線的な立ち上がりをみせる。20は大型の柱状高台状のもので、中央に1.3cmの穿孔がある。21は堅緻な胎土の擂鉢で、口縁端部は平坦面をもつ。22は脚付き浅鉢で、手捏ねのような丸い感じの脚が付き、接合面は両方に凹凸のキズをつくり合わせて接合している。

C40-23～27は青磁で、23は青緑色系の、24は緑色系の、25は青灰色系の、26・27は緑灰色系の釉が施されている。23・24は龍泉窯系の碗と盤で、23は口縁部が外反し、外面には鎬蓮弁が観察される。24はしっかりした高台が付き、見込みには波状文を縁取りし内側に花文を施す。高台内がドーナッツ状に露台である。25・26は碗の口縁部とどっしりした高台部で、25は丸みをもち内湾した体部から口縁部は外面からのナデにより丸く作り出す。26は高台内以外に施釉され、見込みには山形状の文様が観察されるが全体像は不明である。27はやや厚手で高台の付く皿で、高台内以外に施釉される。

C41-1・2は美濃焼の、C41-3・4は唐津焼の皿である。1・2は小さな削り出し高台をもち、内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。高台内には砂目当て痕あり。1は底部以外に施釉され、2は畳



C40図　SE02出土遺物実測図1（S=⅓）



C41図　SE02出土遺物実測図2（S=⅓）

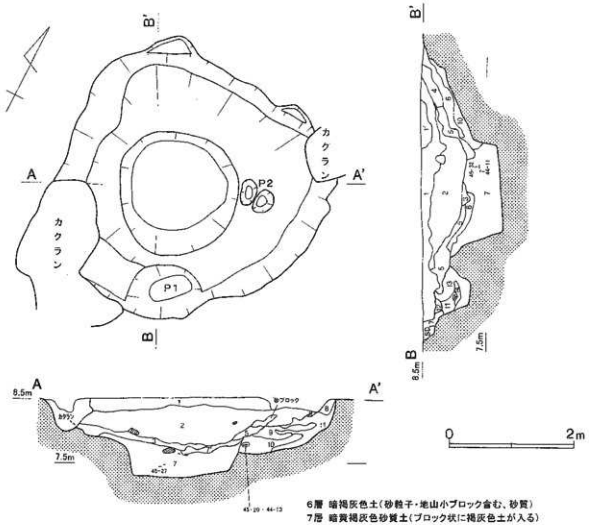
付け以外に施釉され、部分的に釉が厚く溜まっている。3・4は小さな削り出し高台をもち、内面及び外面上半に施釉される。3の口縁部は外反し、見込みには砂目積み痕が3ヶ所あり。

C41-5～11は備前焼の5は浅鉢、6は擂り目が現状では観察できないのでこね鉢、7・8は擂鉢、9～11は鉢などの底部である。5は口縁部が強く内湾して端部は平坦面をもつ。内面は使い込んだのかつるつるしている。6・7は口縁下部が外面からナデて若干突出させ、断面三角形となる。8には幅広の擂り目が施してある。9は分厚い底部、10の内面は使い込んだようにつるつるしている。11は直立ぎみの立ち上がりを呈するもので、内面に朱の付着物らしきものが観察される。

C41-12は常滑焼の現状で擂り目が観察されないのでこね鉢である。内面立ち上がる部分に粘土の継ぎ目が観察される。

C41-13・14は系譜の不明な陶器である。13は玉縁状の口縁部をもち頸部の直立した壺で、口縁部内外面に自然釉が掛かっている。14はこね鉢で、口縁部は内外面のナデにより強調し、端部は平坦面をなし、1条の沈線を施す。

C41-15～19は瓦質土器である。15はしっかりした高台をもつ碗、16は擂鉢で、内面に粗いハケ目調整後擂り目を施している。17は浅鉢で、貼付突帯が1条巡り、その上に花形スタンプが押捺されている。18は奈良火鉢の風炉で、直立した口縁部の端部は平坦面をもち、肩部は張って丸く体部へと移行



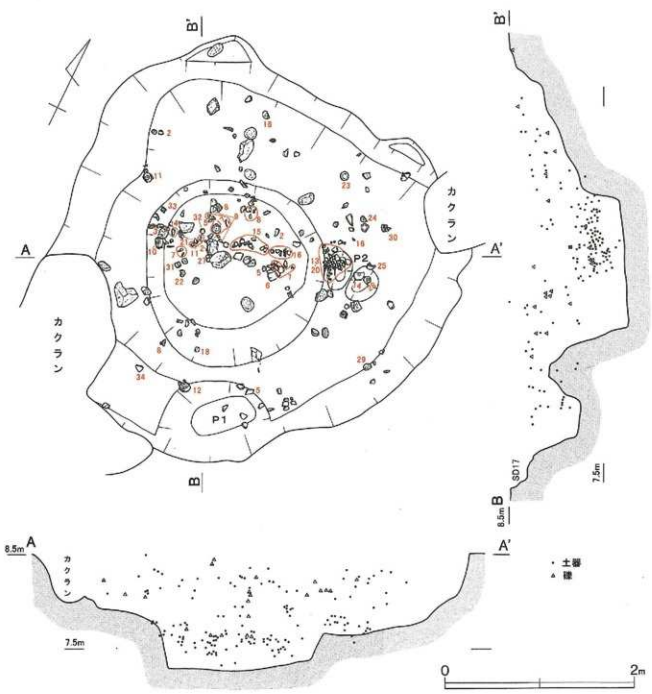
1層 暗灰褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性あり)
1'層 1層より橙色を呈する
2層 暗灰褐色土(砂粒子含む、粘性あり、ソフトとなる)
3層 黄褐色砂(地山とほとんど見分けがつかないが、橙色砂ブロックが入る)
4層 暗黄褐色砂質土(5層より明るく地山ブロック多めに混入する、砂粒子多く含む)
5層 暗黄褐色砂質土(2層がブロック状に入る)
6層 暗褐灰色土(砂粒子・地山小ブロック含む、砂質)
7層 暗黄褐灰色砂質土(ブロック状に褐灰色土が入る)
7'層 7層中の褐灰色土ブロック
8層 橙暗褐色土(若干粘性あり)
9層 暗褐色土(砂粒子含む、若干粘性あり)
10層 黄褐色砂質土(灰褐色土・橙白色シルトがマーブル状に入る)
11層 橙色砂
12層 暗灰褐色土(15層より粒子大きく砂質っぽい)
13層 褐灰色土(まだら状、粘性あり)
14層 暗灰褐色土(粒子細かくきれいな層、粘性ほとんどなし)

C42図 SE03実測図 (S=1/60)

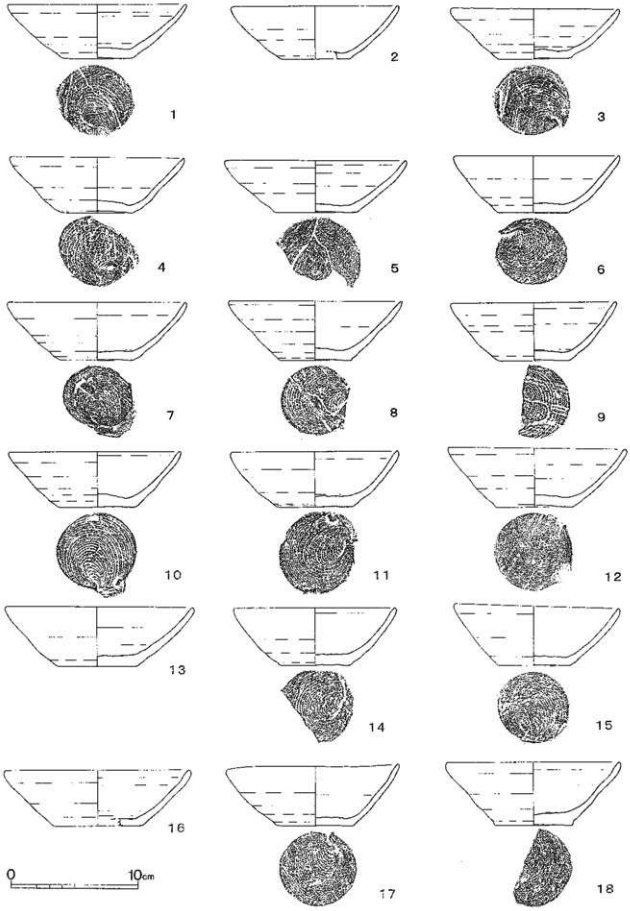
する。口縁部外面には格子戸状の横断面が鋸歯状を呈する文様を施す。19は脚付きの浅鉢と考えられるもので、底部よりやや上に貼付突帯を巡らす。

C41-20は細粒花崗岩製の砥石である。中砥ぎから仕上げ研ぎに6面体の全面使用している。

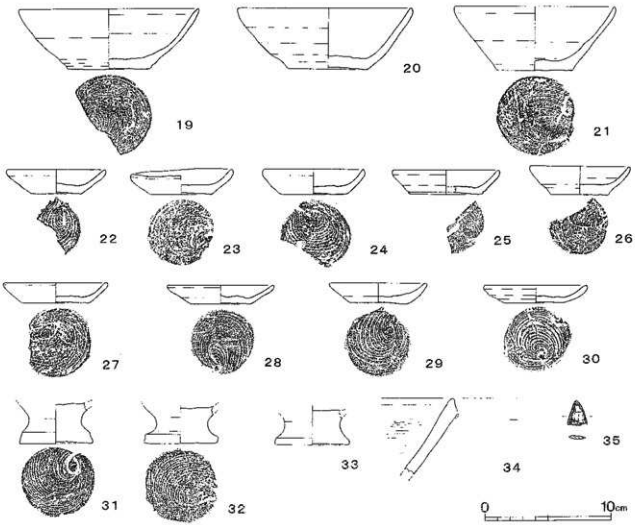
C54-2～9は鉄製品で、2は小さな関を有する鉄鏃と考えられるが、上下とも欠損しているため詳細は不明である。3～9は釘で、6・8は断面円形、3～5・7・9は断面角形である。3のように太いものから4のように細身のもの、8のように小さいものまであり、頭は打ち潰されている。



C43図　SE03遺物出土状況図（S=1/40）



C44図　SE03出土遺物実測図1（S=⅓）



C45図　SE03出土遺物実測図2 (S=⅓)

以上の出土遺物などより、最下層出土C40-5を考慮すると、井戸を使用したのは15世紀頃、廃棄したのは15～17世紀と考えられる。

SE03 (C42～C45図)

A・B-53Gr内、標高8.5m強で検出した。平面は楕円形を呈し、断面は漏斗状を呈する井戸である。上部径4.1m、深さ1.2mを測る。2段掘りとなる7層上面径は1.9mを測り、これが本来の井戸側と考えられる。

9～11層は井戸を構築する際の掘り方周囲の裏込め、7層は井戸内堆積、3・5・6層は井戸を廃棄する際の掘り方に埋めた砂質土、1・2層はその後に堆積した層である。9層は9層上面検出時に、9層を検出したA-A'ラインA'側を中心に外形に沿って半ドーナッツ形の溝状を呈していた。

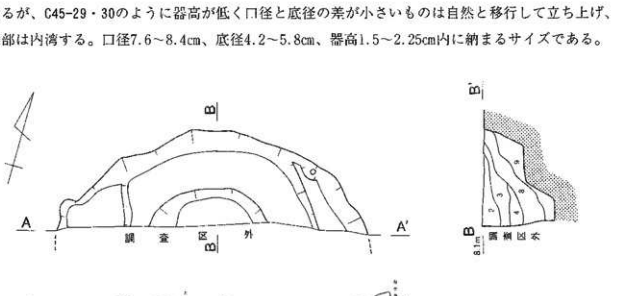
当遺構からは橙褐色を呈する土師器の坏・小皿が多く出土した。特に、7層中と10層中からで、2段掘りのステップ上に掘られたP2上面からも纏まっている。しかしほとんどが破片で、小皿1点C45-23のみ完形品で出土し、接合によりほぼ完形品となったものは7層中出土のC44-10、P2上面出土のC44-13・

C45-20のみである。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器がコンテナ2箱分及び石鏃1点である。土器は8割強が上記した土師器の坏小片で、1割強の剥合で弥生土器も出土している。弥生遺構を破壊して構築したと考えられる。前2者は混入品である。

土師器坏の出土数は、底部2/3以上あるものを1個体と計上すると42個体である。そのうち口径・底径・器高が測定できる21個体を掲載した。C44-2・13・18は摩滅のため不明であるが、それ以外は底部回転糸切りである。底部から体部へは境を明瞭にして立ち上がり、体部中央では若干強くナデつけ、口縁部は内湾する。また内面には渦巻状のナデ痕が明瞭に残っているものが多い。口径12.5～14.5cm、底径5.4～7cm、器高4～5cm内に納まるサイズである。前記したような大まかな特徴は同じであるが、器形に若干の差がありそれを数値化した。(口径÷底径)÷器高＝比率とし、数値の大なるもの程口の開いたプロポーションを呈することとなる。C44・45図では、数値の大なるものから並べた。C44-1～C45-21がそれである。

土師器小皿の出土数は、掲載した9個体のみ確実であり、坏として計上したものに小皿が混ざっている可能性もある。全て底部回転糸切りで、底部から体部へは境を明瞭に立ち上がるものがほとんどであるが、C45-29・30のように器高が低く口径と底径の差が小さいものは自然と移行して立ち上げ、口縁部は内湾する。口径7.6～8.4cm、底径4.2～5.8cm、器高1.5～2.25cm内に納まるサイズである。



1層 暗褐灰色土(砂粒子含む、少し粘性あり)
2層 暗褐灰色土(地山ブロック含む、粘性あり少しソフト)
3層 明褐灰色土(2層に地山ブロックが多く入った層、混ぜられたような土、粘性あり2層よりソフト)
4層 明褐灰色土(3層に比して地山ブロックなくなりポソポソしてくる、粘性あり3層よりソフト)
5層 明褐灰色土(地山ブロック含むが、3層より細かく少ない、3層よりポソッとしてソフト)
6層 黄灰白色砂質土(所々に灰褐色土ブロック含む、地山との混合した層で、ほとんどが地山砂)
7層 ほぼ6層と同じだが、地山砂が少なく灰褐色土が多く入る
8層 灰褐色土(地山ブロック若干含む、粘性あり)
9層 黄灰白色シルト(粒子細かくシルト質、地山に貼り付けてありしまっている)

C46図 SE04実測図 (S=1/40)

C45-31～33は土師器の柱状高台部である。3点とも上部の器部が接合せず、器部の器形は不明である。底部回転糸切りで、短く湾曲した柱状部から裾部へは段を付ける。

C45-34は瓦質土器のこね鉢である。口縁部は断面三角形を呈する。

C45-35は安山岩製の石鏃である。無茎の三角形を呈するもので、縁辺加工のみ行われている。出土遺物に弥生土器（中期後葉中心）が高比率で混入しており、それらと同じように混入したものと考えられる。

以上の出土遺物などより、当遺構は12～13世紀に該当しよう。

SE04（C46図）

C45Gr内、標高8.1mで検出した。SD43・44などと重複しているが、これらを切っており、新しい遺構である。調査区南壁面の土層断面A-A'からは、標高8.3mから確認できる。南側は調査区外へと延びており、約1/2強を検出している。掘り方平面は楕円形、断面漏斗状を呈すると考えられる。両サイドにあるステップを無視すると、径2mの円形を想定することができ、これが本来の井戸であると考えられる。その内部には径1.2m程の水溜部がある。掘り方長軸は3.3m、深さ90cmを測る。6・7・9層は裏込めと考えられる層、4・5層は井戸内堆積層、3層はかなりの地山砂を含んでおり、井戸を廃棄する際に人工的に埋めたものであろう。

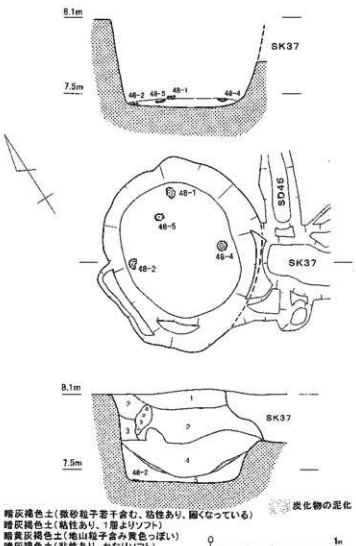
出土遺物は、土師器の小片小袋1袋分と下層から備前焼と考えられるこね鉢の破片が1点で、実測可能なものは皆無である。

以上より、当遺構の時期決定には資料不足で不明である。

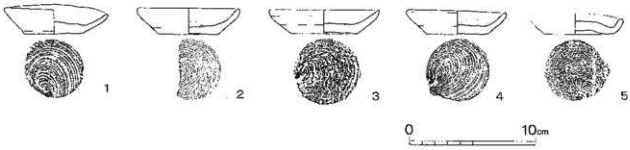
SE05（C47・C48図）

C-45・46Gr内、標高8.1mで、SK37と共に検出した。切り合い関係の詳細はSK37で記述したとおりである。平面は楕円形、断面は筒状を呈し、径1.5×1.25m、深さ70cmを測る。

4層はかなりソフトな層で、直下には平面全体的に1～2cmの厚さで植物質のものが炭化し、それが泥化したような土が残存していた。平坦な堆積ではなく内面が窪んだ状況で検



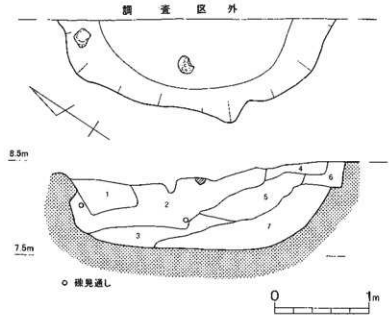
C47図　SE05実測図（S=1/30）



C48図　SE05出土遺物実測図（S=⅓）

出された。SE05は井戸と考えられるので、井戸内部の浄化施設などと考えられる。その下底面からは、土師器の小皿が上下正位置で、置かれたような状況で5枚出土した。1枚は調査時の不手際により取り上げてしまい、実測図（C48-3）のみ掲載した。これらは井戸を掘削後、井戸祭祀を行う際に置かれ、井戸側を設置したものと想定される。

出土遺物は、前記した土師器以外に、弥生土器・須恵器の小片がわずかにあるが、皆混入品である。C48-1～5は前記した土師器の小皿5枚である。全て底部回転糸切りで、底部から体部へは境を若干不明瞭に立ち上げ、口縁部は内湾する。口径7.8～8.7cm、底径4.6～5.1cm、器高1.85～2.25cm内に納まるサイズである。5のみは、体部から口縁部の残存部分が少なく、それも成形時に指押さえにより変形している。



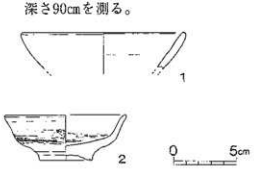
1層　灰褐色土（砂粒子少し含む、粘性あり少しソフト）
2層　暗灰褐色土（少し地山粒子含む、粘性あり1層よりソフト）
3層　暗灰褐色土（黄褐色砂ブロック含む、粘性あり、かなりソフト）
4層　灰褐色土（砂粒子・軽石砕・褐色粒子含む、粘性ほとんどなくしまっている）
5層　暗黄灰褐色土（黄褐色砂がマーブル状に入っている、粘性あり）
6層　黄灰褐色土（地山ブロック含む、しまって硬い、粘性あり）
7層　黄灰褐色土（黄褐色砂の混合層、粘性残るが砂質）

C49図　SE06実測図（S=⅙）

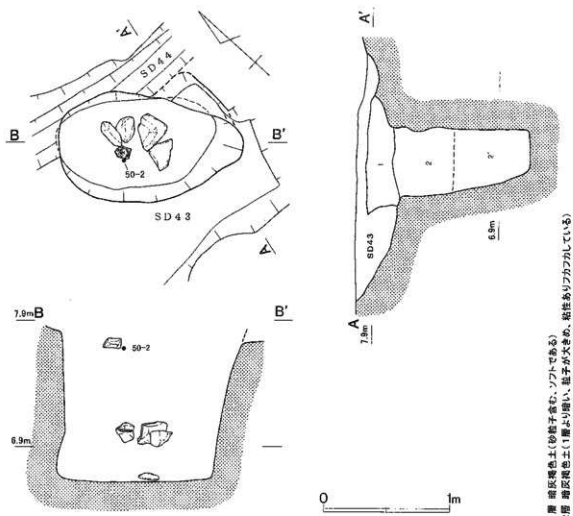
以上の出土遺物などより、当遺構は12～13世紀に井戸祭祀を行い井戸使用を開始したと考えられる。

SE06（C49・C50図）

C47Gr内、標高8.2m 強で検出した。調査区東壁面の土層断面からは、標高8.5mから確認できる。東側半分以上は調査区外へと延びているが、平面は円形を呈すると考えられ、断面は幅広の逆台形である。径3m以上、深さ90cmを測る。



C50図　SE06(1)・SE07(2)出土遺物
実測図（S=⅓）



C51図　SE07実測図 (S=1/30)

南側から斜めに堆積している4～7層は、黄褐色砂及び地山ブロックを混合した層である。人工的に埋められた様相を呈するので、井戸と想定されるSE06の裏込め部分と考えられる。

出土遺物は、弥生土器・土師器の小片が小袋1袋分である。弥生土器は混入品で、実測可能なC50-1のみ掲載した。2・7層出土破片が接合したもので、井戸構築と使用時の時間差はあまりないようである。1は橙褐色を呈する土師器の坏口縁部である。やや厚みのある口縁部で、緩やかな角度を成す。

以上の出土遺物などから、当遺構は13世紀頃に該当すると考えられる。

SE07 (C50・C51図)

C44Gr内、標高7.9mで、SD43を一段掘り下げると検出された。平面長楕円形を呈し、断面はまっすぐな立ち上がりを呈して筒状である。長軸1.45m、短軸85cm、深さ1.3mを測り、N-42°-Wに位置する。素掘りの井戸である。

1層下より唐津焼 (C50-2) と20×10cm大の礫が1点ずつ出土した。また底面よりわずか上方に須恵器大甕の破片1点と20～30cm大の礫3点が出土した。礫のひとつは立方体で刳り抜き加工を行っている。また底面より17×8cm大の礫がほぼ中央から出土した。

他の出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・青磁の小破片が小袋1袋分である。弥生土器のみは完全に混入品である。C50-2は前記した唐津焼である。小型の高台付き碗で、見込み部分と高台畳付けに砂目積み痕が残る。高台畳付け以外に施釉されている。

以上の出土遺物などから、当遺構は須恵器を伴う時期に使用され、17世紀に完全に埋まったと考えられる。

SE08（C30・C31図）

C-44・45Gr内、標高8.1mで検出した。SD43・44に切られ、約半分は調査区外へと延びている。掘り方は、SD44の南側からとSE07の東側からの落ち込み内で、現状で2×2mの方形を呈するが、調査区外壁面を中心とする位置に円形の落ち込みを検出している。径1.4m、深さ1.1mを測り、断面漏斗状を呈する。これが本来の井戸であると考えられる。水溜部と考えられる12層からは10数cm大の礫が数個壁際から出土しており、調査区外にはまだ存在するようである。

出土遺物は、弥生土器5、6点と土師器の小片1点、どちらか不明な破片1点である。水溜部からは弥生土器のみが出土している。C31-2は前記した弥生土器か土師器か不明のもので、SD43出土の土器と同一個体と考えられる。詳細はSD43で記述した。C31-3は弥生土器の甕口縁部である。複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下からのナデにより小さく出る。口縁面には、16～17条の擬凹線文を施してナデ、部分的に消えてるところがある。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期後葉に該当しよう。

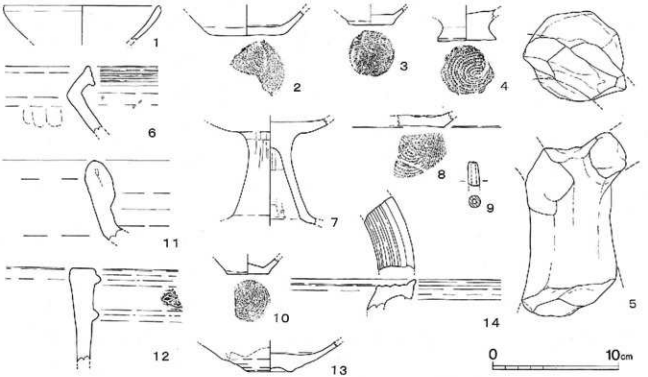
SK04・SK05・SK06・SK16・SK17・SK28・SD04・SD05・SD16・SD25・SD41・柱穴・遺構外出土遺物（C52～C56図）

C区内より検出された遺構で、特記するには及ばないが、また柱穴は建築物及び構築物とはならないが、時期決定及び今後の検討において必要と考えられる遺物を掲載した。詳細は観察表に委ねる。

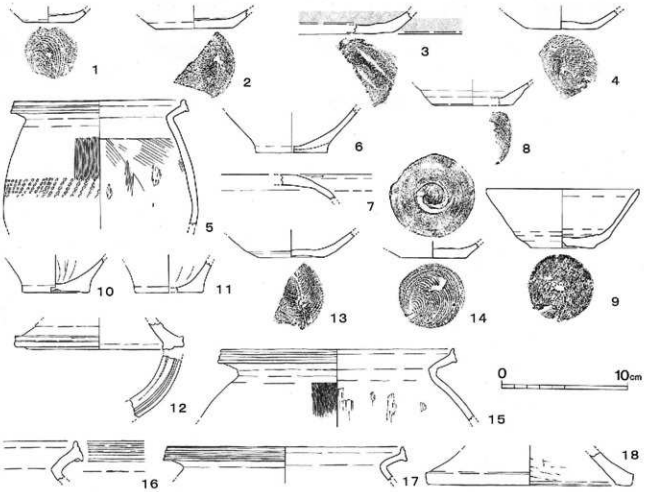
遺構外出土遺物も詳細は観察表に委ねる。

その他にも弥生時代～古墳時代初頭、奈良・平安時代～中世の柱穴が多数検出されたが、思うように組み立てることができなかった。C57図に委ねたい。

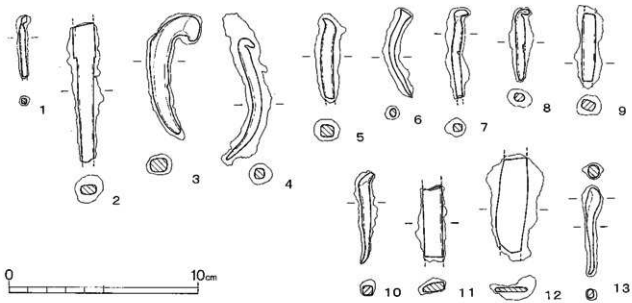
注1　藤田三郎「弥生時代の井戸と唐古・鍵遺跡の井戸」『みずほ 第30号』大和弥生文化の会　1999



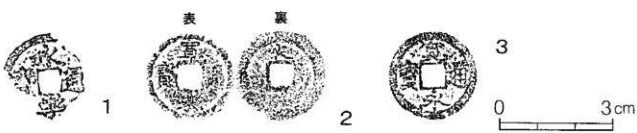
C52図　SK04(1・2)・SK05(3・4)・SK16(5)・SK17(6)・SD04(7・8)・SD05(9)・SD16(10)・SD25(11～13)・SD41(14)　出土遺物実測図(S=⅓)



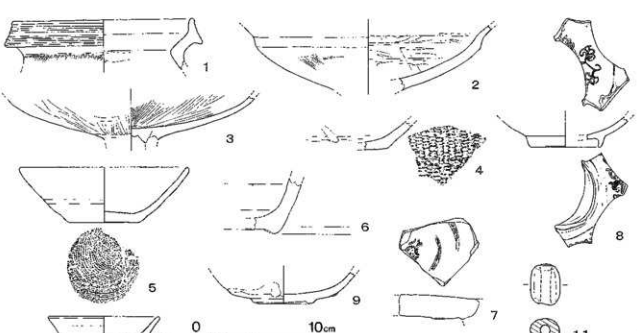
C53図　柱穴出土遺物実測図 (S=⅓)



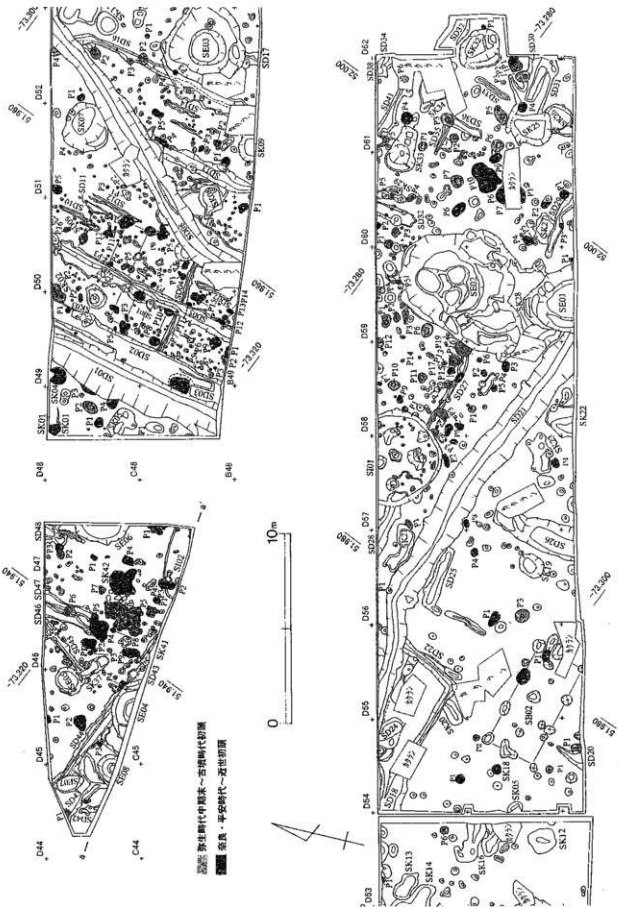
C54図　SD26(1)・SE02(2～9)・SK06(10)・SK28(11)・C45Gr-P1(12)・B61Gr-P4(13)出土鉄器実測図（S=½）



C55図　SK42-P2(1)・遺構外(2・3)出土古銭拓影（S=1/1）



C56図　遺構外出土遺物実測図（S=⅓）



C57図　C区柱穴時期別平面図

D区の調査結果

1. D区の概要

D区は、幅5mの道を挟んでC区の東に位置し、東へ延長距離100m、幅10mの区間である。C区から連続した5mピッチの杭を打ち、西から東へ64～83、南から北へA～Cとグリットを設定した。B65杭の北東区画をB65Grと称する。

現地表面から10～20cmの厚さで現耕作土があり、その下には近世の水田耕作跡、及び遺物包含層があり、その下より層位を別にはできなかったが、奈良時代～中世、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を中心に生活面を検出した。ピットが集中している場所が何カ所かあるが、建物になるのか柵列等になるのか判断できなかった。当区では中世の16基の井戸が何カ所かに集中して検出されている。またA区で検出しているような大溝を当区内でも2条検出した。特筆すべきは、弥生時代の墓域と考えられる地区を検出していることである。

2. 遺構と遺物

D区からは上記したように、中世～弥生時代の遺構が重複している。以下、各遺構の詳細と出土遺物について述べる。D区内出土の鉄製品に関しては、調査後の不手際で行方不明となってしまった。

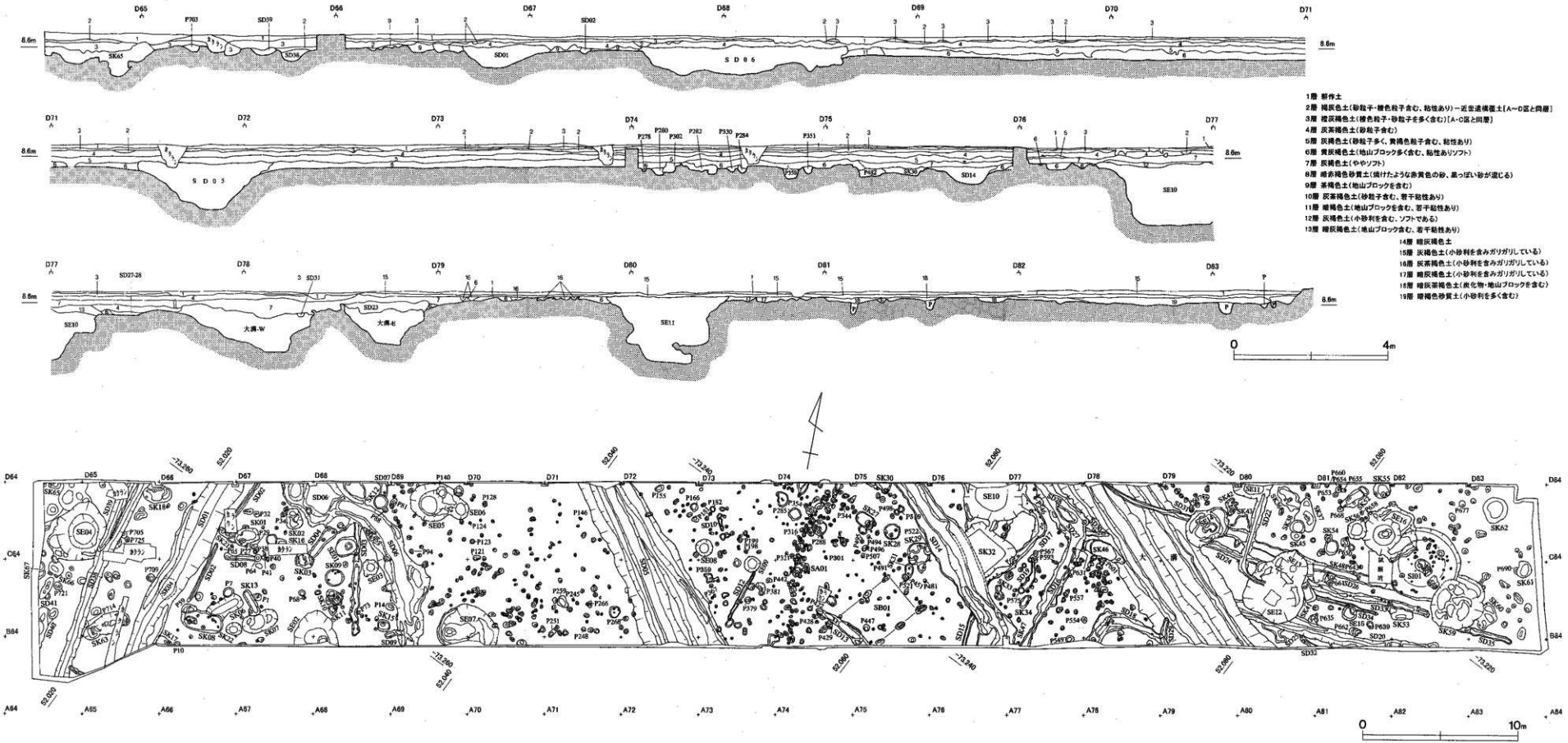
S101 (D02・D03図)

B・C-82Gr内、標高8.6mで検出した。上部を試掘坑に、西側をSE16に、東側をSK59に切られているため、全容を知ることはできなかったが、ほぼ円形を呈する竪穴住居跡で、直径4.8m、深さ30cmを測る。器壁は若干傾斜をもって立ち上がる。

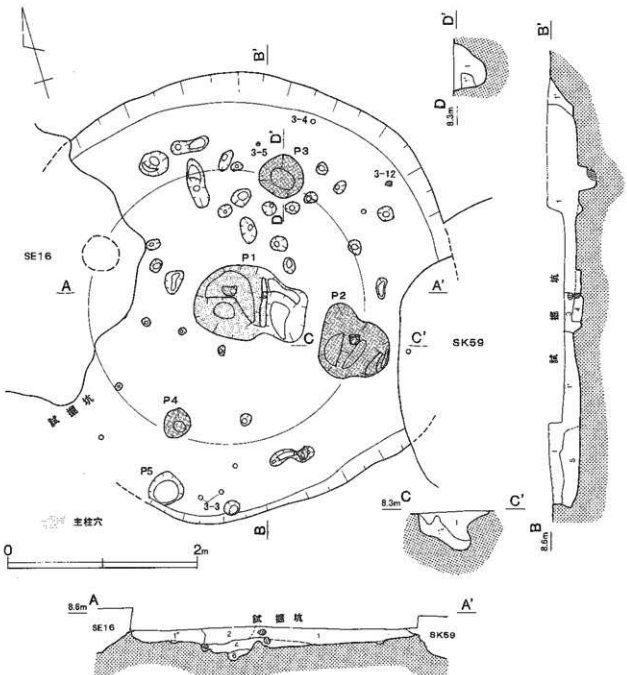
主柱穴は、P1を中心にP2～P4がほぼ等間隔に衛星上に配置され、SE16内にもうひとつの主柱穴が想定される。

P5及び床面の一部に焼けたような小礫、地山砂を検出したが、焼成を受けたという確固たる理由づけができないため、性格不明としておく。

出土遺物は、弥生土器及び混入品と考えられる須恵器・土師器の小片が若干数である。弥生土器もほとんどが小破片で、出土状況も散発的である。D03-1～12は弥生土器で、1～3は甕の口縁部である。1は口縁部が上に拡張して面をもち、3条の凹線文を施す。口縁部は厚みをもち断面三角形を呈する。2・3は小さいが複合口縁を有するもので、2は内外面にミガキ調整を行い、それとともに口縁面に2条の凹線状を作り出している。3は口縁面に3条の凹線文を施し、肩は張らずに胴部へと移行する。4は壺及び甕の胴部最大径位の破片で、その前後に2段の下端が細くなる刺突文を施す。5～7は平底の底部で、5は薄手の小さなもの、6はやや厚手だが、底部から体部への稜線があまく若干丸みをおびたもの、7は小さくて稜線のあまいものである。8～12は高坏の8・9は坏部、10～12は脚部である。8は風化が著しいが、やや厚みがあり立ち上がりは若干深そうである。坏部内外面に朱塗りの痕跡が観察される。9は体部中央で若干あまい「L」字状に屈曲するもので、口縁面には2条の、屈曲部下には1条の浅い凹線文を施す。10・11の脚裾部は肥厚して面をもち、11は幅広の凹線を1条、脚柱部には10は現状で10条の、11は現状で4条の凹線文を施す。12は外面に朱塗りを施した小型のもので、脚裾部は複合口縁状を呈して面をもち、3条の凹線文を施す。



D01図　D区遺構配置図（S=1/200）及び土層断面図（S=1/60）

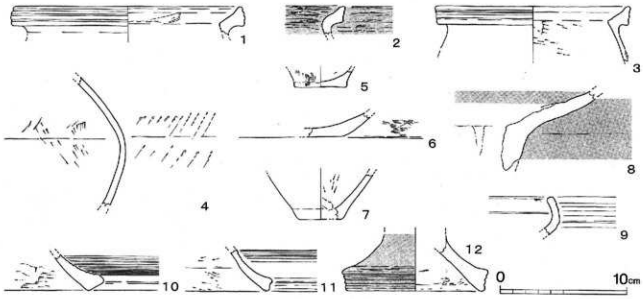


D02図 S101実測図 (S=1/40)

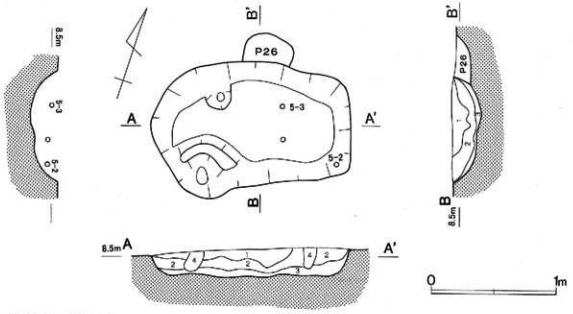
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期末～後期前半に該当しよう。

SK01 (D04・D05図)

C-66・67Gr内、標高8.5m強で検出した。平面楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸1m、深さ20cmを測り、N-32°-Eに位置する。底面はほぼフラットな状況を呈するが、南東隅に検出されたピット状の落ち込



D03図　S101出土遺物実測図（S=⅓）

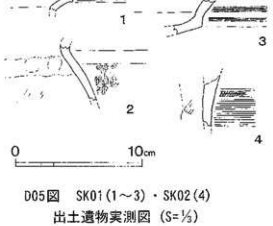


D04図　SK01実測図（S=1/20）

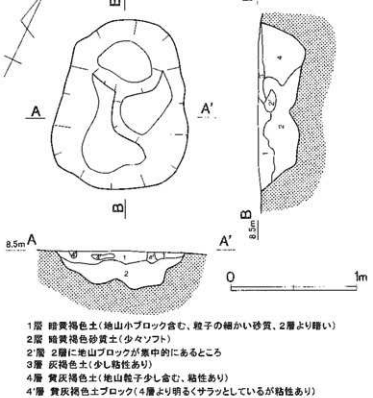
み1基は底面から10cm程度の深さを測るが性格は不明である。

出土遺物は、弥生土器の小破片小袋1袋分で、出土状況は散発的である。詳細は後述するが、SD06から西側に位置するこのような弥生時代の土坑は、SD06によって区画された内側にある土壙墓と捉えている。

D05-1～3は弥生土器である。1・2は甕である。1は口縁部で、口縁部が上下に拡張して面をもち、2条の凹線文と1条の沈線文を施す。2は頸部から肩部にかけての破片である。3は器台または高坏の破片である。体部は膨らませ丸みをもって立ち上がり、突出部で段をつけ口縁部は外反して立ち上がる。



D05図　SK01(1～3)・SK02(4)
出土遺物実測図 (S=⅓)



D06図　SK02実測図 (S=1/30)

口縁面には現状で4条と3条の擬凹線文を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期末～後期中葉に該当しよう。

SK02 (D05・D06図)

C67Gr内、標高8.5mで検出した。平面下膨れの楕円形を呈し、長軸1.35m、短軸1m、深さ30～35cmを測り、N-35°-Wに位置する。底面は若干の高低差をもったフラットな面が2面と北側はピット状を呈している。

2m南に位置するSK01と同様に土壙墓と捉える。またSK01とはほぼ同規格であるが、長軸が45度違い直角に配置されている。

出土遺物は、弥生土器の小破片10数点である。D05-4は高坏の脚柱部で、現状で10条の凹線文を施し、上位には間に凹線1条を利用して刻目を施す。他の小破片は全て甕の胴部破片である。内面のケズリ調整がナデ消されているものもある。

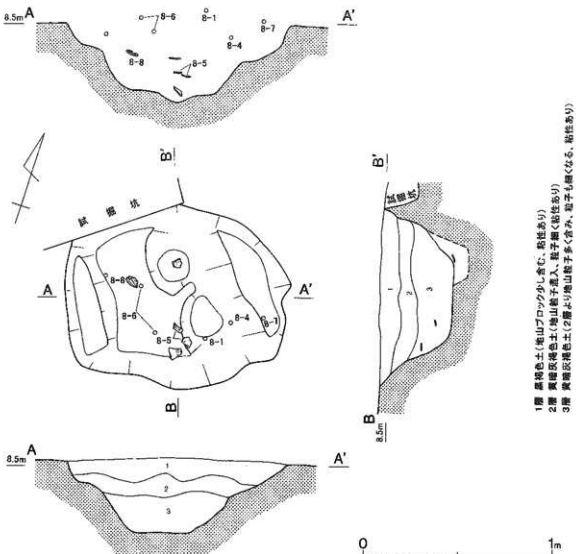
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉～後期初頭に該当しよう。

SK03 (D07・D08図)

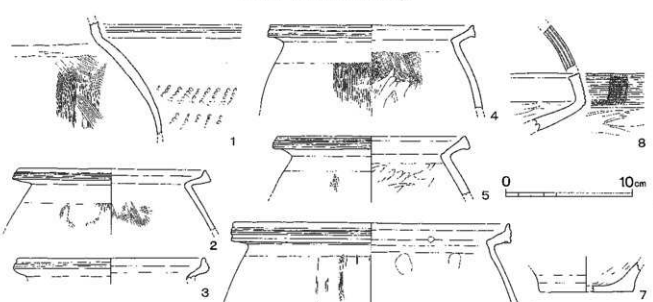
B・C-67Gr内、標高8.5m強で検出した。北東角の一部を試掘坑によって壊されているが、平面楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸1m、深さ40～45cmを測り、E-20°-Nに位置する。東西両サイドにステップ面を有し、底面は若干のピット状の凹凸がある。

当遺構は位置と規模などよりSK01・02と同様な土壙墓と捉える。

出土遺物は、弥生土器が中袋1袋分である。D08-1は直口壺である。若干内傾した口縁部から胴部は膨らみをもって移行する。口縁部には現状で2条の凹線文を施し、胴部最大径位には2段の列点文が施される。D08-2～6は甕である。口縁部が2・3は上に、4～6は上下に拡張して面をもち、2・3は2条の浅い凹線文を、4・6は2条の凹線文と1条の沈線文を、5は3条の浅い凹線文を施す。3の口縁部下位は下膨れとなり、2・4～6の頸部は「く」の字状に屈曲する。D08-7は薄手だがしっかりした平底の底部



D07図　SK03実測図 (S=1/20)



D08図　SK03出土遺物実測図 (S=1/3)

である。D08-8は高坏の坏部である。体部が「く」の字状に屈曲して口縁部へと立ち上がり、口縁端部は面をもち、3条の凹線文を施す。口縁面には8条の凹線文を施したのち、8本1組のヘラ描き文と角には刻目を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。

SK04（D09・D10図）

B66Gr内、標高8.3m強で検出した。SD01が上から壊しており、全容を知ることはできないが、平面楕円形を呈し、現状で長径1.45m、短径1.15m、深さ20cmを測り、N-3°-Wのほぼ南北に位置する。底面から器壁へは湾曲した立ち上がりをみせる。

当遺構は位置と規模などよりSK01～03と同様な土壙墓と捉える。

出土遺物は、弥生土器の小破片が小袋1袋分で、上位から散発的な出土である。D10-1は甕である。口縁部が上下に拡張して面をもち、3条の凹線文を施す。D10-2は頸部から体部へは段をつけ屈曲させた鉢である。口縁部は断面四角形を呈し、上面及び外面に面をもつ。上面はナデにより凹ませ、外面は3条の凹線文を施す。

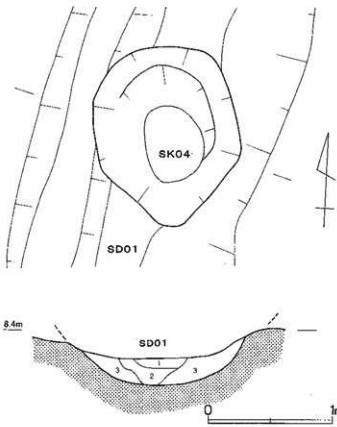
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉～後期前葉に該当しよう。

SK06（D11・D12図）

B-66・67Gr内、標高8.5m強で検出した。南端をSK08に、西側でP7・P8・P55に切られている。またP7下にはSK06よりも古いピットが存在する。平面隅丸長方形を呈し、現存長辺2.2m、短辺1.1m、深さ35cmを測り、N-44°-Eに位置する。底面は若干の高低差をもったフラットな面を呈する。

当遺構は、周囲に連続して同様な土坑SK07・08・13が構築されており、前記したSK01～04とは平面形態や規模も若干違うが、位置及び土器の出土状況が似ているため、土壙墓と捉える。

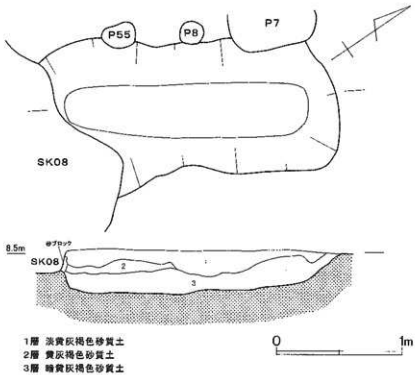
出土遺物は、弥生土器の小破片が1袋



1層 暗灰褐色土（2層より明るく、砂粒子多めに含む、粘性あり）
2層 暗灰褐色土（地山が砂のために砂粒子多く含み砂質っぽいが若干粘性残す）
3層 暗黄灰褐色土（1・2層に地山が混入したような層、砂質っぽい）

D09図　SK04実測図（S=1/30）

D10図　SK04出土遺物実測図（S=1/3）



D11図　SK06実測図（S=1/30）

分である。ほとんどが甕の胴部破片であるが、ほとんど接合しなかった。散発的な出土状況を呈する。D12-1・2は甕である。1は頸部が水平ぎみに立ち上がり口縁部が上に強く上下に拡張して面をもち、2条の浅い凹線文を施す。2は口縁部が上下に拡張して面をもち、3条の凹線文を施す。頸部はわずかではあるが直立する面をもつ。D12-3は小さいがしっかりした平底の底部である。D12-4は高坏の脚柱部の接合部付近の破片で、外面には上から現状で2条、5条、現状で4条の凹線文を施す。

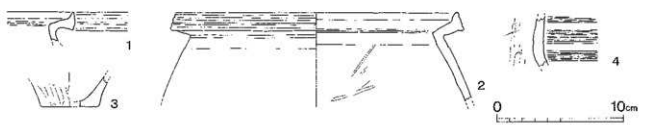
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。

SK07（D13・D14図）

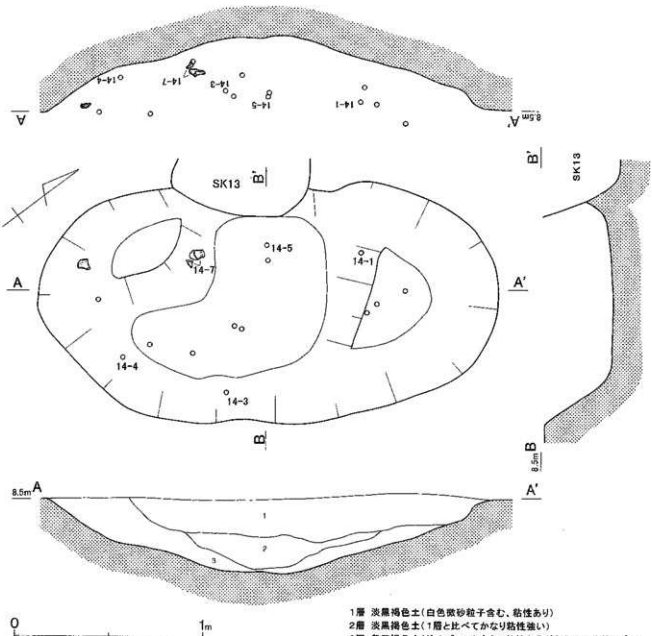
B67Gr内、標高8.5mで検出した。北西の一部をSK13に切られているが、平面長楕円形を呈し、長軸2.4m、短軸1.25m、深さ40cmを測り、N-37°-Eに位置する。底面は中央が窪みフラットな面をもち、緩やかな立ち上がりをみせる。また後記するが、当遺構からはミニチュアの土器及び小型高坏が出土しており、祭祀的な様相を呈するため、前記したように土壙墓と捉える。

出土遺物は、弥生土器の小破片が1袋分である。ほとんどが甕の胴部破片であるが、ほとんど接合しなかった。全体的には散発的な出土状況であるが、D14-7は2層底から出土し、3層では半分北東側からは出土せず、半分南西側から出土する。

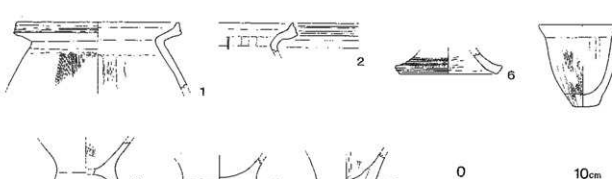
D14-1・2は口縁部が上に拡張して面をもち、2条の凹線文を施す甕である。1は頸部が「く」の字状に屈曲して肩部へと移行し、2は口縁部外面が下膨れとなり頸部は緩やかに屈曲する。D14-3～5は底部であ



D12図　SK06出土遺物実測図（S=1/3）



D13図 SK07実測図 (S=1/20)



D14図 SK07出土遺物実測図 (S=1/3)

る。3は底径の小さな上げ底で、接地面は高台のようにしっかりしている。4・5は平底であるが、4は底部からしっかりとしたくびれをもって立ち上がっていき、5は底径の小さなものである。D14-6は小型高坏の脚裾部である。脚部には5条の凹線文を施し、その上から刻目を1段入れる。裾端部は若干肥厚して面をもち、2条の凹線文を施し、角には刻目を入れる。D14-7はミニチュア土器である。小さな平底をもち、緩やに広がって立ち上がり、口縁部は外反し、コップ状を呈する。

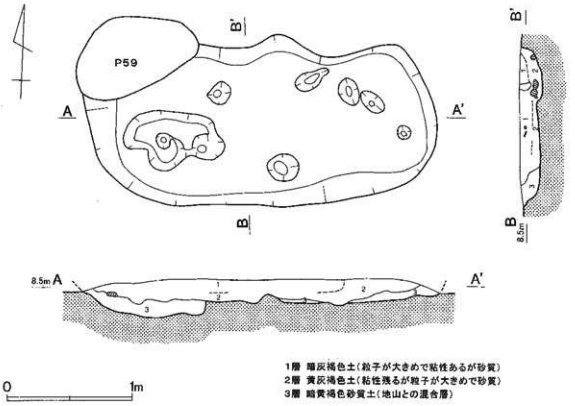
以上の出土遺物などから、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。

SK08（D15～D17図）

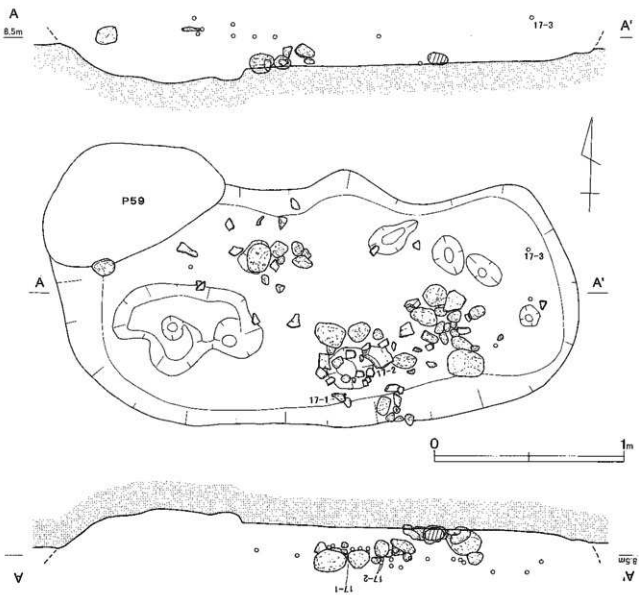
B66Gr内、標高8.55mで検出した。P59に一部を壊され、上面を削平してしまい立ち上がりの不明瞭な部分が存在するが、平面隅丸長方形を呈し、長軸2.7m、短軸1.3m、深さ15～30cmを測り、E-8°-Nのほぼ東西に位置する。底面は若干の凹凸はあるが、全体的には1枚のフラットな面を呈している。前記したように当遺構も土壙墓と捉える。

10～20cm大の礫が3ヶ所で集中している。1ヶ所は底面から10cm程浮いているが、他の2ヶ所は底面直である。またその周辺に土器片も集中して出土する。

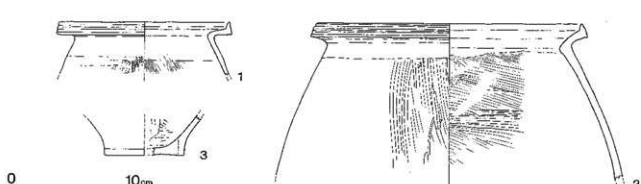
出土遺物は、弥生土器の小破片が1袋分である。ほとんどが甕の胴部破片であるが、ほとんど接合しなかった。D17-1・2は甕の口縁部から胴部にかけてである。1は頸部が水平に立ち上がり口縁部が上に拡張して面をもち、浅い2条の凹線文を施す。2は上に強く上下に拡張して面をもち、3条の凹線文を施す。頸部は「L」字状に屈曲しながら体部へと移行する。D17-3はやや薄手の平底の底部である。



D15図　SK08実測図（S=1/30）



D16図　SK08遺物出土状況図（S=1/20）

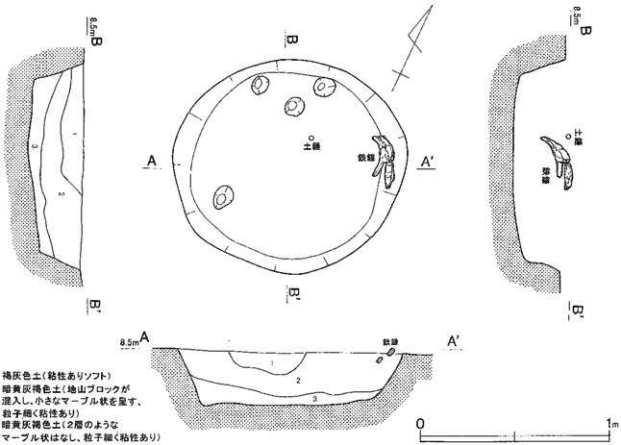


D17図　SK08出土遺物実測図（S=1/3）

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。

SK09（D18図）

B68Gr内、標高8.5mで検出した。平面形態は、ほぼ正円形で、直径1.2m、深さ30cmを測る。底面は



D18図　SK09実測図 (S=1/20)

小さく浅いピット状の凹凸はあるがほぼフラットな面を呈し、壁は直立ぎみに立ち上がる。

プラン検出時より上面にて、2枚重なった状態の鉄鎌と3～4cm長で紡錘状管形の土錘が出土した。しかし、実物を保管期間中に失ってしまい、実測図は掲載不能としてしまった。

その他の出土遺物は、上面より弥生土器・須恵器が、2層より弥生土器・須恵器・土師器が、3層より弥生土器のそれぞれ小破片が数点ずつである。実測可能な遺物は皆無である。

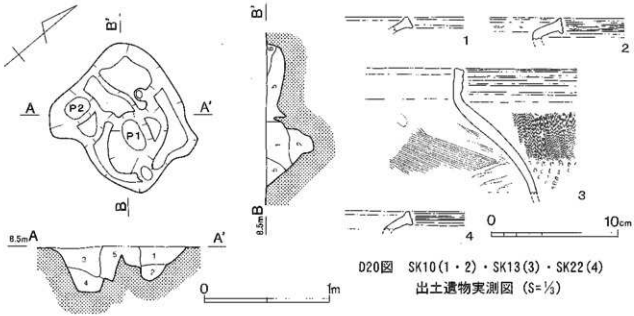
出土状況より、どの遺物が混入品なのか明らかにできなかった。遺構の性格も不明である。

SK10 (D19・D20図)

B68Gr内、標高8.5mで検出した。平面不整方形を呈し、長辺1m、短辺90cmを測り、各辺はおおよそ東西南北に位置する。遺構内は凸凹状で、P1・P2を中心とする柱穴跡と捉えられ、5層は裏込め状を呈する。P1・P2の深さは35～40cmである。

出土遺物は、弥生土器・土師器の小破片であるが、後者は混入品である。D20-1・2はそれぞれP1・P2から出土した弥生土器甕の口縁部である。口縁部が上下に拡張して面をもつが、1は下に強く拡張してある。1の口縁面は小口状の工具でナデて、その両端は沈線状となる。2の口縁面には3条の凹線文を施す。

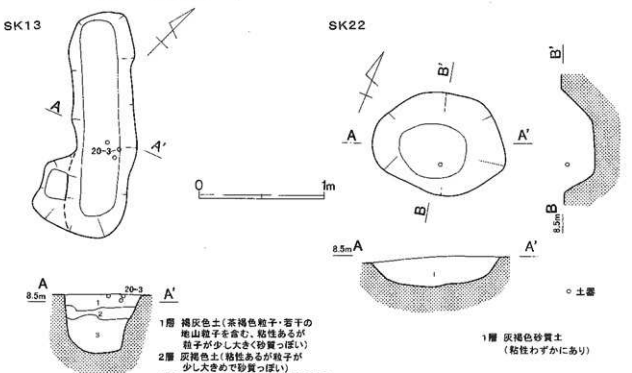
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。



D20図　SK10(1・2)・SK13(3)・SK22(4)
出土遺物実測図 (S=⅓)

1層 灰褐色土(粘性あり、少しソフト)
2層 暗灰褐色土(粒子細くサラッとしているが、粘性ありソフト)
3層 暗灰褐色土(地山小ブロック含む、粒子細くベトッとした感じ、粘性あり)
4層 暗灰褐色土(2層より暗い、粒子細く粘質っぽい)
5層 黄灰褐色マーブル土(地山小ブロック混入してマーブル状、粘性あるが砂質っぽい)
6層 灰褐色土(1層より暗い、粘性あり)

D19図　SK10実測図 (S=1/30)



1層 褐灰色土(茶褐色粒子・若干の地山粒子を含む、粘性あるが粒子が少し大きく砂質っぽい)
2層 灰褐色土(粘性あるが粒子が少し大きめで砂質っぽい)
3層 黄灰褐色土(若干粘性残るが砂質)

D21図　SK13・SK22実測図 (S=1/30)

SK13 (D20・D21図)

B67Gr内、標高8.55mで検出した。西南コーナーの一部をピットに壊されているが、平面形態は細長い隅丸長方形を呈し、長辺1.8m、短辺50cm、深さ50cmを測り、W-42°-Nに位置する。底面はほぼフラッ

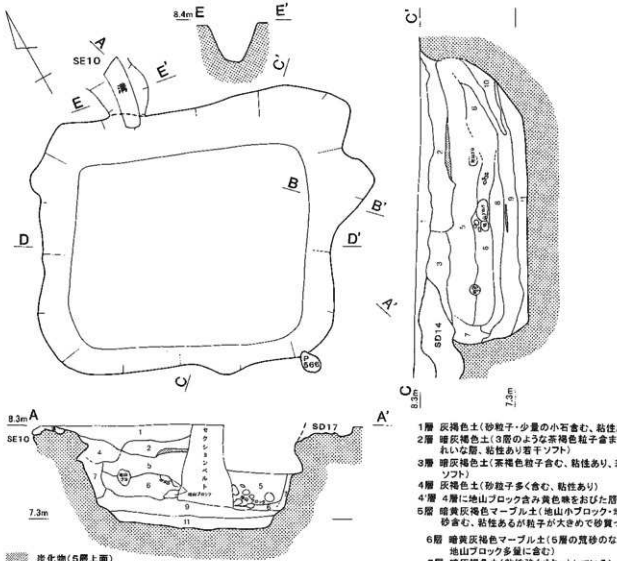
トな面を呈し、壁は直立ぎみに立ち上がる。当遺構は前記したように同様な土坑（SK06～08）の集中した箇所であり、前記したように土壙墓と捉える。

出土遺物は、弥生土器の小片が10数点のみである。D20-3は3条の凹線文を施した直立した口縁を有する直口壺である。口縁端部の平坦面はナデにより若干窪ませ、頸部から胴部へ膨らみをもって移行する。胴部最大径位付近には列点文を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。

SK22（D20・D21図）

B-66・67Gr内、標高8.5mで検出した。平面不整円形を呈し、直径105×80cm、深さ25cmを測る。底面はフラットで、緩やかな立ち上がりを呈する。SK06～08・13が集中している箇所に構築されており、



D22図　SK32実測図（S=1/40）

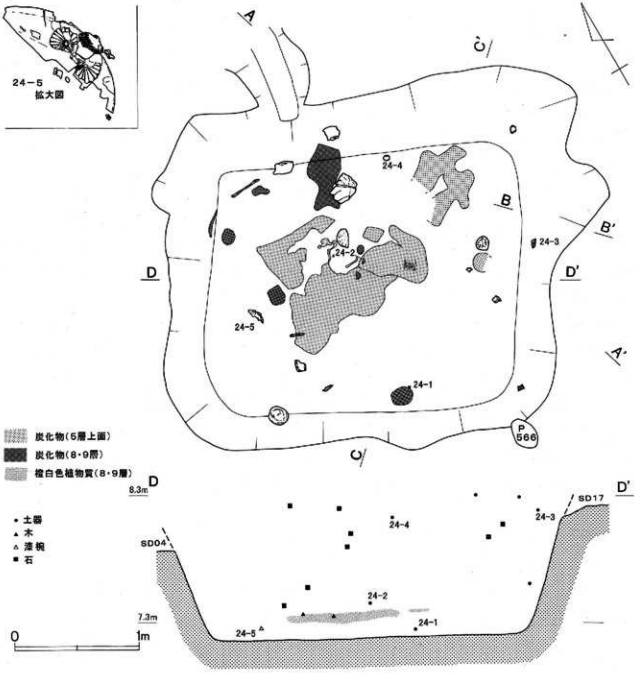
規模的にはSK01～04に近いが、これらより若干小さく深さも浅い。このため、同様に土壙墓と捉えたいが、土壙墓としての根拠には乏しい。

出土遺物は、弥生土器の小破片が7点である。D20-4は甕の口縁部で、口縁部が上下に拡張して面をもち、3条の凹線文を施す。

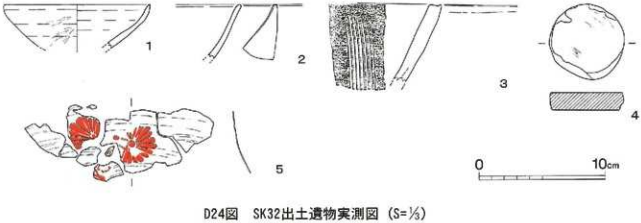
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。

SK32（D22～D24図）

B・C-76・77Gr内、標高8.3m強で検出した。東側をSD17に、南側をSD14に壊されているが、平面形態は平行四辺形状の長方形を呈し、長辺3m、短辺2.7m、深さ1.2mを測り、W-28°-Nに位置する。底面はほぼフラットで直立ぎみに壁が立ち上がる。北側に存在する溝は隣接するSE10とをつなぐ溝である。



D23図　SK32遺物出土状況図（S=1/30）



D24図　SK32出土遺物実測図（S=⅓）

深さ40cmを測り、しっかりした立ち上がりをみせる。

底面直上には黄褐色砂質土が堆積している。その直上で遺構の下位及び周囲に粘質土（7～9層）が堆積しているのは、当遺構がよどみ状の耐水状態にあったことを想定させる。また木製品、炭化米、炭化物及び植物質など有機質のものが残存している。漆椀（D24-5）は9層と11層の間から出土した。木質はほとんど風化して表面の木目と漆塗り部分のみの残存であった。また橙白色の植物質とは木皮及び板材様のものである。この段階では、木製品など有機質物の貯蔵庫的な性格をもった遺構であると考えられる。

その上に堆積している5・6層は地山ブロックを大量に含んだ人工的な土層である。同レベルの周囲に粘性の強い7層が存在するのは、本来は7層上面レベルまであった粘質土を、5・6層を埋め込むために6層底面まで圧縮、または掘り上げたものと考えられ、7層はその残痕であろう。5層上面には炭化物が纏まって出土しており、この段階でも深さ30～40cmの遺構として機能していたようである。また若干の炭化米も出土した。

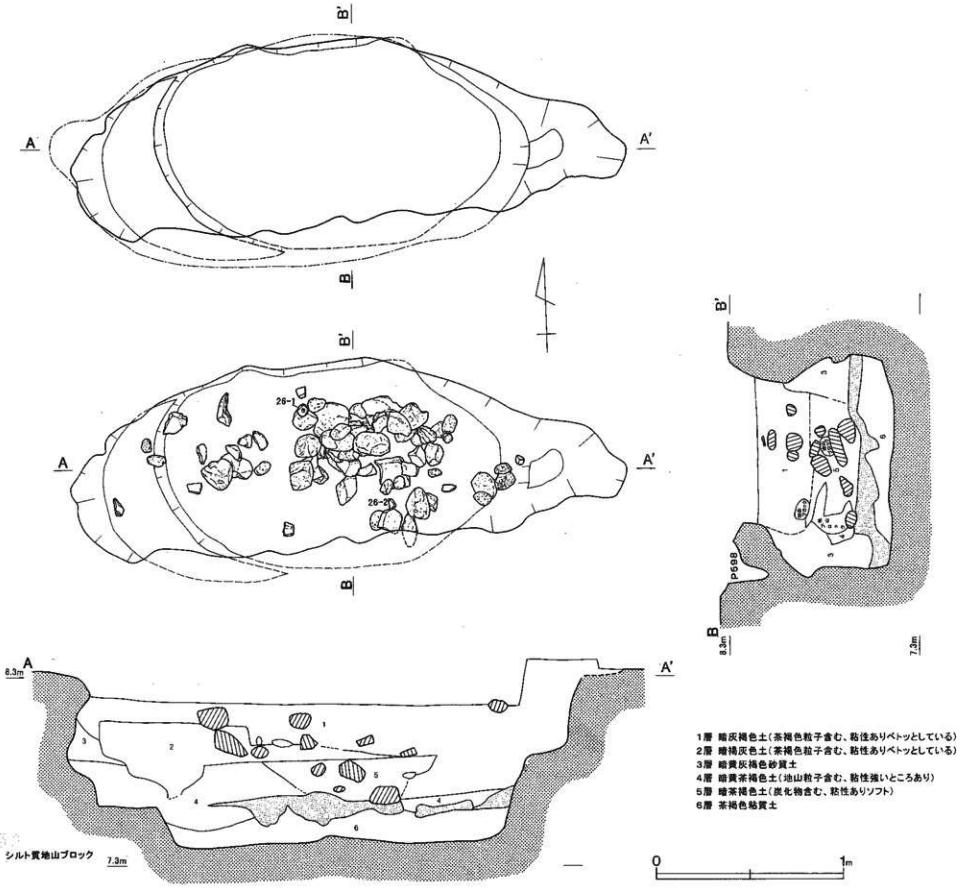
出土遺物は、前記したもの以外では、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器の小破片が1袋分である。前2者は混入品である。実測可能なもの5点のみ掲載する。D24-1は土師器の坏である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は若干尖りぎみにおさめる。淡色で粉っぽく薄作りである。D24-2は龍泉窯系の青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。D24-3は備前焼の擂鉢である。体部は直線的で、口縁端部の平坦面はナデにより窪ませる。D24-4は土師器の坏を体部を打ち欠いて厚手の底部のみとし、周囲及び元の内外面も滑らかにして、土製円盤としたものである。D24-5は漆椀である。体部最大径を14～15cmの大きさと想定する。赤漆の上に黒漆塗りが施され、朱色の花びらスタンプ文を2～3個押捺してある。

以上の出土遺物などより、当遺構は15～16世紀に該当すると考えられる。

SK46（D25・D26図）

C78Gr内、標高8.3m強で検出した。遺構が集中した地区であり、プラン検出時には大溝と共に検出され、大溝を掘り下げると全体に覆っていた層が取り除かれて、SK46のプランが大溝のプラン上にあることが判明した。10数cm掘り下げると礫が出土し始め、それから土層断面軸を設定したため、上部の土層断面はない。

平面形態は、両端の細長くなった長楕円形で、短軸断面袋状を呈する。長軸2.95m、短軸1m（最大



D25図 SK46実測図 (S-1/20)

袋状部分1.1m)、深さ90cmを測り、ほぼ東西に位置する。西端は2段掘りとなっており、それ以下の底面には粘質土が堆積し、その上には人工的にシルト質の地山を10cm強の厚さで埋めている。東側も一段高い位置にスッテプを有して2段掘り状となってはいるが、それは西南北の外膨らみとなる袋状部位置に相対する。

10～20cm大の礫が1層中より出土している。1層中出土礫は全体に広がっているが、それ以下から出土するものは、中央5層中に集積状況で出土している。5層は前記した人工的に埋めたと考えられるシルト質の地山の上に載っている。5層のみから炭化物が検出される。

当遺構の性格は明らかではないが、底面には粘質土である6層が約15cmの厚さで堆積しており、耐水状態を示している。そののちにシルト質の地山を埋めて底面を安定させ、同レベルで西側を広げる。5層は一辺約70cmの平面方形を呈しており、炭化物を含み、礫が集積する。元々集積していたというより、5層は木箱状のものでありそれを埋め、礫を上部全体的に置いていたものが、木箱が朽ち落ちた時に礫が内部に転落したということも想定できよう。また4層を5層同様に考えると長方形の木棺状のものが想定できよう。

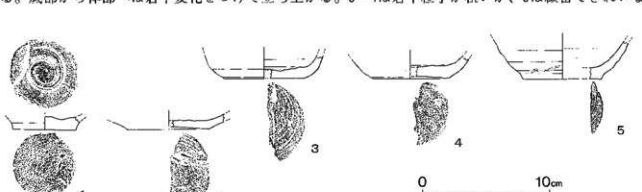
出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小破片が1袋分で、前2者は混入品である。最下層である6層から土師器のこね鉢の破片が出土している。実測可能なもの2点を掲載した。D26-1・2は土師器の軽々した焼成で底部回転糸切りを行う坏底部である。1の内面は強いナデにより中央の粘土が浮き上がっている。2は若干体部が残存しており、底部から変化なく移行している。

以上の出土遺物などより、当遺構は15～16世紀に該当すると考えられる。

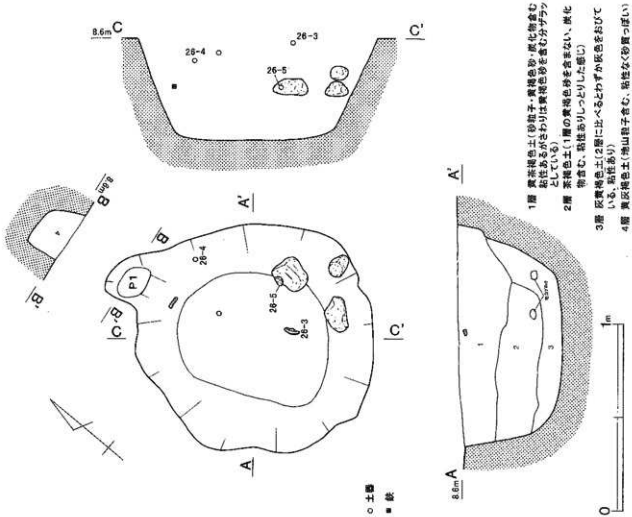
SK56 (D26・D27図)

C81Gr内、標高8.6mで検出した。プラン検出時は、SE16・SI01・SK59・SK60と共に大きな落ち込み状を呈していたが、若干掘り進めると各遺構に分かれていった。SK56は隣接するSE16を切って構築されている。平面楕円形を呈し、直径約1.2m、深さ55cmを測る。底面はフラットで、若干直立ぎみに壁が立ち上がる。北側にピット状のステップがある。2層中からは15cm大の軽石礫が数点出土している。性格は不明である。

出土遺物は、須恵器・土師器・瓦質土器の破片が1袋分、釘と考えられる鉄製品1点である。瓦質土器は3層からこね鉢の胴部破片が1点のみ出土した。D26-3～5は土師器の底部回転糸切りを行う坏である。底部から体部へは若干変化をつけて立ち上がる。3・4は若干粒子が粗いが、5は緻密できれいな



D26図　SK46(1・2)・SK56(3～5)出土遺物実測図 (S=⅓)



D27図　SK56実測図（S=1/20）

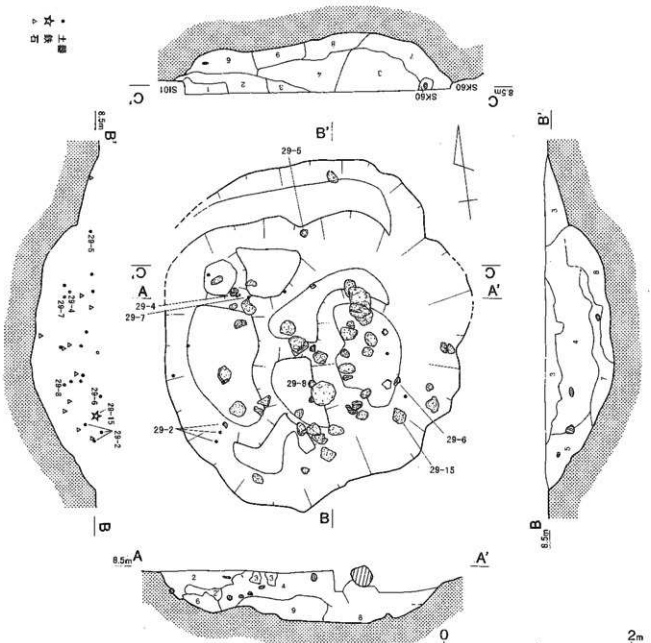
胎土である。

以上の出土遺物などより、当遺構は12～13世紀に該当すると考えられる。

SK59（D28・D29図）

B-82・83Gr内、標高8.6mで検出した。プラン検出時は、SK56・SE16・SI01・SK60と共に大きな落ち込み状を呈していたが、岩干掘り進めると各遺構に分かれていった。SK59は隣接するSI01を切って構築されている。また南側ではSD33が西から延びてSK59をかすって東へと延びるSD35となるが、B-B'土層断面からはSD35を確認することはできず、SK59が切って存在するようである。

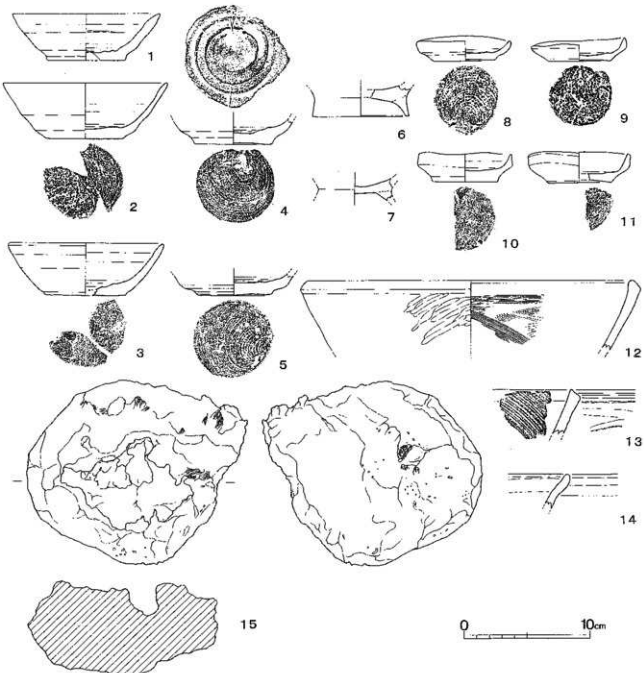
平面形態は楕円形で、直径3.7×3.2m、深さ80cmを測る。西側から床面がステップをもちながらだらだらと下がるという感じで、底面直径は1.2×0.7mである。全体的に10～30cm大の礫が多く出土し、他の遺物も共にバラバラの散発的な出土状況を呈する。3・4層は炭化物を含む。また上面からは大ぶりの鉄滓が1点出土しているが、当遺構は鍛冶に関する遺構ではなく[3]、付近に鍛冶遺構の存在する可能性を示唆する。直径に対して深さがやや浅く、遺物の出土状況もバラバラなので、当遺構は廃棄坑と考えられる。



1層 灰褐色土(砂粒子多く含む、褐色粒子含む、若干粘性あるが水分なくしまって固い)
2層 褐灰色土(砂粒子多く含む、粘性あるが水分なくしまって固い)
2'層 2層に地山砂混合したような層
3層 茶褐灰色土(砂粒子・軽石砕多く含む、褐色粒子含む、炭化物含む、粘性あり)
4層 暗褐灰色粘質土(3層と似た砂粒子・褐色粒子少し含む、炭化物含む)
5層 灰褐色土(砂粒子・軽石砕多く含む、若干粘性強すがポソっとしてしまり固い)
6層 褐灰色土(2層と似ているが、2層より砂粒子多く含みポソポソである、粘性あるが水分なくしまって固い)
7層 黄褐灰色土(砂粒子多く含む、地山粒子含む、砂質っぽい)
8層 暗灰褐色土(砂粒子含む、粘性あり)
9層 黄灰褐色砂質土(地山との混合的な層、地山の可能性あり)

D28図 SK59実測図 (S=1/40)

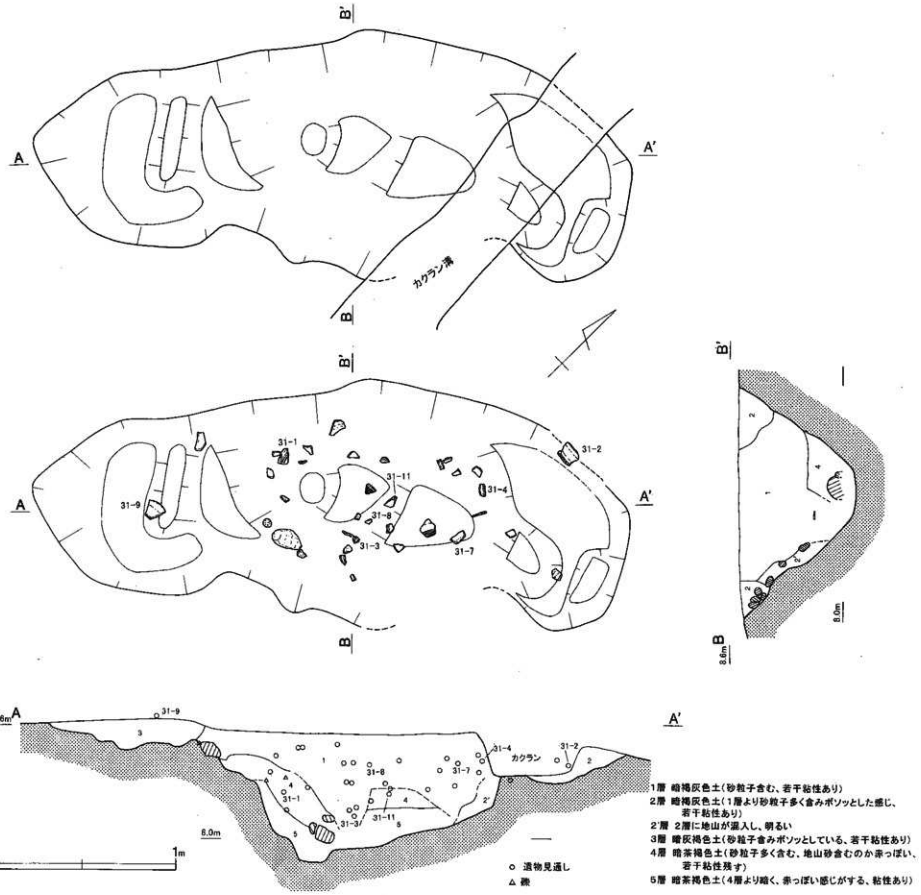
出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器がコンテナ半箱分と鉄滓1点で、前2者は混入品である。D29-1～13は土師器である。1～7は坏で、6・7は高台の付くものである。2・4・5は底部回転糸切りであるが、1・3は残存位置が悪く糸切りであることしか判らない。底部から体部へは全てナデによって変化をもたせて移行し、1はやや直線的に立ち上がり若干厚手の分口縁端部は先細りとなるが、他はやや内湾ぎみに立ち上がりそのままおさめる。4の内面には強い円心状のナデ調整を行う。6は長めで



D29図　SK59出土遺物実測図（S=⅓）

直立ぎみの高台、7は幅のある高台である。8～11は底部回転糸切りの小皿で、全体的に湾曲しやや粗雑なつくりである。底部から体部へはナデにより変化をつけて移行し内湾して立ち上がるが、9～11は内湾が強く体部中央で屈曲する。12・13は擂鉢と思われるものであるが、擂り目が浅くハケ目のようでもある。12は白っぽい胎土で、外面には粗いがミガキ状の調整が行われる。D29-14は土師質であるが、2㎜大の砂粒子を含んだ粗雑な胎土と作りで、口縁部は屈曲して外反し、端部は丸く納める。製塩土器の可能性あり。

D29-15は鉄滓である。穴澤義功氏のご厚意によりコメントを頂いた。以下、若干改変して掲載する。



D30図　SK63実測図 (S=1/20)

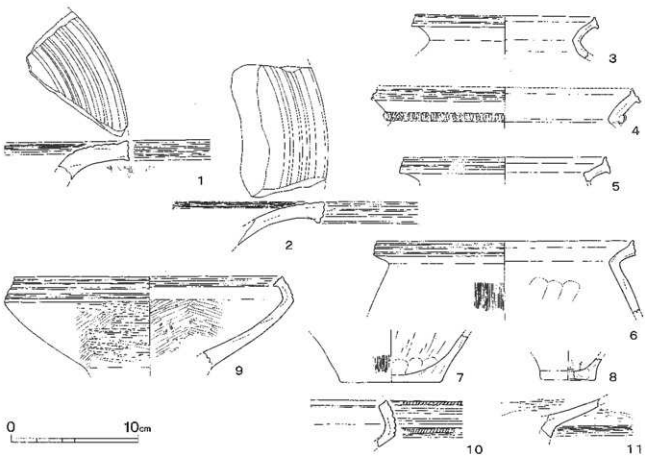
「やや大ぶりの椀形鍛冶滓で、上面の中央付近と側面から下面は残存する。上面肩部寄りは小さな破面が連続する。上面中央付近の滓は粘土質で羽口先の溶解物である。下面の1/3ほどは2次的な酸化土砂が付着する。滓の内部や上面肩部には1.5cm前後の大きさをもつ木炭痕が密集する。下面の微細な凹凸は粉炭痕である。大きさの割には比重が低い。これは滓中に木炭痕や気孔が多く、がさがさしているためであろう。」

以上の出土遺物などにより、当遺構は13世紀頃に該当すると考えられる。

SK63（D30・D31図）

B65Gr内、標高8.6mで検出した。東側を南北方向の撹乱溝に切られているが、平面長楕円形を呈し、長軸3.15m、短軸1.3m、深さ75cmを測り、E-43°-Nに位置する。前記したSK07・08と平面形態は似ているが、当遺構は両端にステップをもち、中央が落ち込む2段掘りを呈する。2段掘りの長軸は1.45mである。2段掘り内は1層が上層から下層まで入り込んでいる。また2段掘り内に土器片がばらまかれたように散発的に出土する。位置及び土器の出土状況より、SK07・08らと同様に土壙墓と考えられる。

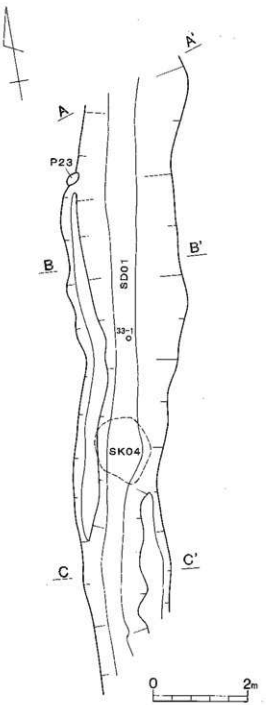
出土遺物は、弥生土器の破片がコンテナ半箱分である。D31-1・2は広口壺の口縁部である。頸部から湾曲し水平に立ち上がる。口縁端部は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す。口縁面には1は7条の、2は4条の凹線文を施す。D31-3～6は甕である。口縁部が3～5は上下に、6は上に拡張して面をもち、3は2条の、4は2または3条の、5・6は3条の凹線文を施す。3は頸部を伸ばすようにしているが、4～6は「く」の字状に屈曲する。4の頸部には指頭圧痕文帯が巡る。D31-7・8は径が大小違うが



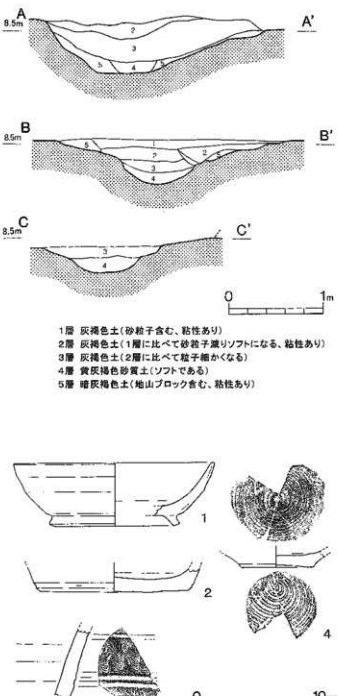
D31図　SK63出土遺物実測図（S=⅓）

それぞれ平底の底部である。D31-9～11は高坏の坏部である。9の体部は浅めで内湾して立ち上がり、上部で逆「く」の字状に屈折して内湾する。口縁端部は肥厚して面をもち、浅い2条の沈線と1条の凹線文を、外面には5条の凹線文を施す。10はゆるい逆「く」の字状に屈折する体部をもち、内傾して口縁部に至る。口縁端部の平坦面にはナデによる若干の窪みがある。口縁部外面には6条の凹線文を施したのち、上下角に刻目を施す。11は接合部が残存しており、接合用の円盤の剥落した痕跡が観察される。外面脚柱部根元から現状で4条の凹線文が施こされる。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。



D32図　SD01実測図（平面図S=1/60・土層断面図S=1/40）



D33図　SD01出土遺物実測図（S=1/3）

SD01（D32・D33図）

A65、B-65・66、C-66・67Gr内、標高8.6mで検出した溝状遺構である。南北両側は調査区外へと延び、南寄りではSK04の上半を壊している。検出長13.6m、幅2m、深さ50cmを測り、N-11°-Eに位置する。底面幅が50cmの断面逆台形を呈する。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小破片が2袋分である。3潤方弥生土器を含んでいるがそれは周辺に弥生土壙墓群が存在するための混入品と考えられる。D33-1～3は須恵器である。1は高台付きの碗で、体部は湾曲して立ち上がり、若干長めの高台は「ハ」の字状に開き内角のみ接地する。2は鉢等の底部である。底部から体部へは明確な稜をなし、若干開いて立ち上がるようである。3は壺の頸部破片である。上に1条の、下に2条の凹線文を施し、その間に波状文を施す。D33-4は須恵器のような硬質な焼成の底部回転糸切りを行う土師器の坏である。底部は若干上げ底ぎみで、体部へはナデにより変化をつけて外開きに立ち上がるようである。内面には回転痕が明瞭に残る。

以上の出土遺物などより、当遺構は8～9世紀に該当しよう。

SD05（D34～D41図）

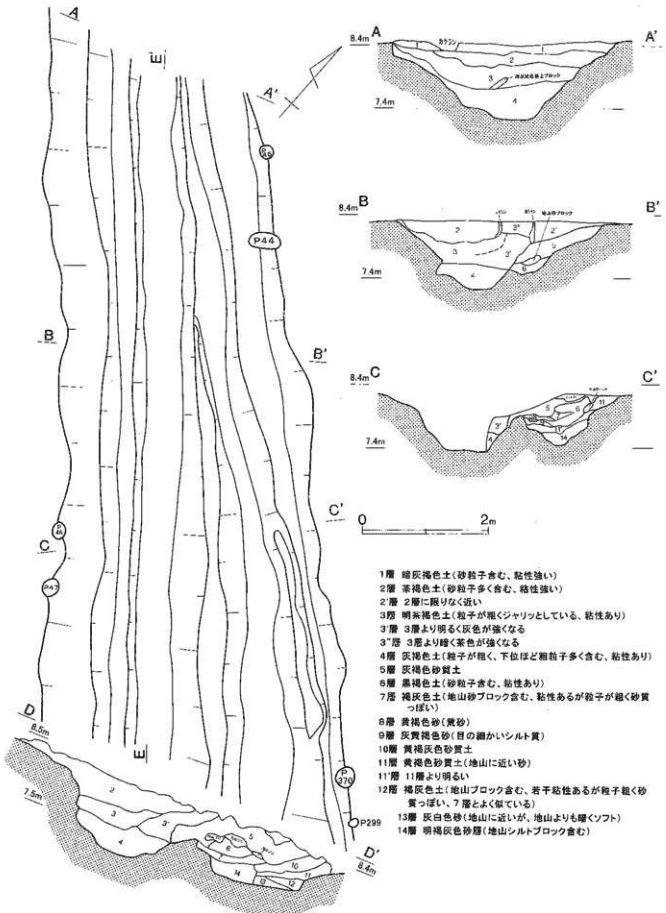
A・B-72・73、C-71・72Gr内、標高8.4mで検出した。検出長13.2m、幅3.3～4.7mを測る。掘り直した様相が土層断面より観察され、以後古い方をSD05-古、新しい方をSD05-新と記する。SD05-新は土層断面の1～4層に対応し、断面若干下端の広い「V」字状を呈し、検出幅3.2m、底面幅55cm、深さ1.2m（底面標高7.2m）を測り、N-40°-Wに軸をもつ。SD05-古は5～14層に対応し、断面「V」字状から逆台形を呈し、検出幅2.5m、底面幅25～85cm、深さ95cm（底面標高7.45m）を測り、N-54°-Wに軸をもつ。SD05-新は北側ではSD05-古と重複するが中途から14度北寄りに掘り直したため、SD05全体としては南側が幅広の平面形となる。

SD05-新の堆積土は、最上位に堆積している1層は黒々とした粘性の強い層で、遺構が重複していても確認が難しい。2層は粘性は同様に強くベタベタした土ではあるが色調は明るくなる。3層は粒子が粗くてジャリジャリした層で、4層も下位にいくほど粗い粒子を多く含むようになる。

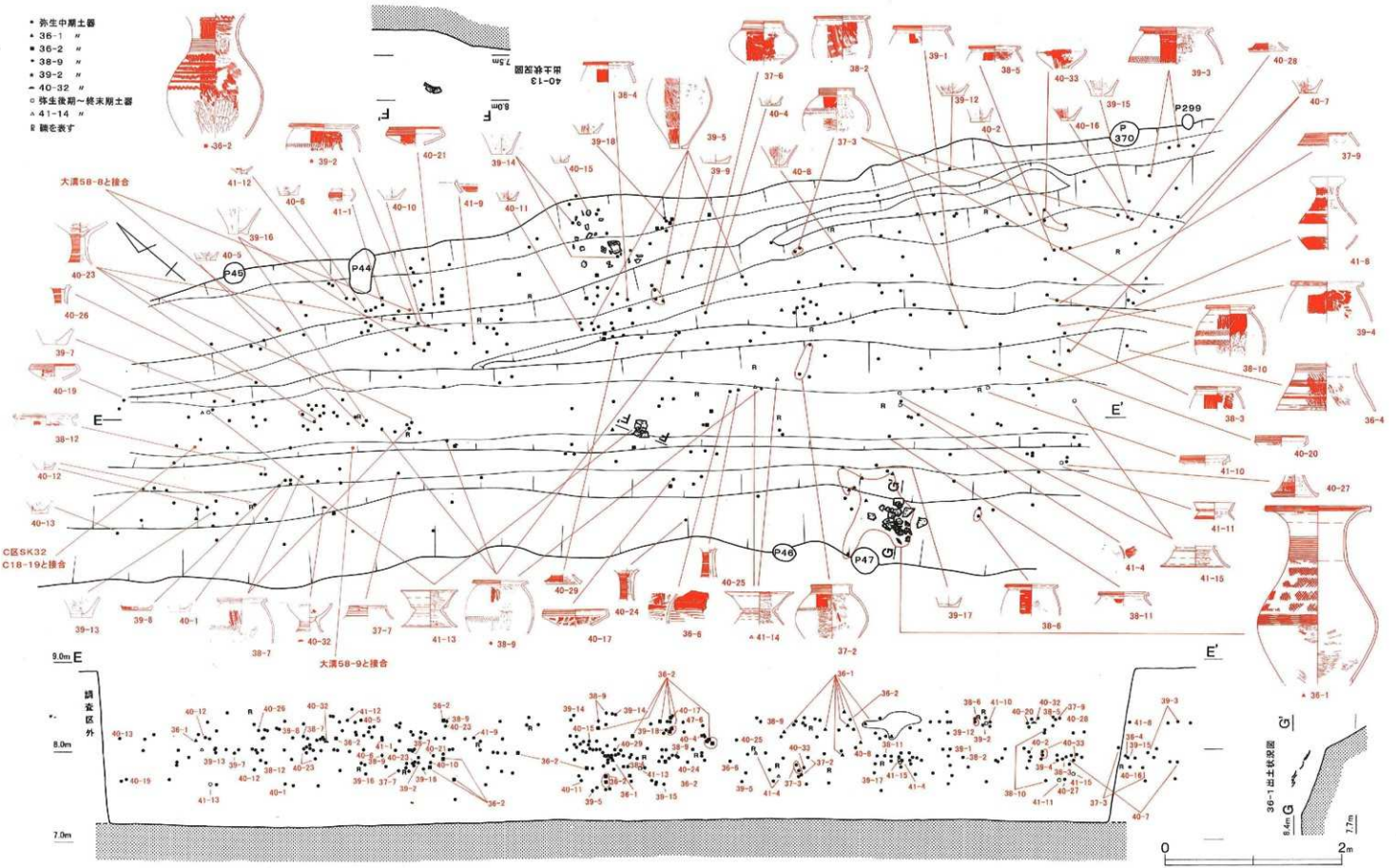
SD05-古の堆積土は、砂質土が主体で、地山ブロックのかなり大きな塊が人工的に埋められたようである。6層のみが黒色系の粘性をもつ層である。

出土遺物は、弥生土器破片がコンテナ5箱分、土師器・須恵器が10数点で、後2者は2層以上からの出土で混入品である。

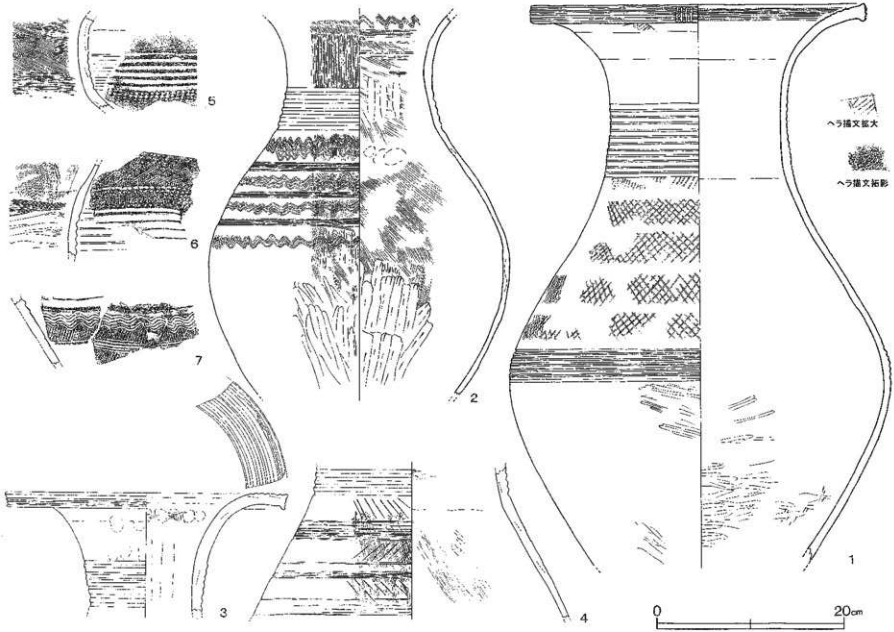
弥生土器は中期後葉のものがほとんどで、D35図にドット化した428点の弥生土器片のうち約2%の10点のみ弥生終末期土器が出土している。この他に甕形器台の小片2点が出土しており、D41-13～15と同一個体となる可能性のあるものである。D41-10・12はそれぞれ2層・1層からの出土で、混入品と捉えることができる。しかし他の終末期土器は3層及び4層上位からの出土で、またD41-14のように5m離れて接合するものもあり、単なる混入品とは捉えがたい資料である。これら終末期土器資料はSD05-古からは出土しておらず、1点ではあるが弥生中期中葉と考えられるD38-1がSD05-古から出土していることを考慮すると、前記しているようにSD05-古は確かに古い方の遺構である。しかしSD05-新は、弥生中期後葉のみ機能していたとは捉えがたく、2案が提起できる。第1は、弥生中期後葉から終末期まで連続して機能していた、という案。これはD41-10・12を混入品として捉えることなく活かすことが



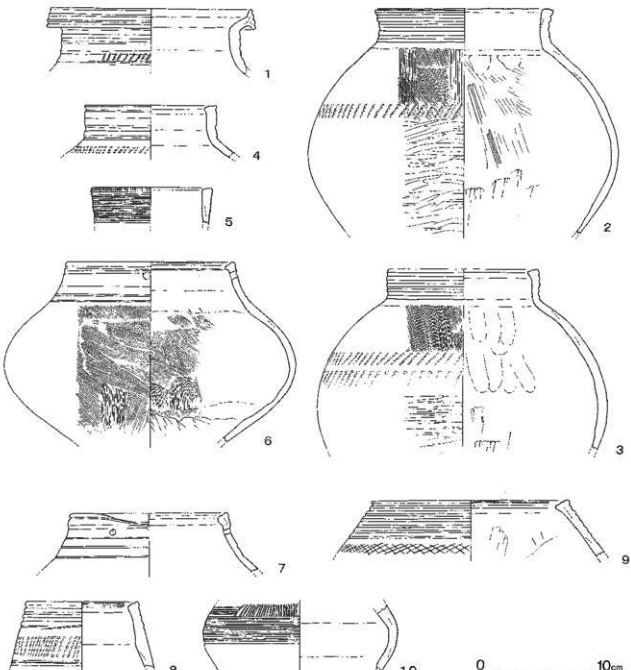
D34図 SD05実測図 (S=1/60)



D35図　SD05遺物出土状況図（S=1/40）



D36図　SD05出土遺物実測図1（S=¼）

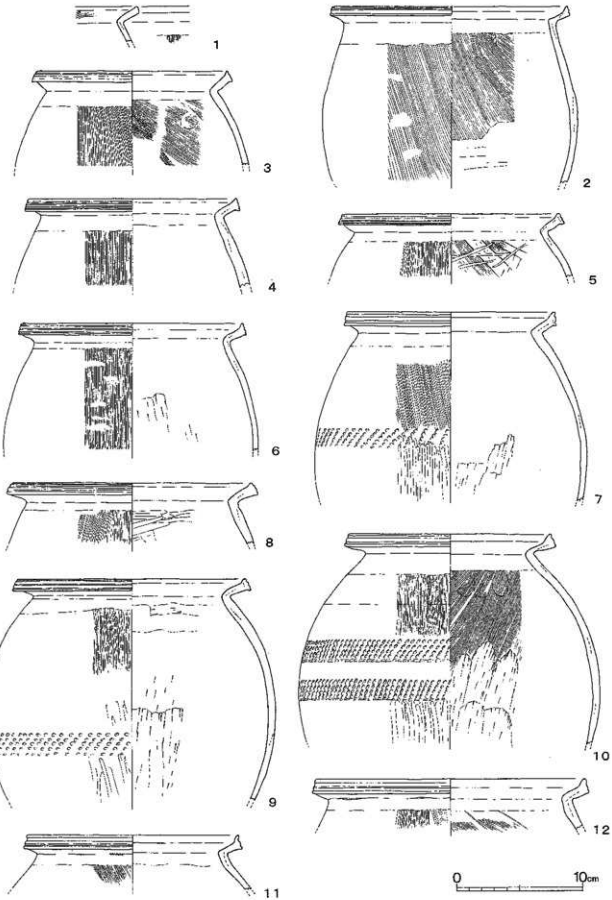


D37図　SD05出土遺物実測図2（S=⅓）

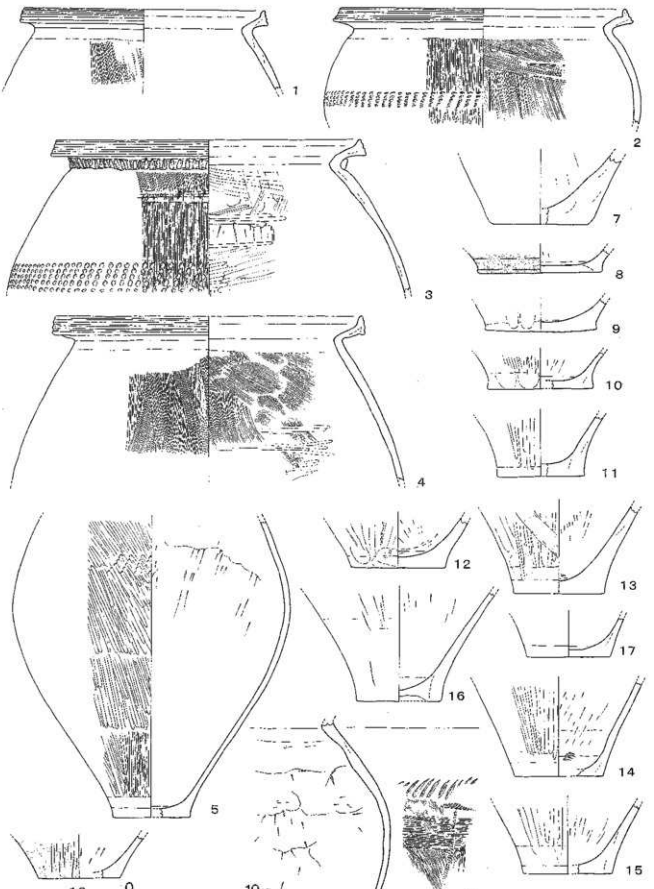
できる。第2は、弥生中期後葉に機能していた溝が終末期に再掘削された、という案。

C区SK32で記述したが、当遺構3層出土の土器片とC区SK32出土の土器片が接合している（C18-19）。これは当遺構とC区SK32が同時期に機能していた好資料である。また同区内、東へ28mに位置する大溝出土の土器と当遺構2・3層出土の土器が接合した。詳細は大溝で記述する。

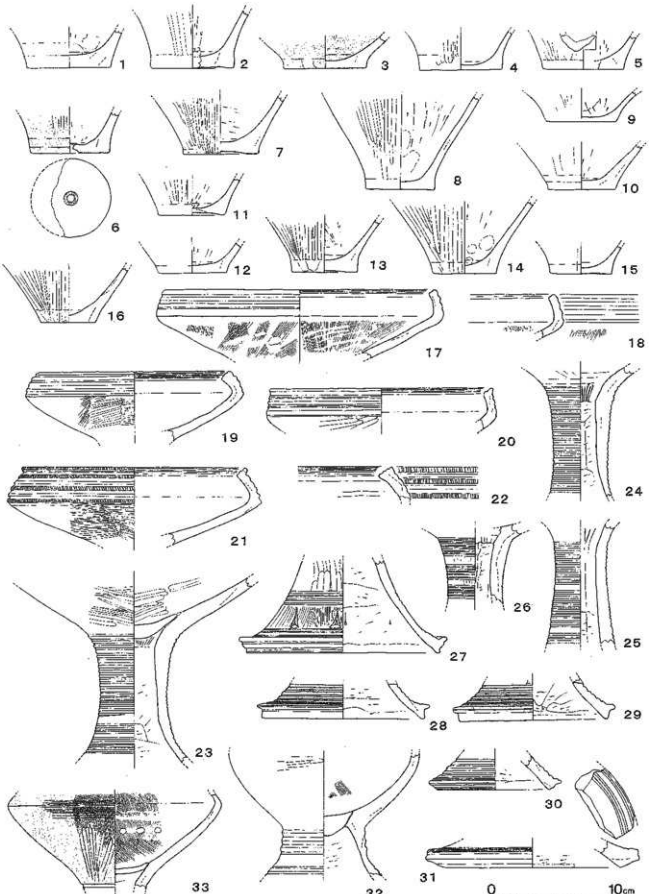
D36-1～7は広口壺である。1は現存器高59cmあるやや大型のもの、2はそれより若干小振りで、3もやや小振り、4の頸部径は1に近いのでやや大型のものであろう。5・6はこれらと同形態の頸部破片である。これらはラッパ状に開く口縁部をもち、1・3のように口縁端部は上下に肥厚して面をもち3条



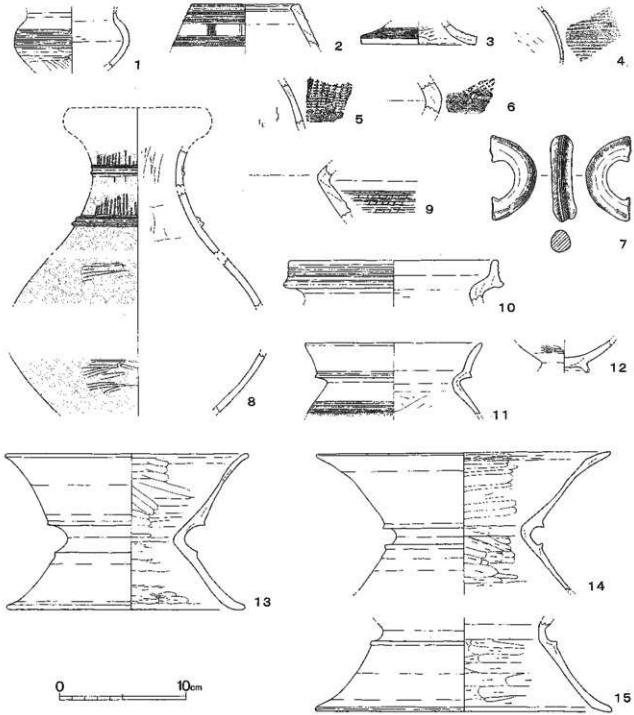
D38図　SD05出土遺物実測図3（S=⅓）



D39図　SD05出土遺物実測図4（S=⅓）



D40図　SD05出土遺物実測図5（S=⅓）



D41図　SD05出土遺物実測図6（S=⅓）

の凹線文を、口縁内面にも1は5条、3は7条の凹線文を2は波状文を施す。頸部から長めの胴部へなだらかに移行する。胴部は長めだが丸く膨らんだような形状を呈する。口縁部の文様構成は、上記した以外に、1の口縁端部の凹線上には4本1組の棒状浮文が等間隔で4組貼付してある。また口縁部外面のドを向く面に絵のようなヘラ描きが観察される。現状では浅いタッチで「L」字状に区画した内に斜め線を入れている。頸部には多条の凹線文が施してあり、そのまま連続して肩部から胴部最大径位まで文様が続く。1は1段の列点文、4段の斜格子文、6条の凹線文、2は波状文と3条の凹線文を交互に4

段と3段施す。4は7条の擬凹線状有軸をもつ羽状文を、5は列点文を施す。6は頸部の凹線文の上に列点文、「ノ」の字状のヘラ描き文を施している。7は以上の6点とは胎土・焼成・施文具合が違って、堅い焼きで、褐色が強く、文様下には粗いハケ目調整を行い、同様な粗いタッチの波状文と平行沈線文を施し、その上には太い凹線文を何条か施すようである。粗く感じるのはそれぞれ調整・文様を施したままで最後調整を行っていないためと考えられ、他の土器とは若干異質な感じがする。

D37-1は壺で、頸部から口縁部が屈曲し、口縁端部は上下に拡張して面をもち、3条の凹線文を施すタイプである。頸部には3条の凹線文とクシ歯状工具による刺突文を施す。

D37-2～5は直口壺である。2は外反ぎみに、3は内湾する口縁部で、外面には4条の凹線文を、口縁端部は肥厚して面をもち浅い2条の沈線を施す。頸部は締まり（2は若干ゆるい）、体部が球状に膨らむ。胴部最大径位より若干上に列点文を施す。2点とも底部は不明であるが、平底以外にG78-12のような脚の付く可能性も考えられる。4は3の形態と似ているが、口縁部外面は連続した凹線文は施さず、上半に2条の凹線文を、肩部に列点文を施している。5は口唇部に刻目を口縁部外面に貝殻復縁と考えられる12～13条の擬凹線文を施すもので、橙色を呈する。擬凹線文のタッチと橙色を呈する胎土がD37-10とよく似ており、同一個体の可能性あり。

D37-6～10は無頸壺である。6は口縁部が内傾し、口縁端部は内へ肥厚して面をもち、1条の凹線状の窪みを、外面には4条の凹線文と1条の沈線文が施される。また現状でひとつ穿孔あり。体部はきつく張り出し丸みを帯びて玉葱状を呈する。底部へもかなりしまるようである。底部はD40-9と胎土及び内外面の調整が似ているので同一個体の可能性あり。7は6と同じプロポーションを呈する口縁部破片である。口縁端部は内側に丸め込んだような形状を呈する。外面には凹線状の沈線文が4条施され、穿孔は2ヶ所ある。8は胴部があまり開かない筒状に近い形状を呈するもので、上位から4状の凹線文、列点文、2条以上の凹線文を施している。9は胴部が外開きとなり、口縁端部は内外に肥厚して面をもち、2条の凹線文を施す。外面は上位から8条の凹線文、ヘラ状工具による斜格子文を施す。10は丸く胴の張るプロポーションを呈するもので、胴部最大径位より上に貝殻腹縁と考えられる工具による擬凹線文状の平行沈線文が縦位・横位に施されている。前記したように、擬凹線文のタッチと橙色を呈する胎土がD37-5とよく似ており、同一個体の可能性あり。

D38-1～D39-6は甕である。D38-1は「く」の字状口縁で、端部はわずかにつまみ上げている。D38-2～D39-4は口縁部が上下に拡張して内傾する面をもち、2～3条の凹線文また沈線文を施すものである。口縁面長が1cm未満のものは不明瞭な沈線状であったり、小口らしき原体により筋状の沈線であったりするが、1cm以上のものは凹線文が明瞭に施されている。頸部は「く」の字状に屈曲し、口径がやや広いせいか、口径と胴部最大径の差のあまりないプロポーションを呈する。但し、頸部が締まり差の大きいD38-10・D39-3・4などもある。D39-2は他より胴部が早くから丸く締まるプロポーションを呈するようで、鉢になる可能性もある。D38-7・9・10、D39-2・3・5は胴部最大径位に列点文を施す。D38-10は2段である。またD39-3の頸部には指頭圧痕文帯を貼り付けている。D39-6は胴部最大径位より若干上にクシ歯状工具による刺突文が施されている。調整は、ナデとハケ目とミガキが主体であるが、内面の胴部最大径位より上までケズりっぱなしのものD38-6・9・10、D39-5・6がある。D39-5の器壁は3mmと薄いのに対し、D39-6は4～5mmと厚く、胎土も1～2mm大の砂粒子を多く含んで粗い。

D39-7～D40-16は壺・甕・鉢などの平底の底部である。D39-8～10の底部は若干の凸レンズ状を呈する。D39-7は厚手で、胎土に1～2㎜大の砂粒子を多く含み粗い感じを受ける。D39-8の底径は9.8cmあり他を圧しているが、底径の割に器壁が薄い。また外面には朱塗りの痕跡あり。D39-5・9～D40-7は底径8.8～5.9cmの若干大型から中型のもの、D40-8～16は底径5.3～4.3cmの小型のものである。器壁の厚さは大きさに比例しほぼ一定であるが、底部の厚さは底径の大きさに関係なく厚いもの、薄いものが存在する。D39-8以外にはD39-18・ D40-3が内外面、D40-6が外面に朱塗り痕あり。D40-6は直径1cmの内外面両サイドから焼成後に底部穿孔され、D40-5は体部下位に焼成後に歪な穿孔がされている。D40-9は前記したようにD37-6と胎土及び内外面の調整が似ているので同一個体の可能性あり。

D40-17～31は高坏である。17～22は坏部で、若干深く立ち上がり口縁部は屈曲して内湾し、逆「く」の字状を呈する。20は直立ぎみに立ち上がるので逆「L」字状を呈する。口縁端部は肥厚して面をもち、19～22は2～3条の沈線文を施す。口縁部外面には3～5条の凹線文を施し、21・22はその後凸部に刻目を数段施す。23～26は坏部下位から脚柱部にかけて、27～31は脚裾部である。23は坏部と脚部が連続してラッパ状に成形されたものに円盤が接合した資料である。円盤を充填している。23～26の脚柱部は内面絞り痕がよく観察され、外面には多重に凹線文が施され、間を空けてインパクトをつけているものもある。27～30は脚柱部から裾広がりとなり裾端部は拡張して湾曲する面をもち、27・30はそれが内傾して角が接地する。28・29は逆「L」字状に屈曲し直立して接地する。また拡張した端部上は跳ね上がりその先端までが脚柱部からの凹線文が連続して施される。27・30は裾端部面にも浅い2条の凹線状の文様を施す。27は4条と3条の凹線文で区画した文様帯に三角形スカシを現状で2ヶ所に入れる。28・29もスカシの痕跡が観察され、共に外面に朱塗りが施されている。31はやや厚手の粗雑な作りで、裾端部は肥厚して2面あり、裾端部上には3条の凹線文を施しているが、施文後にナデていないのも粗雑な感じを受ける。

D40-32・33は脚台の付く直口壺あるいは鉢と考えられるもので、共に円盤充填法で接合している。32は厚手で、器部は球状に立ち上がり、幅広で安定感のある脚部は途中屈曲して裾広がりとなるようである。脚柱部には3条の削り出し突帯、現状で2条の凹線文を施す。33は薄手の秀麗な作りで、器部は深い立ち上がりから屈折して伸びるようで算盤玉状を呈すると考えられる。脚基部に凹線文を現状で1条施してある。外面には朱塗りが施されている。器部内面の一定レベルに指頭痕の列が観察される。成形する時に器壁厚を確認するための痕跡かと思われる。

D41-1～7は小型のミニチュア土器及び雑把なものである。1は扁球形を呈するミニチュア土器である。胴部最大径位に7条の貝殻腹縁による擬凹線文を施す。2は凹線文と刻目を駆使した小型鉢である。無文帯は磨いたような光沢を放っている。3は小型高坏の脚裾部である。裾端部は矩形でナデつけており、裾部には5条の凹線文を施したのち凸部と角に刻目を施す。4・5はやや小型器種の胴部破片であるが、4はハケ目ののち擬凹線状の平行沈線文を施したもの、5は編み目状の文様となっているが、編み目ではなく、クシ歯状工具により施文されたもの、または型押しにより施文されたものではないかと考えている。6は胴に張りのある器種の胴部最大径位の破片である。厚手のもので、外面にヘラによる斜格子文が施されている。7は小型器種に付くと考えられる把手である。丁寧な調整後、中央両サイドにクシ歯状工具による羽状文を施したのちその中央に5条の擬凹線状の平行沈線文を施す。

D41-8は北部九州の須玖式土器である朱塗りが施された袋状口縁壺で、破片4点から復元した[31]ものである。頸部から胴部は丸く張り出し、裾すぼまりに底部へ移行するようである。頸部には2条の「M」字状突帯文が貼り付けてあり、突帯文より上には縦位の暗文が施される。頸部は細かい絞り痕が観察され、内面はナデ調整である。調整にケズリを使用していない点、黄色みを帯びた胎土などから須玖式土器圏からの搬入品と考えられる[32]。同様な小破片は合計9点程出土しており、同一個体の可能性が強い。

D41-9は備後北部の塩町式土器[33]である甕の肩部破片である。塩町式土器の特徴である凹線文と刻目を組み合わせた文様を施したもので、凹線文を施文後、刻目文として一気にヘラ状工具により施文している。胎土に1mm以下の砂粒子を多く含み、淡い黄橙色を呈しており、在地の土器とは差異を感じるので、塩町式土器製作圏からの搬入品と考えられる。

D41-10～15は、前記したように弥生後期から終末期の土器である。10・11は複合口縁の甕である。10は短く膨らみをもち内傾する口縁部で、端部は丸くおさめ、突出部は上からのナデと下から膨らませているため受け口状となっている。口縁面には4条の浅い凹線文を施す。11は外傾する口縁部で、端部は引き伸ばしておさめ、突出部は上下からのナデ、特に上から強くナデつけて鋭く突出させる。外面肩部には、タテハケ目のち横位のミガキを行い、調整なのか文様効果を狙ったものなのかは欠損しているため不明である。12は低脚坏である。脚裾部が打ち欠いたように欠損しているが、直立ぎみに開く脚部で、坏部は内湾して立ち上がる。13～15は蓋形器台である。筒部が短く受部と脚部も外反し、両端部は丁寧にナデている。受部径が13は19cm、14は23cm、底部径が13は18.7cm、15は23.3cm、口縁端部と底端部から筒部中心までの長さは、13で6.6cm・5.7cm、14で6.6cm、15で6.4cmを測り、3個体は、15は若干大きいようであるが、器高はほぼ同じで、14は器高に対して径が大きいので、13を縮約したようなタイプである。

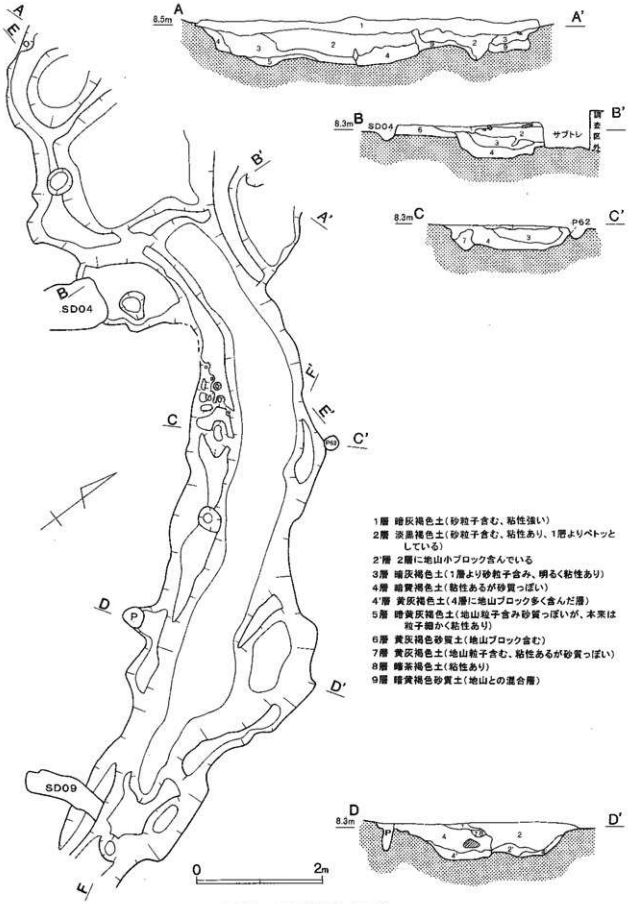
SD06（D42～D45図）

C-67・68、B-68・69、A69Gr内、標高8.4mで検出したが、調査区北壁土層断面A-A'からは8.6mで確認を確認できた。南西を内側とするような北東へ膨らむ湾曲を描く溝である。検出長16.2m、幅1.1～3m、深さは検出面から40～60cmを測る。幅の割に浅く断面逆台形を呈する。

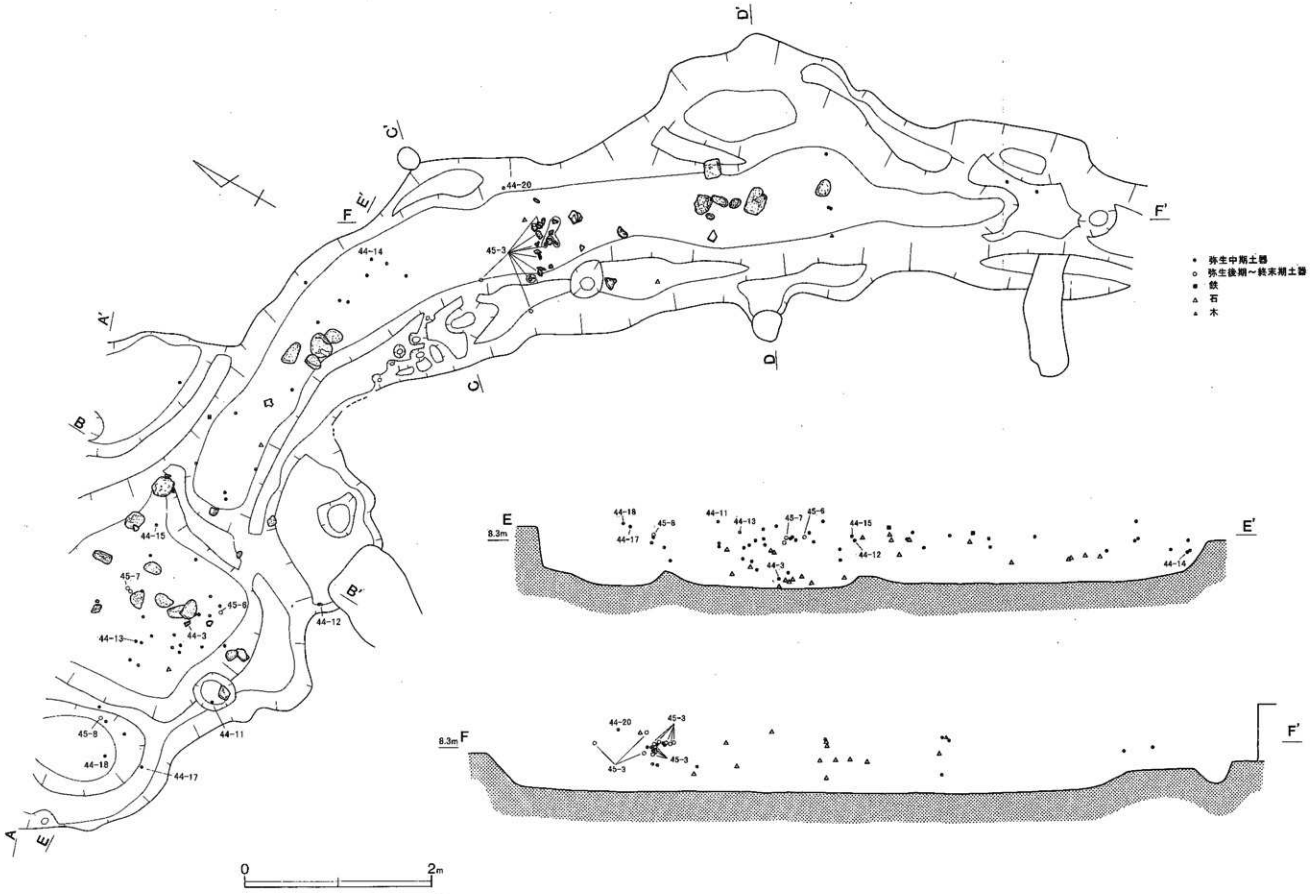
すっきりとした溝ではなく、両法面及び南側・北側にはピット状及び平たい落ち込みが存在する。中央底面が通っているのが本来の溝である。南端では徐々に底面が上がっていくので、南調査区外では溝が収束する可能性がある。北端調査区壁面に沿って大きく3ヶ所の平たい落ち込みがある。中央底面がそのひとつに突き当たり壁が立ち上がって落ち込んでいく。その南に位置するステップはB-B'土層断面より6層に当たり本来のSD06に切られた古いものである。土層断面D-D'のD'側の落ち込み2層は4層を切った状況を呈しており、全体に載っている1・2層はSD06内でも新しい層と考えられ、3・4層が本来のSD06と考えられる。

SD06の南西内側にはほぼ同時期の土壙墓と考えられる遺構が10数基検出されており、SD06の北東外側からは全く確認されていない。このため、このSD06は墓域を区画する溝と考えられる。最も西に位置するのはC区SK32で、SD06から約35mの距離である。

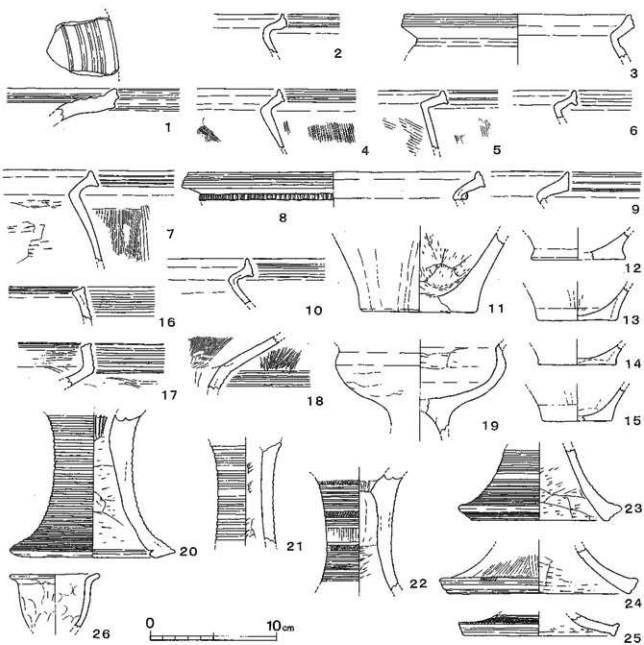
出土遺物は、弥生土器がコンテナ2箱分、土師器・須恵器が8点ほどで、これらは上層からの出土で



D42図 SD06実測図 (S=1/60)



D43図　SD06遺物出土状況図（S=1/40）

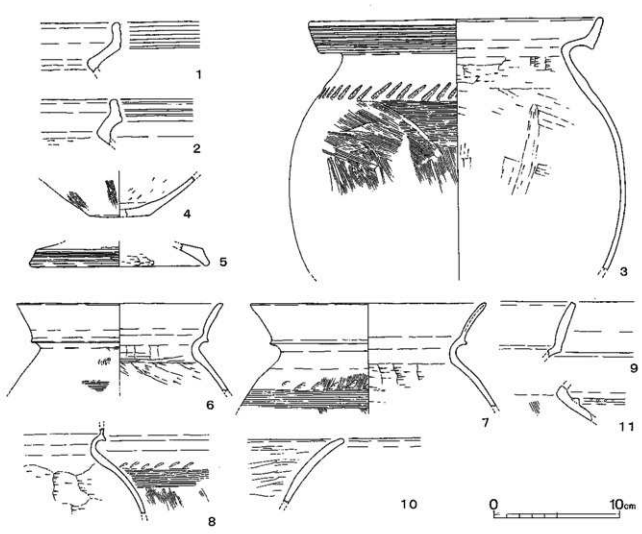


D44図　SD06出土遺物実測図1（S=⅓）

混入品である。また20cm大の礫が3ヶ所に集中して出土している。

弥生土器は中期後葉のものが中心であるが、D45図に掲載したように後期から終末期の土器も1・2層の新しい堆積土中から出土している。本来のSD06に関すれば、混入品として取り扱えるものである。但し、SD06上にこれらの時期の遺構が存在した可能性もある。SD06の覆土は黒々としており、他の遺構を識別するのは困難であった。

D44-1は広口壺である。口縁端部は肥厚して面をもち2条の凹線文を、内面には4条の凹線文を施す。D44-2～10は甕である。口縁部が肥厚または上か上下に拡張して面をもち、2～6は2条の、7～10は3条



D45図　SD06出土遺物実測図2（S=⅓）

の凹線文または沈線文を施す。8の頸部には指頭圧痕文帯が貼り付けてある。D44-11～15は壺・甕の平底の底部である。11は厚くどっしりとしたもので、内面にはケズリ痕が粗く残っている。12は底部から体部へ強くナデてくびれをつけ外開きに立ち上がる。13～15はやや薄手のものである。D44-16は鉢の口縁部破片である。内湾して立ち上がる口縁部で、端部は肥厚して面をもち、2条の浅い凹線文を、外面には現状で5条の凹線文を施す。D44-17～25は高坏である。17～19は坏部で、18は接合部から直線的に深い立ち上がりをみせるもの、17は口縁部で屈曲して直線的に立ち上がり、口縁端部は肥厚して面をもち、2条の凹線文を、外面には5条の凹線文を施す。18の基部から脚部にかけて凹線文が施される。19は胎土に1～2mm大の砂粒子を含み厚くて粗雑な作りのもので、体部は碗状に内湾して立ち上がり、口縁部は外反するようである。20～25は脚柱部である。凹線文を多条に施文したもので、22・24・25には刻目を伴う。20は脚柱部から裾部付近になってから開く程度のあまり開かないタイプで、裾端部は未発達である。25は反対に裾端部が拡張して接地し、床面に水平になるほど裾部は開く。D44-26はミニチュア土器である。丸みをもった体部で口縁部は外反する。プロポーションは違うが、当遺構区画内に所在する土壙墓であるSK07出土のD14-7が同様な手捏ね土器である。

45-1～11は後期から終末期の土器である。1・2は若干受け口状を呈し、短い複合口縁の壺と甕である。口縁端部は膨らませて丸くおさめる。口縁面には3条の凹線文が施される。3は1・2の口縁部が発展した複合口縁をもつ甕で、口縁端部は丸くおさめ、突出部は頸部全体をナデることにより意識している。口縁面には2回の施文により8条の擬凹線文が施される。球状に膨らんだ体部で、肩部にはクシ歯状工具による刺突文が施される。4は底径の小さな稜線のあまい平底で、2・3タイプの一外面に煤が付着しているので一甕の底部である。5は小型高坏の脚裾部である。複合口縁状を呈し、面には4条の凹線文を施す。6～9は無文の複合口縁を有する甕で、6の口縁端部は面をもちながらも引き伸ばし、7のそれは引き伸ばし、9のそれは平坦面をもつ。6の突出部は下からのナデにより下向きに、7のそれは上下からのナデにより小さく出、9のそれは若干出る程度。6～8共に頸部からナデ肩の肩部へと移行し、肩部文様は貝殻腹縁と考えられる工具による平行沈線文を施し、7・8はその上に刺突文を施す。7はハケ目原体、8はヘラ原体である。10は鼓形器台の受け部破片である。端部はナデにより若干窪みをもつ。11は器種も上下位置も不明で、実測図が逆転する可能性をもつものであるが、約90度に屈曲する面をもち、残存する面には、屈曲部よりやや下に刻目突帯文を貼り付ける。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期後葉に該当しよう。

SD13（D46・D47図）

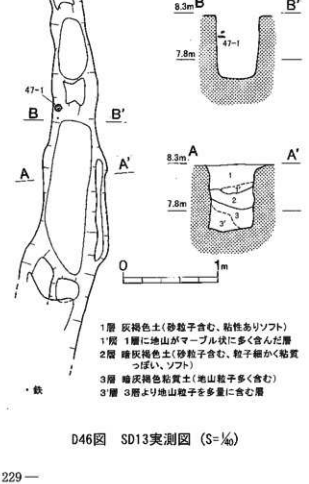
A・B-74・75Gr内、標高8.3mで検出した。北側へ膨らむ若干湾曲した溝状遺構で、東側は調査区外へ延び、西側で立ち上がる。検出長1.2m、幅30～80cm、深さ15～70cmを測り、ほぼ東西に位置する。底面と壁面はほぼ直角をなし、立ち上がる西端と東側にはステップを伴う。上面からは焼土痕らしき炭化物が東側半分より出土している。柵・塀などを構築するための掘り方のようである。

出土遺物は、土師器・須恵器が小袋1袋分、鉄釘2点である。D47-1・2は土師器の小皿である。底部回転糸切りで、口径7.4cmと7.2cmでほぼ同じであるが、底径が5.3cmと4.1cmで差異がある。1は底部から体部へスムーズに移行するが、2はナデにより強いくびれをもつものである。2は内外面にススが付着しており灯明皿として使用されたものと思われる。

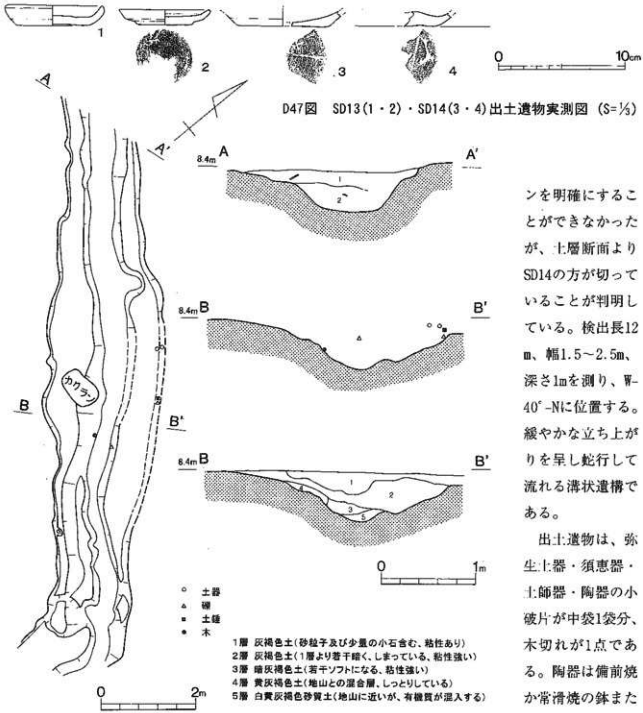
以上の出土遺物などより、当遺構は13～14世紀に該当すると考えられる。

SD14（D47・D48図）

C75、A・B-76Gr内、標高8.4m強で検出した。中央東側でSK32と重複している関係で、プラ



D46図　SD13実測図（S=1/60）



D47図　SD13(1・2)・SD14(3・4)出土遺物実測図 (S=⅓)

D48図　SD14実測図 (平面図S=1/60・土層断面図S=1/40)

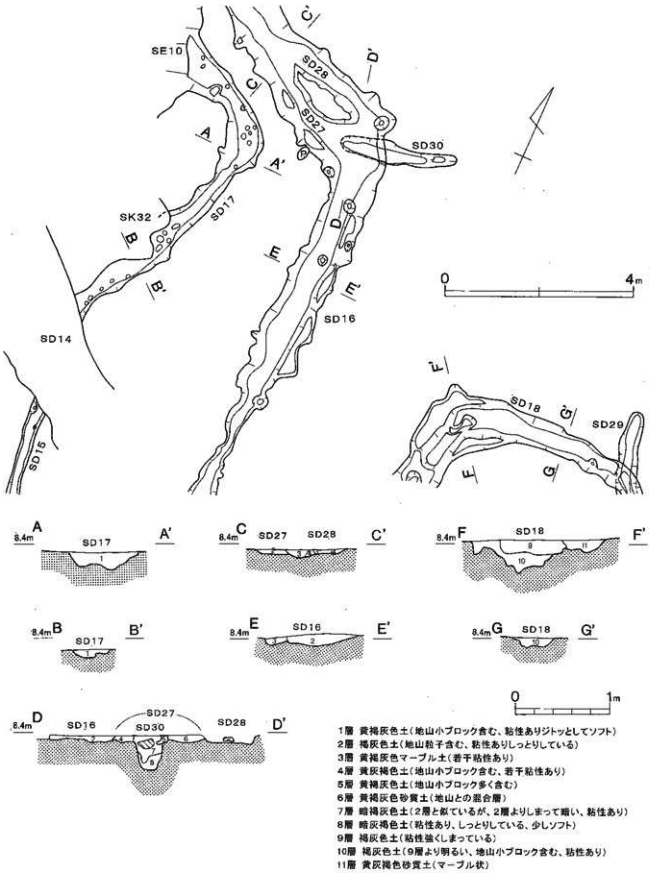
ンを明確にすることができなかったが、土層断面よりSD14の方が切っていることが判明している。検出長12m、幅1.5～2.5m、深さ1mを測り、W-40°-Nに位置する。緩やかな立ち上がりを呈し蛇行して流れる溝状遺構である。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶器の小破片が中袋1袋分、木切れが1点である。陶器は備前焼か常滑焼の鉢または甕の胴部破片で数点出土している。木切れは中段の壁沿いから出土している。D47-3・4は土師器の白っぽい色調を呈する坏底部で、回転糸切りを行っている。底部から体部へはスムーズに移行し、外開きに立ち上がる。

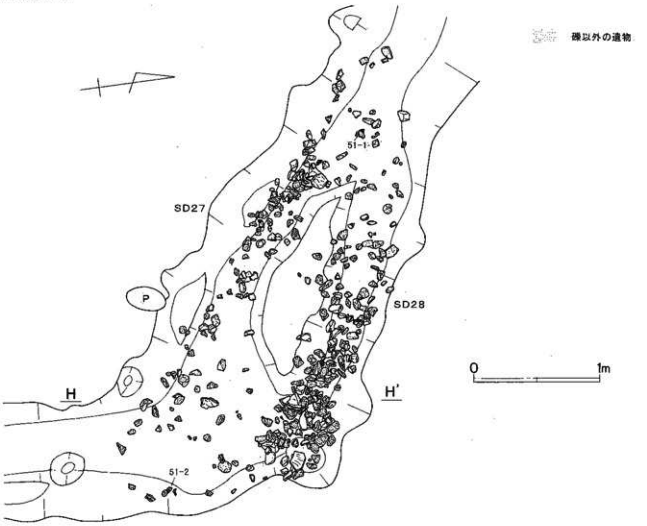
以上の出土遺物などより、15～16世紀に該当すると考えられる。

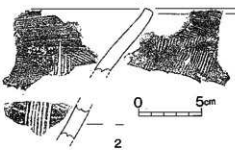
SD15～17・27・28(D49～D51図)

A～C-76～78Gr内、標高8.4m前後で検出した溝状遺構である。

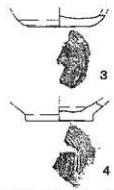


D49図　SD15～18・27～30実測図（平面図S=⅙・土層断面図S=⅛）





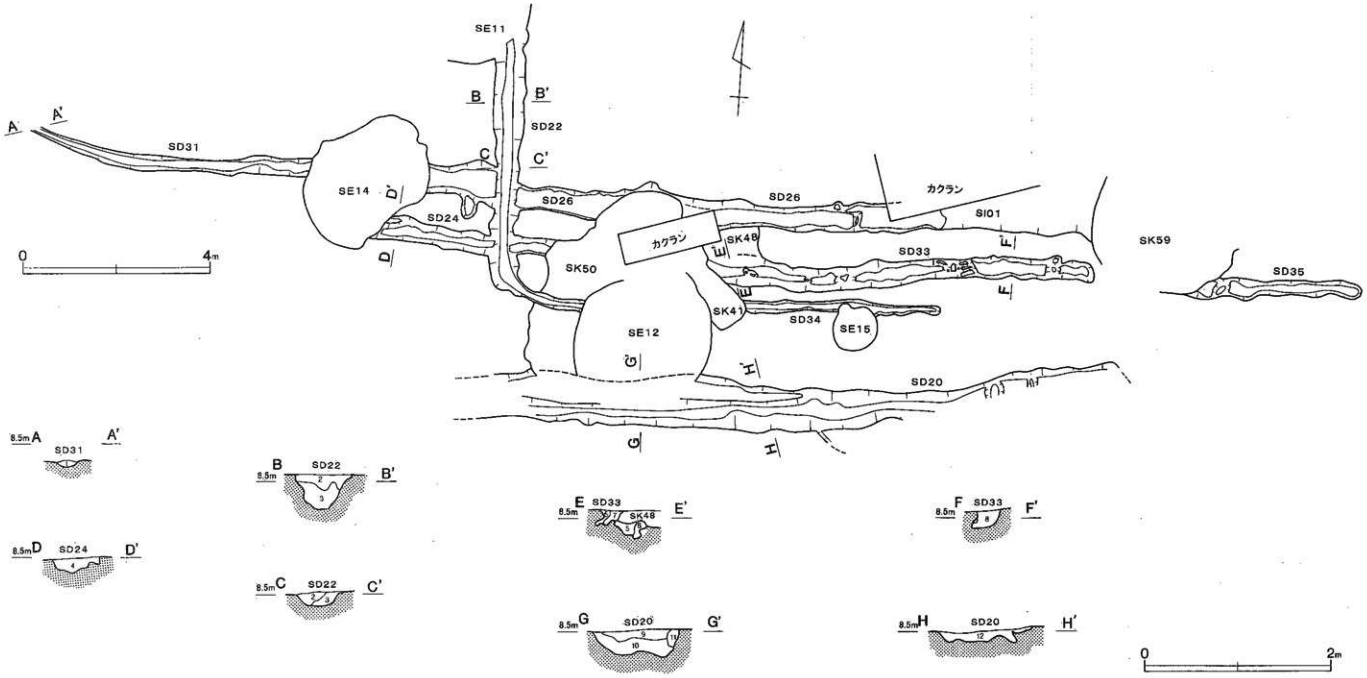
D50図　SD27・28礫敷き及び遺物出土状況図（S=1/30）



D51図　SD27(1・2)・SD18(3・4)出土遺物実測図（S=1/3）

SD17はSE10から派生しW-35°-Nの方角で延びるが、2.5m付近から約45度角度を変えてN-28°-Eの方角に延び、SK32を切り、SD14に切られ、SD15へと繋がり調査区外へと延びていく。SE10との関係は不明で、同時期に機能していた可能性もある。検出長12m、幅40～80cm、深さ10～20cmを測る。

SD16・27・28は三叉に分かれているため各々に遺構名を付けて調査したが、切り合い関係はなく、同じ溝である。北側調査区外からW-30°-Nの方角に延びるが、4m付近からSD17同様に約45度角度を変えてN-13°-Eの方角に延びて南側調査区外へと続く。検出長12m、幅30～140cm、深さ10cmを測る。三叉に分かれている付近1×4m範囲内には10cm以内の小礫がほぼ同レ



1層 暗黄褐色砂質土
2層 明褐灰色土(地山小ブロック含む、砂質っぽい)
3層 明黄褐灰色土(地山小ブロック多く含む、砂質っぽい)
4層 灰褐色土(地山小ブロック含む、粘性あるがサラッとしてきれいな土)
5層 灰褐色土(粘性あり、地山粒子少し含む)
6層 黄灰褐色土(地山粒子・褐色粒子含む、若干粘性あるが砂質っぽい)
7層 黄褐灰色土(ブロック状に入った層)
8層 黄褐灰色砂質土(地山が荒砂になったので、粒子が粗くなってきた、若干粘性あり)
9層 暗灰褐色土(砂粒子・茶褐色粒子含む、粘性少)
10層 灰褐色土(粘性あり、少々ソフト)
11層 茶褐色土(地山小ブロック少し含む、粘性あるが砂質っぽい)
12層 褐灰色土(褐色粒子・地山小ブロック少し含む、若干粘性あり)

D52図 SD20・22・24・26・31・33～35実測図 (平面図S=1/80・土層断面図S=1/40)

ベルで敷き詰めたように密集して出土している。

これら2条の溝は70cm～3.5mの間隔をもつが、同じように屈曲して方角を変え、ほぼ併走しており、共に浅い立ち上がりを呈し、底面は蜂の巣状に小さな穴が凸凹する。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶器の小破片が中袋1袋分で、弥生土器は混入品である。特にSD27・28の礫敷きで遺物が多く出土した。D51-1は土師器の、D51-2は備前焼の擂鉢である。共にSD27出土である。小破片ではあるが明瞭な擂り目が施してある。1はSE10出土のD81-4と同一個体であるのか胎土及び擂目・ハケ目調整の様子が酷似する。

以上の出土遺物などより、2条の溝状遺構はともに、15～16世紀に該当すると考えられる。

SD18・29（D49・D51図）

A・B-78・79Gr内、標高8.4m強で検出した。SD18は調査区外から調査区外へと湾曲する溝で、途中SD29を切っている。SD29は大溝を切る。SD18は検出長5.8m、幅60～120cm、深さ10～60cmを測り、凸凹状態でステップ状を呈するところもある。SD29はSD18の底面より深く、検出長1.7m、幅40cm、深さ20～30cmを測り、N-10°-Wに位置する。底面と壁面はほぼ直角をなす。

出土遺物は、SD18から土師器、SD29から弥生土器の破片が少量である。D51-3・4は土師器坏底部である。底部回転糸切りで、若干淡い色調を呈する。底部から体部へは3はスムーズに移行するが、4はナデによりくびれをもって立ち上がる。

以上の出土遺物などより、SD18は15～16世紀、SD29はそれより古く、大溝より新しい時期と考えられる。

SD30（D49図）

C-77・78Gr内、標高8.4m弱で検出した。SD27・28に切られ、大溝を切っている。長さ2.5m、幅40cm、深さ35cmを測り、E-10°-Nのほぼ東西に位置する。底面と壁面はほぼ直角をなす。

出土遺物は、須恵器坏の破片が1点のみである。以上、当遺構は10世紀内の時期と考えられる。

SD20・22・24・26・31・33～35（D52・D53図）

C-78・79、A～C-80、A・B-81・82Gr内、標高8.5m強で検出した溝状遺構である。軸をほぼ東西南北に合わせている。南北方位のSD22と東西方位のSD33は断面「U」字状のしっかりした立ち上がりを呈する溝である。溝同士の切り合い関係は明確ではなく、前記したSD22は深くしっかりしているので、SD24・26を切るようでもあり、合流するようでもある。後述するが、出土する遺物より大きな時間差がないため、敢えて、合流としたい。

SD31は、検出長6m、幅15～40cm、深さ10～20cmを測り、北側調査区外より大溝上を切って、SE14へとぶつかる。SE14を挟んで連続すると考えられるSD26は、検出長14.5m、幅50～60cm、深さ5～10cmを測り、東へ延びてSD22に合流し、SK50に切られ、カクランとSK59に切られた付近で収束するようである。

SE14の南東より派生するSD24は、検出長4m、幅40～50cm、深さ15cmを測り、東へ延びて途中SD22に合流し、SK50に切られる。SK50・41を挟んで連続すると考えられるSD33は、検出長8m、幅40～50cm、深さ10～25cmを測り、SK48に切られ、東へと延びてSK59手前で浅くなり、壁が確認できなくなったため収束する状況を呈するが、プラン確認中にはSD35へ続くようであった。SD35はSK59から3.8m東

で収束し、幅30～45cm、深さ5～15cmを測る。

SE11から派生するSD22は、幅25～70cm、深さ20～35cmを測り、南に5m下がったところでほぼ直角に東へ曲がり、2mのところでSE12に切られ、SE12・SK41を挟んで、連続すると考えられるSD34へと続くが、4.5m東で収束する。幅25cm、深さ5～10cmを測る。

最南に位置する他より若干幅広のSD20は、検出長13.5m、幅60～100cm、深さ15～25cmを測り、西側は大溝のプランが存在するため不明であるが、SE12を切って東へと延びる。SE12上でも同様な色調を呈していたため、プラン判別ができず、土層断面にて確認した。東へと延びるSD20は南側調査区外へと延びていく。

SD20以外では、SD22の最北部とSD33西側の底面レベルが最も低く、反対に収束する付近の底面レベルがほぼ最も高い状況を呈する。このためこれらは、集水及び排水機能を備えた溝と考えられる。

出土遺物は、各溝とも（SD34は無遺物）土師器・須恵器の小破片が若干数のみで、実測に耐えうるもの、確実な時期を押さえられるようなものは皆無である。須恵器を出土する溝は、SD22・26のみで、出土した土師器には数点朱塗りの施されたものがある。これらの溝はほぼ同時期と考えられる。

SD38・39（D53・D54図）

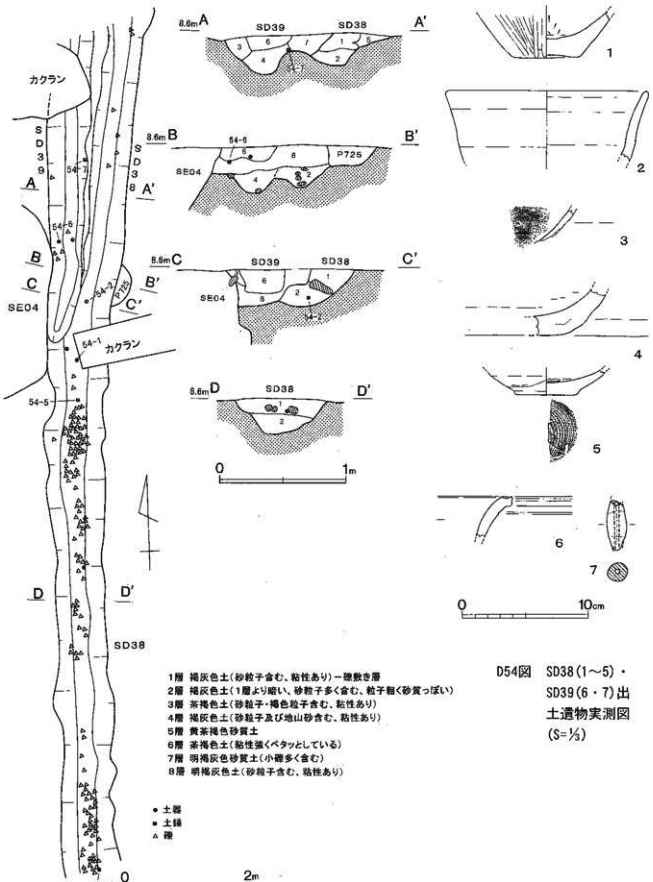
A64、B-64・65、C65Gr内、標高8.6mで検出した。SD38はほぼ南北に位置し、北側で若干（8度）東へ振る。南北側とも調査区外へと延びるが、検出長14m、幅70～90cm、深さ30cmを測る。SD39はSD38の北側で重複する溝である。ほぼ南北に位置し、北側は調査区外へ、南側は検出長5mのところで収束する。幅40～70cm、深さ30～35cmを測る。SD38・39と接するSE04との関係は、SD38・39が切っているようである。

SD38のSD39と重複しない南側からは、5～20cm大の礫が敷き詰めたような状況で出土した。ほぼ2層の上面に載っている。礫の集中しているところは、平たい面をそろえて上面をフラットに仕上げているが、下面は凸凹である。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶器・唐津焼・移動式竈の破片が1袋分と土錘1点である。弥生土器は周辺が弥生中期の墓域のための混入品である。SD39は小片がほとんどであるが、遺物に関しては、SD38とさほど時期差はないと考えられる。

D54-1は弥生土器甕の底部で、厚手で若干上げ底状の平底である。D54-2は中世須恵器の碗である。赤みを帯びた色調を呈し、立ち上がりの深いものである。D54-3・4は土師器で、3は坏などの小型品の胴部である。内面に刻圧痕が観察される。4はこね鉢の底部である。内面は摩滅している。D54-5は唐津焼の皿である。底部は糸切りを行い、底部から体部へはナデによりくびれをつけて立ち上がる。見込みに現状で1ヶ所砂目積み痕が観察される。底部周辺以外に施釉がなされている。D54-6は須恵器の壺口縁部である。SE04から同様な土器が出土するので、SE04からの混入品と考えられる。外反して立ち上がる口縁部で、端部は水平に拡張して矩形におさめ、上面に凹線状のナデを、外面には浅い沈線を施す。D54-7は土錘である。両端が欠損しているが、体部の膨らむ紡錘形を呈する。

以上の出土遺物などより、これらの溝状遺構は、16～17世紀に該当すると考えられる。



D53図　SD38・39実測図（平面図S=1/60・土層断面図S=1/30）

D54図　SD38(1～5)・SD39(6・7)出土遺物実測図(S=1/3)

大溝（D55図～D61図）

C-77～79、B-78～80、A-79・80Gr内、標高8.5m強で検出した。検出長13.5m、幅5.4mを測り、W-41°-Nに位置する大きな溝状遺構である。断面形態は「W」字状を呈し、2条の溝が併走したもののようである。西側に位置する方を大溝-W、東側に位置する方を大溝-Eと記する。大溝-Wは検出幅3m、底面幅60～70cm、深さ1.2～1.3m（底面標高7.2～7.3m）を測り、大溝-Eは検出幅2.2～2.5m、底面幅30～60cm、深さ1m（底面標高7.5m）を測り、大溝-Wの方が、深さも深く規模が若干大きい。各々の断面形態は「V」字状から逆台形状を呈する。大溝-W・E間ステップ幅は20～70cmである。

検出時には後世の溝状遺構などが重複しているようであったが、当遺構の規模が大きいため、正確に検出することは困難であった。D61図にはそれらの出土遺物を若干掲載した。上層の1～7層はこれらの後世遺構の覆土と考えられる。

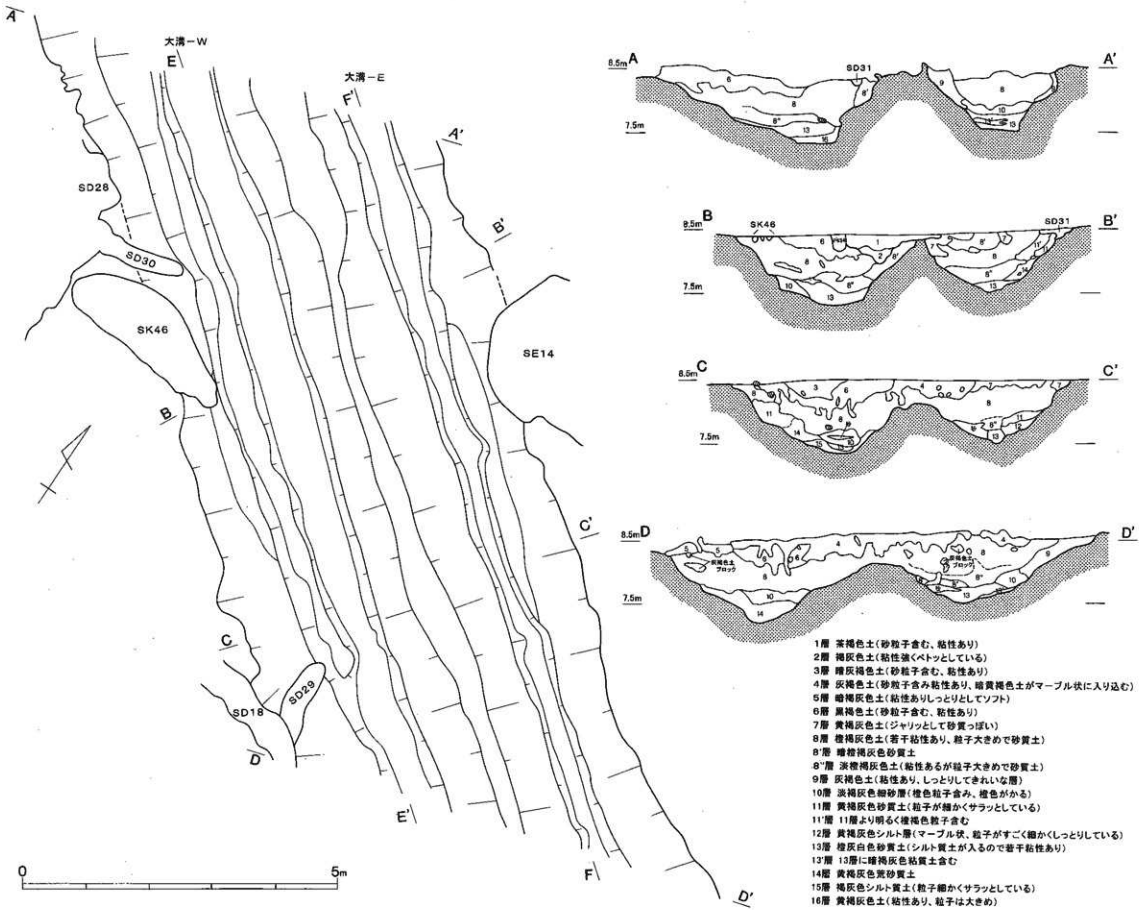
大溝の覆土は8層以下である。土層断面C-C'・D-D'より、大溝-W・大溝-E内の堆積状況はほぼ同じであることが判る。このことにより、当遺構はひとつの大溝であると判断した。8層は橙褐灰色土を呈しており、調査時には地山の黄橙褐色土と区別困難なほど似ており、人工的に一度に埋められた様相を呈していた[注3]。これは、溝を掘る段階で両脇に築かれた土塁（地山の土）を崩して埋めた可能性が考えられる。壁面に貼り付いている9・11層は、本来大溝に自然堆積した覆土である。それ以下の下層底面近くには薄い砂質土が砂を挟んで堆積しており、流水していた様相を呈する。

出土遺物は、弥生土器破片がコンテナ3箱分、土師器・須恵器が1袋分で、後2者は上層からの出土で、前記した後世の遺構のものと考えられる。

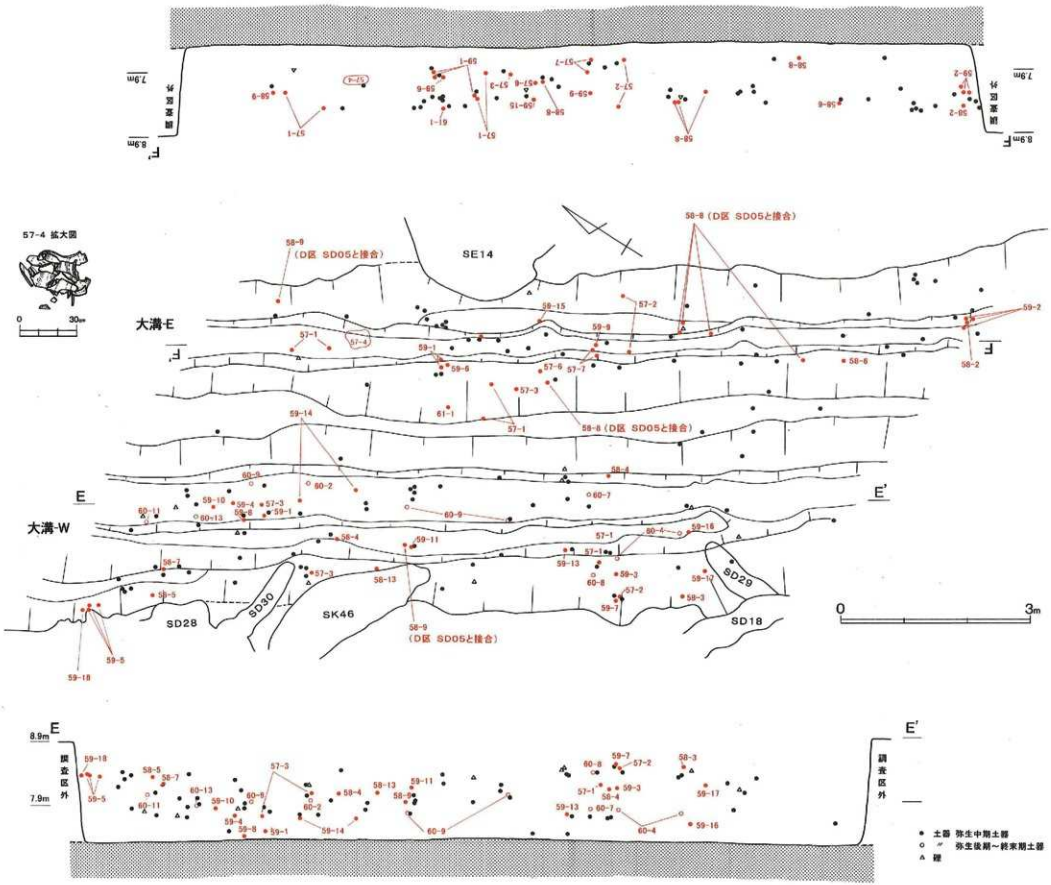
弥生土器は中期後葉のものがほとんどであるが、D56図にドット化した193点の弥生土器片のうち約5%の弥生後期から終末期土器10点が出土している。この他にも、8層及びその下位層からも出土しており、実測可能なものをD60図に掲載した。同様な遺物の出土状況は、前記したSD05でも確認している。当遺構も弥生中期後葉のみ機能していたとは捉えがたく、2案が提起できる。第1は、弥生中期後葉から終末期まで連続して機能していた、という案。第2は、SD05とは違い8層が人工的に埋められた層であるという点、D60-11が下層から出土したという点を考慮すると、弥生終末期に周辺に存在していた弥生中期から後期の遺構を壊して溝を掘り土塁を築き、短期間で再び放棄して土塁を崩して埋めた、という案。しかしこれは、苦肉の案である。

前にSD05で記述したが、当遺構8層出土の土器片とSD05出土の土器片が接合している（D58-8・9）。

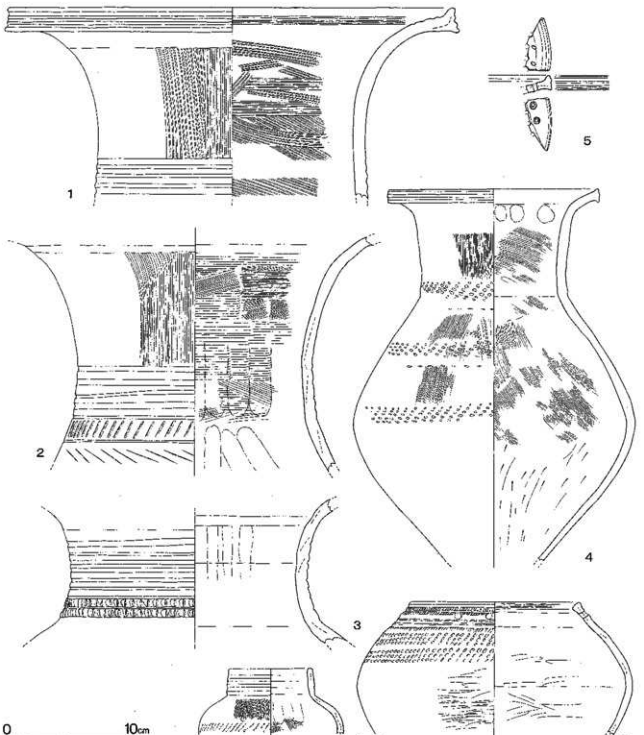
D57-1～7は壺である。1～3は大型の広口壺で、ラッパ状に開いた口縁部の端部は1のように上に拡張して面をもち、3条の凹線文を施し、内面には5条の凹線文というより4条のナデ出し突帯文を施す。1～3とも頸部には多条の凹線文を施し、2は小口とヘラによる刺突文を、3は爪による刺突文を施す。4は当遺構唯一の完形に近い土器である。広口壺ではあるが、頸部が直立ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく開き、端部は上下に拡張して面をもち、2条の凹線文を施す。頸部付け根から胴部が張り出す。頸部付け根、胴部最大径位、その中間位置の3段に列点文を施す。5は小型広口壺の口縁部で、口縁端部は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す。口縁部には上面から下面に現状で6ヶもの多穿孔がなされる。6は小型の直口壺である。直立した口縁部には3条の凹線文を施し、端部は平坦面をもつ。肩部は膨らみをもって胴部へと張る。胴部最大径位に列点文が施される。7は無頸壺で、扁平



D55図　大溝実測図 (S=1/80)



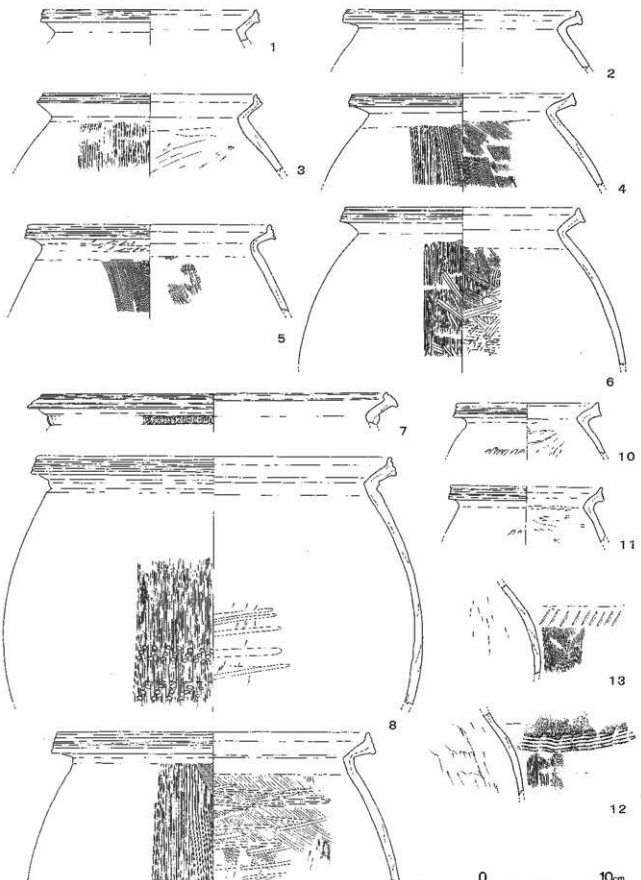
D56図　大溝遺物出土状況図 (S=1/60)



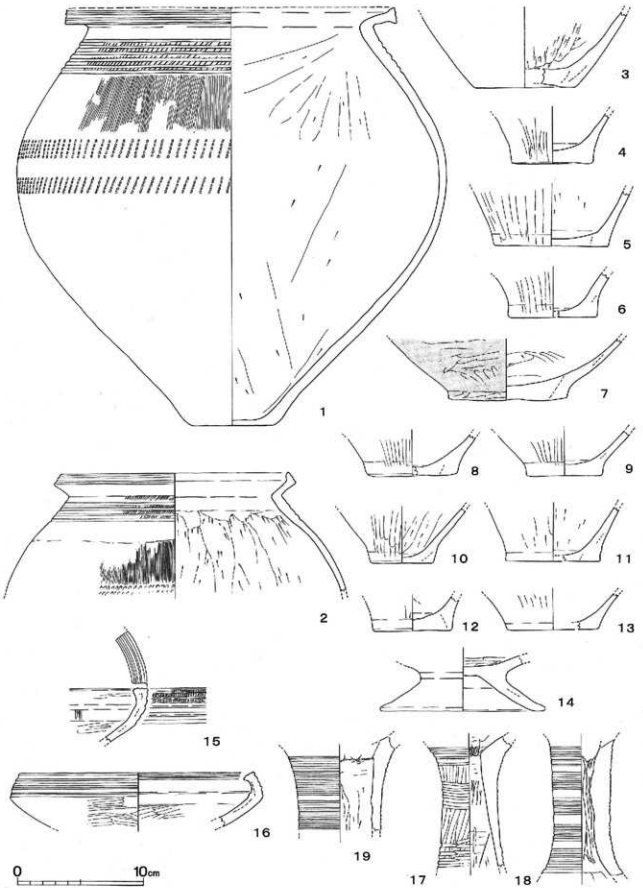
D57図　大溝出土遺物実測図1（S=⅓）

球形を呈し、口縁部下には風化著しいが、5条の凹線文とヘラ描きによる刻目2段の組み合わせ文様、その下に2段の列点文が施される。現状で2ヶ1対の穿孔あり。

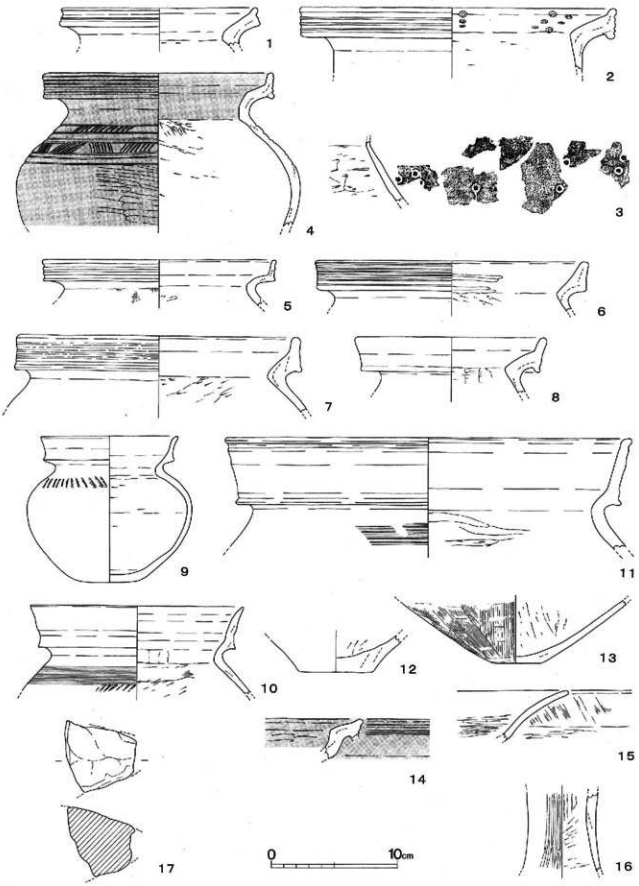
D58-1～13は甕で、10・11は小型のものである。口縁部が3・4・10・11は上に、1・2・5～9は上下に内傾して拡張し面をもち、1～3は2条の、4～11は3条の凹線文を施す。1～6の頸部は「く」の字状



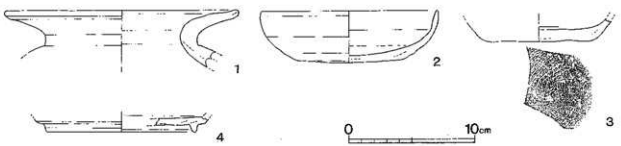
D58図　大溝出土遺物実測図2（S=⅓）



D59図　大溝出土遺物実測図3（S=⅓）



D60図　大溝出土遺物実測図4（S=⅓）



D61図　大溝出土遺物実測図5（上面出土須恵器）（S=⅓）

に屈曲し、8～11は湾曲して体部へと移行する。7のみ頸部に指頭圧痕文帯を貼り付ける。8は胴部最大径位に列点文、10・11の肩部下にはピッチの短い刺突文を施す。12・13の胴部破片にはピッチの長い簾状文、幅広のクシ歯状工具によるピッチの短い刺突文を施している。

D59-1・2は備後北部の塩町式土器である鉢・甕である。口縁部が1は上下に、2は上に拡張して面をもち、1は3条の、2は2条の浅い凹線文を施す。1は胴部が張り、底部へは緩すぼまりに移行し、稜線のあまい若干不安定な平底となる。塩町式土器の特徴である凹線文と刻目を組み合わせた文様を施したもので、1は頸部1cm下に6条の凹線文を施文後、刻目文として上下2回に分けてのヘラ描きにより施文している。2は頸部直下にピッチの狭いヘラ描きを施文後、4条の凹線文を施文してヘラ描きを刻目状としている。胴部最大径位には1は2段の、2は現状で1段の列点文を施す。胎土に1mm以下の砂粒子を多く含み、淡い黄橙色を呈しており、在地の土器とは差異を感じるので、塩町式土器製作圏からの搬入品と考えられる。

D59-3～14は壺・甕・鉢などの底部である。1～13は全体的に底径の小さめな平底で、体部へ広がるような立ち上がりをみせる。3は底径が広く若干厚手で、内面は単位のはっきりとしたケズリ調整を行っている。7は底径が広くくびれをもって体部へとかなりの広がりをみせて立ち上がり、内面にもミガキ調整が行われ、外面には朱塗りが施される。9は胎土自体橙色を呈するものである。10は底径が最も小さく器壁も薄いものである。13はD57-4と胎土・焼成・色調などがよく似ており、同一個体と考えられる。14は高台状の底部である。裾広がりのものでしっかりと安定している。器部内面にはミガキ調整が行われる。

D59-15～19は高坏である。15・16は坏部で、深い立ち上がりを呈し口縁部が屈曲して内湾するもので、端部は肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す。口縁部には15は1条の沈線と4条の凹線文を施し、凸部に3段刻目を施す。16は5条の凹線文を施す。17～19は脚柱部で、内面には絞り痕が観察される。外面には間隔を空けてグループ単位とした多条の凹線文を施している。17は凹線同士のつなぎ目が明確にみられるが、つなぎ目がずれており粗雑な感じを受けるものである。

D60-1～16は、前記したように弥生後期から終末期の土器である。1・2・4は壺である。1は口縁部が上に拡張して面をもち、口唇部は外反する。口縁面には2条の凹線文を施す。頸部は緩やかな曲線を描く。2は口縁部が上下に拡張して面をもち直立した口縁部となり、4条のしっかりした凹線文を施す。口縁部内面には2列6ヶひと単位と考えられる竹管文を現状で2ヶ所施している。3は同様な竹管文

が施された破片である。器種が不明なためここへ掲載した。バラバラの小破片で単位も不明であるが、用いられた竹と胎土が2とよく似ている。3の方は内面に屈曲する部分があり、ともにミガキ調整が行われ、あるいは鼓形器台の可能性もある。4は複合口縁を有するもので、口縁面には2条の沈線と3条の凹線文を施し、突出部は下からのナデにより若干斜めに出る。頸部は緩やかな曲線を描き、胴部は張り出す。肩部には7条の凹線文とその間帯2段にヘラによる連続「ハ」の字文が施される。外面及び、内面頸部以上に朱塗りが施されている。5～11は甕である。5は口縁部が上に拡張して面をもち若干外反した口縁部となり、浅い3条の凹線文を施す。頸部は緩やかに屈曲する。6～11は複合口縁を呈し、6・7は厚手の口縁部で面には7条と5条の擬凹線文を施し、突出部は6は出ず、7は下からのナデにより斜め下へ出る。7は赤橙色の胎土である。8も若干厚手の口縁部で面にはナデの痕跡が残存する。9は小型で薄手のもので、精選された胎土を用いたためか、淡色で精緻な感じを受ける。口縁端部は引き伸ばし、突出部は上からのナデにより反り返ったように横に出る。肩部が張り、稜線はあまいが底径の広い平底をなす。口径も広いので、鉢の可能性あり。肩部にはクシ歯状工具による刺突文を施す。10も薄手のもので、口縁端部は引き伸ばし、突出部は上下のナデにより斜め下に小さく出る。頸部内面は指タテナデにより若干伸ばしている。肩部には浅い多条の平行沈線文を施し、その下にクシ歯状工具による刺突文を施す。11は大甕の口縁部である。直線的な口縁部で端部を内外のナデにより外に折り曲げ、突出部は上下からのナデにより強く斜め下に出す。12・13は平底の底部である。12はやや厚手の胎土が赤橙色をしており、D60-7と同一個体と考えられる。13は底径が小さくて稜線のあまいもので、体部は大きく開いて立ち上がる。14～16は高坏で、14は厚手の複合口縁を有する坏部で、湾曲する体部をもつ。口縁面には現状で2条の凹線文を施し、内外面には朱塗りが施されている。15・16は薄手の坏部と脚柱部の小破片である。15は直線的な口縁部で、破片下部の体部は若干膨らみをもつようである。16の内面上半には絞り痕が観察される。

D60-17は厚みのあるごつごつい把手である。

D61-1～4は須恵器である。前記したように、大溝上面に重複している後世の溝状遺構の遺物と考えられるものである。1は口縁部がラッパ状に大きく開き、端部が丸くおさまるもので、短い頸部は直立して筒状を呈し、胴部も大きく開くようである。2～4は坏で、2は底部糸切りののちにナデを行い、体部は丸みをもち湾曲して立ち上がる。3は底部回転糸切りで、若干角張った立ち上がりを呈する。4は断面三角形の高台が付くものである。

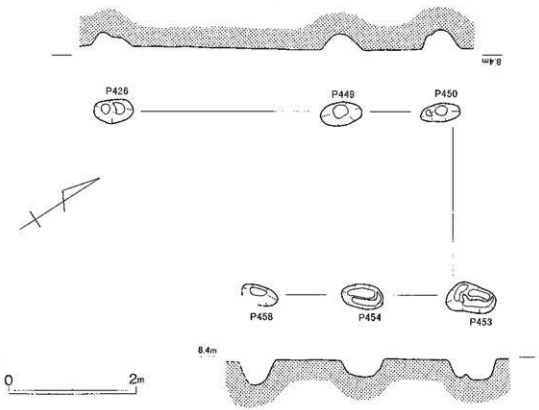
SB01（D62図）

B74、A・B-75Gr内、標高8.4m弱で検出した。P426とP449間に1基と南側調査区外に1基を想定し、3間×1間の桁行き5.5m、梁間2.8mを測り、N-34°-Eに位置する掘立柱建物跡である。各々の柱穴は楕円形を呈し、長軸60～80cm、短軸30～40cm、深さ30～40cmを測る。

出土遺物は、P449から土師器の小片3点、P458から須恵器の破片1点のみで、実測に耐えうるものは皆無である。以上より、時期を確定する資料は少ないが、中世期の範疇と捉えられるだろう。

SA01（D01図）

A～C-74・75Gr内で、検出長11m、幅1m範囲に小柱穴が弓なりに集中している。柵列跡ではないかと想定される。遺物の出土をほとんど見ず、確実な時期は不明である。



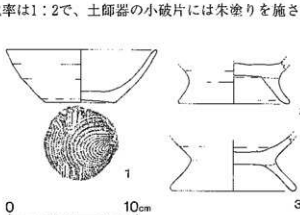
D62図　SB01実測図（S=1/60）

SE01（D63・D64図）

C68Gr内、標高8.4m強で検出した井戸である。平面楕円形を呈し、長軸1.45m、短軸1.2m、深さ1.6mを測り、N-45°-Eに位置する。断面袋状を呈し、下膨れとなる。底面には水溜部のような小さな落ち込みがある。

上面縁寄りからD63-2及び20cm大の礫などが出土し、3層上面からも遺物が集中して出土している。またどの層からも満遍なく小破片が出土した。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器が1袋分で、弥生土器は混入品である。須恵器と土師器の比率は1：2で、土師器の小破片には朱塗りを施されたものが10点近くある。D63-1～3は土師器である。



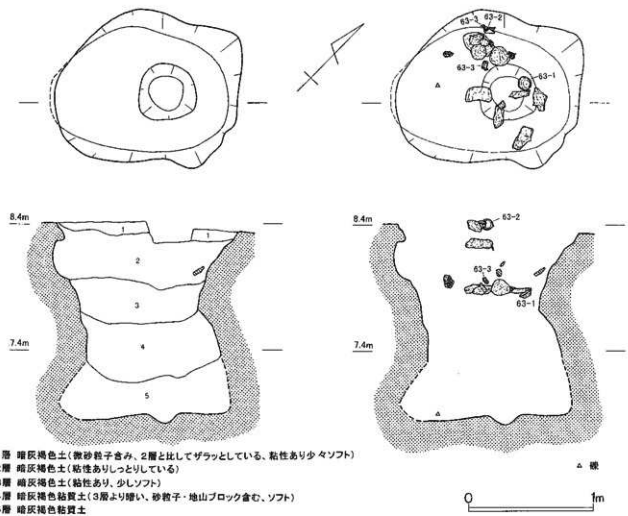
D63図　SE01出土遺物実測図（S=1/3）

1は坏で、回転糸切りを行った底部から体部へは末調整で、湾曲して立ち上がり、口縁端部はすっと伸びている。2・3は坏の高台部である。あまりシャープな作りではなく、若干厚手で縁端部が丸くおさまるものである。

以上の出土遺物などより、当遺構は10～11世紀に該当すると考えられる。

SE02（D65・D66図）

A・B-67・68Gr内、標高8.5m強で検出した井戸である。南側は調査区外へと延びるが、平

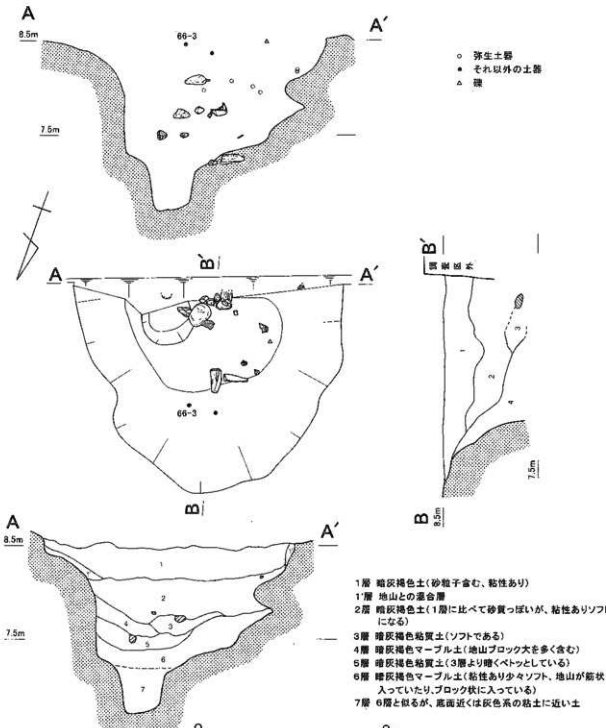


D64図　SE01実測図 (S=1/30)

面形態は楕円形と考えられ、検出長軸2.3m、短軸2.85m、深さ1.8mを測り、N-20°-Wに位置する。底面東寄りに直径50cmの深い落ち込みが確認された。これは水溜部と考えられる。本来の井戸は水溜部から若干広がった東壁から直径1m程の大きさのもので、6層が広がっているのは、本来存在していた井戸側を抜き取る際の掘り方で、6層は人工的に埋められ、その後は自然堆積に任せたため、3・5層は淀んだ状況を呈したものと考えられる。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器がコンテナ1/3箱分である。弥生土器は混入品と考えられるが、弥生遺構を破壊して当遺構は構築されたと考えられるくらい弥生土器の出土量もやや多い。下位からの出土遺物はなく、井戸の機能していた時期の遺物は確定できないが、他の出土遺物で上限は判断できよう。D66-1は須恵器坏の底部である。底部はヘラ切りのち回転ナデ調整を行い、体部へは稜線がしっかりしており角張って立ち上がる。D66-2～4は土師器である。2は底部回転糸切りの小皿、3は柱状高台付き皿で、底部糸切りを行っている柱状部は低く、皿部内面は同心円ナデにより深くなっている。4は坏口縁部で、やや厚みのあるかなり外開きのプロポーションを呈し、粉っぽく軽々した焼成のものである。

以上の出土遺物などより、当遺構は12～13世紀頃に廃棄されたものと考えられる。



D65図　SE02実測図 (S=1/40)

D66図　SE02出土遺物実測図 (S=1/3)

SE03（D67・D68図）

B68Gr内、標高8.4m強で検出した。直径90～100cmの不整円形を呈し、深さ110cmを測り、断面円筒形を呈する井戸である。全体に粘質っぽくソフトな覆土で、自然堆積に任せた状況を呈している。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小破片が1袋分で、上面及び1層中からの出土が主である。弥生土器は混入品である。D68-1は須恵器高坏の接合部から脚柱部にかけてである。坏部分に筒状の脚柱部を貼り付けている。細身の脚柱部ではあるが、器壁は厚め。D68-2は土師器坏の口縁部で、器壁の薄いものである。口縁端部は外面からのナデにより外反する。橙色を呈するが、焼成時のものか、朱塗りが施してあるものか判断できない。

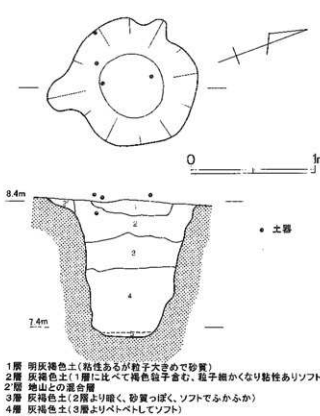
以上、時期決定には資料が少なく、8世紀以降としか判断できない。

SE04（D69～D72図）

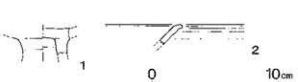
C-64・65Gr内、標高8.5m強で検出した井戸である。SD38・39、SK65に一部切られているが、平面形態は不整円形を呈し、直径4×3.8m、深さ2.2mを測り、最終断面形態は漏斗状を呈する。水溜部には1辺約80cmの木組みの井戸側が設置してある。

本来の井戸側は2～5・9・10層で、9層が横へ広がっているのは、調査時に湧水していて詳細な土層確認ができなかったためで、分層できる可能性は秘めている。6・7層及び7層下に位置する9層は、裏込め土と考えられる。木組み上位は廃棄する際に引き抜かれたというよりも、5層下位及び9層上面付近で調査時には湧水し始めているので、井戸側上位は乾燥による自然崩壊したものと考えられる。木組み外側のタテ板上端は人工的に折られたというよりも自然に腐食した様相を呈しているからである。

残存していた木組みは、内側から厚さ2～4cmもある1枚板を横方向に2段に組み合わせ、2段目は板厚さ1枚分外に組み上げている。その外側には2段目の中位レベルから下端の厚さ1.5～4cmある数枚の板を縦方向に3列重ねている。上端は前記したように自然腐食したように細く先尖りとなっている。木組みの展開図をフリーハンド描写した約1/30図をD70図に掲載した。内側の横板は1段目と1段目の組み合わせ方法が違っ



D67図　SE03実測図（S=1/20）



D68図　SE03出土遺物実測図（S=1/3）

ており、ほとんどの断面は角張ったままだが、南側の2段目東側と西側2段目北側は、斜めに削ってある。外側のタテ板には下端付近を焼いて硬化させたもの（D70図にはスクリーントーンを貼付）、1辺1～2cmの四角いほぞ穴を穿孔したものがある。

調査最終段階において、木組みから北西方向に1枚の板が横長に立てた状況で出土した。木組みの1段目の横板の幅を狭くしたような板であり、刳り込みをもつ。出土レベル、出土状況より、井戸側を設置する際に土止めとして使用したような状況と考えられた。木組みも引き抜いたあとで、湧水が激しく崩壊しそうであり、これ以上の調査は無理であると判断した。そのためこの板材の他に関係するようなものを確認することはできなかった。

板材以外の出土遺物は、各層から弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器が出土しており、コンテナ1箱分である。弥生土器は出土数も少なく混入品である。井戸側及び廃棄後に堆積した層からの出土遺物にはあまり時期差が見られない。

D71-1～9は須恵器である。1・2は蓋で、1はやや平形の宝珠状のつまみが付く。2は輪状つまみが付き、天井が水平ぎみに伸び、端部では若干反ってかえりへと続くようである。3～7は坏で、4～7は高台の付くものである。3は体部が丸く立ち上がり、口縁端部はつまみ出すように外反する。4・5は外開きでやや長めの高台が付き、5のように体部は湾曲して立ち上がる。5の外面底部付近には高台部分以外に自然釉がかかる。6・7は小さな高台が底部外縁寄りに付き、7のように体部は若干直線的に立ち上がる。8は皿である。底部から体部へは角をつけて直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦面をつくる。9は瓶の胴部破片である。湾曲した立ち上がりをみせる。

D72-1～18は土師器である。1～6は内外面に朱塗りを施した坏で、3・6は底面には施していない。1・2は器壁が薄く堅緻な焼成で、口縁部から屈曲をみせ丸い体部へと移行する。3～6は粉っぽく緻密な胎土で、底部から体部へは丸みをもって移行する。6のみは底部外縁に小さな高台を付け、外面的には角をもった立ち上がりをみせる。7はやや長めの高台が付き深く直線的な立ち上がりをみせる坏で、底部高台内にのみススが付着している。8～13は底部から体部へは角をもち直線的に立ち上がる坏で、底部回転糸切りを行う。14～18は甕の口縁部である。14はやや長めの口縁部で、端部は内側に曲げる。内面の方がきれいな調整である。15・16は分厚く短い口縁部で、粗雑な作りである。橙色を呈するのは朱塗りによるものなのか焼成時になったものなのか判断できない。17・18は頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや直線的である。

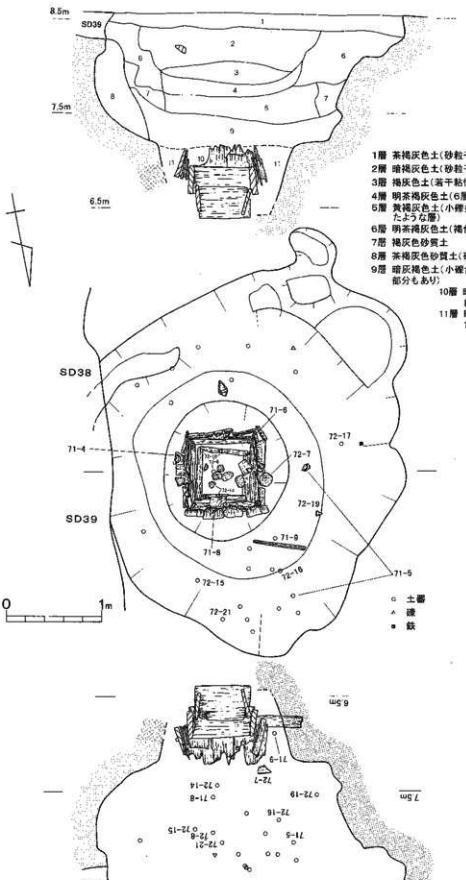
D-19・20は製塩土器と考えられる素焼きの手捏ね土器である。他の土器にはない小さなひび割れが全体的に入る。19より逆円錐状のプロポーションを呈し、尖底及び丸底が考えられる。この他に製塩土器と考えられる小片は10数点出土している。

D72-21は5層から出土した粘土塊である。重な約10cm立方体で見かけより軽く360gを測る。上面に凹っぽくなっている箇所があり、付着してたようで、籾の繊維質が観察される。

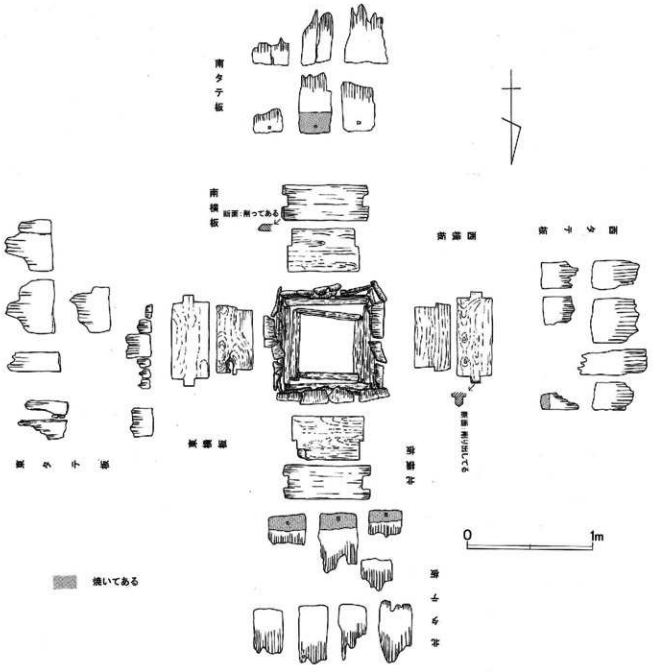
以上の出土遺物などより、当遺構は8～9世紀に該当すると考えられる。

SE05・06（D73・D74図）

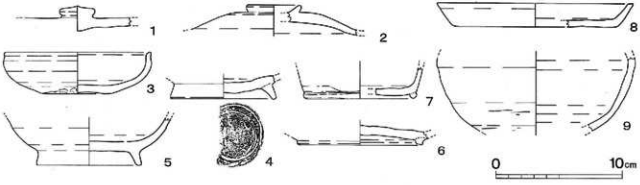
C69Gr内、標高8.3mで検出した。平面形態がだるま形を呈しているが、ふたつの遺構の重複である。各遺構は平面円形を呈する井戸である。大きい方SE05が小さい方SE06を切っており、各々直径2.4m、



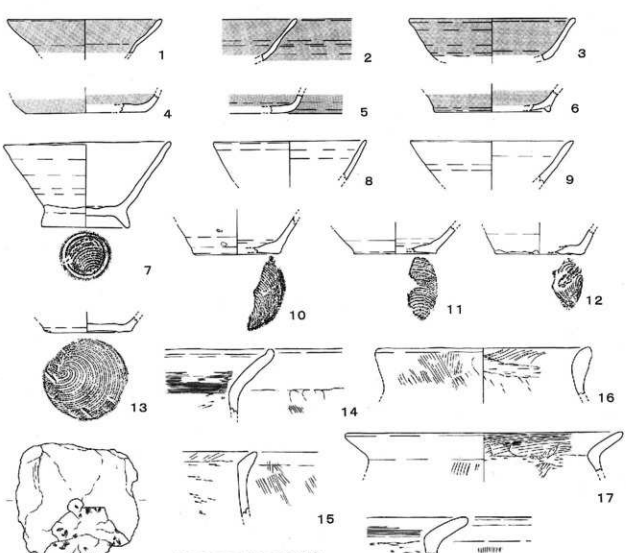
D69図 SE04実測図 (S=1/40)



D70図　SE04木組み井戸枠展開図（S=1/30）



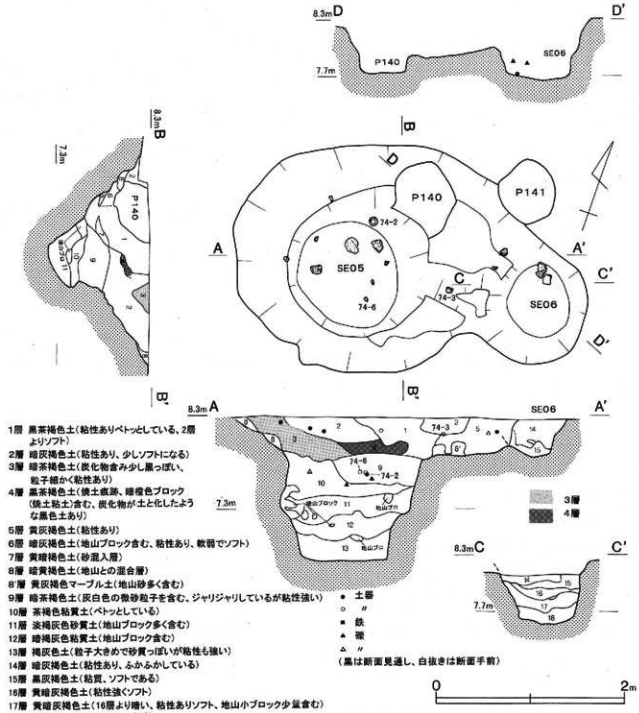
D71図　SE04出土遺物実測図1（S=1/3）



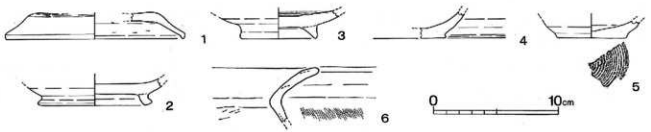
D72図　SE04出土遺物実測図2（S=⅓）

1.2m、深さ1.5m、70cmを測り、断面円筒形を呈する。SE05・06間にはフラットな面が存在する。SE06は粘性の強いソフトな覆土で、自然堆積したものと考えられる。

全体を上層から掘り下げ開始すると、SE05中央寄りに焼土痕を検出した。上面から鉄製品が1点出土していたため、鍛冶遺構の可能性を考え、この時点から遺構内に50cmメッシュを張り、徐々に掘り下げ、廃土はフルイにかけて磁石で鍛造剥片などを探した。上面から40cm下のフラットな面の底面と同レベルで焼土痕を含む3・4層がなくなり、以下遺構が深くなりそうなので、メッシュ掘りは終えた。土器以外に、炭化米が3×3×1cmのケースに12個分出土し、鉄屑が2点であった。特に3・4層から出土したようである。期待していた鍛造剥片は皆無で、予想外に多くの炭化米が出土しており、SE05を廃棄して埋めた後に、フラットな面を床面とした竪穴状の遺構が存在していた可能性がある。



D73図 SE05・06実測図 (S=1/40)



D74図 SE05出土遺物実測図 (S=1/3)